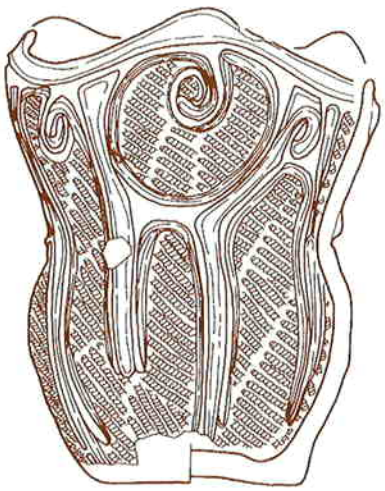
# 盛岡市内遺跡群

－平成 18・19 年度発掘調査報告－

| | |
|---|---|
| 大館町遺跡 | 第 77・78 次 |
| 宿田遺跡 | 第 11 次 |
| 宿田南遺跡 | 第 9 次 |
| 大宮北遺跡 | 第 11・13 次 |
| 館遺跡 | 第 20 次 |
| 西鹿渡遺跡 | 第 20・21 次 |
| 町田遺跡 | 第 15 次 |



2008. 3

盛岡市教育委員会

# 盛岡市内遺跡群

－平成 18・19 年度発掘調査報告－

| | |
|---|---|
| 大館町遺跡 | 第 77・78 次 |
| 宿田遺跡 | 第 11 次 |
| 宿田南遺跡 | 第 9 次 |
| 大宮北遺跡 | 第 11・13 次 |
| 館遺跡 | 第 20 次 |
| 西鹿渡遺跡 | 第 20・21 次 |
| 町田遺跡 | 第 15 次 |

2008. 3

盛岡市教育委員会

# 例　言

1　本書は、「盛岡市内遺跡群　―平成１８・１９年度発掘調査報告―」である。

2　本書の編集執筆は盛岡市遺跡の学び館　佐々木亮二、今野公顕、鈴木賢治、浅沼のぞみが協議して編集した。

3　遺構平面位置は、日本測地系　平面直角座標Ｘ系を座標変換した調査座標で表示した。

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 大館町遺跡 | X-32,000 | ・ Y+24,500 | 宿田遺跡 | X-32,000 | ・ Y+25,300 |
| 宿田南遺跡 | X-32,000 | ・ Y+25,000 | 館遺跡 | X-34,000 | ・ Y+22,000 |
| 大宮北遺跡 | X-35,000 | ・ Y+25,000 | 西鹿渡遺跡 | X-37,400 | ・ Y+28,600 |
| 町田遺跡 | X-43,500 | ・ Y+31,500 | | | |

4　高さは標高値をそのまま使用している。

5　土層図は堆積のしかたを重視し、線の太さを使い分けた。土層注記は層理ごとに本文でふれ、個々の層位については割愛した。層相の観察にあたっては『新版標準土色帖』(1994 小山正忠・竹原秀雄) を参考にした。

6　遺構記号は次のとおりとした（大館町・宿田・宿田南・大宮北・西鹿渡・町田遺跡)。

| 遺　構 | 記　号 | 遺　構 | 記　号 | 遺　構 | 記　号 |
|---|---|---|---|---|---|
| 竪穴住居跡 | RA | 土　坑 | RD | 溝 | RG |
| 建　物　跡 | RB | 竪　穴 | RE | 配石・集石 | RH |
| 柱　列　跡 | RC | 焼　土 | RF | 古　墳 | RX |

7　館遺跡の遺構記号は次のとおりとした。

| 遺　構 | 記　号 | 遺　構 | 記　号 | 遺　構 | 記　号 |
|---|---|---|---|---|---|
| 竪穴住居跡 | SI | 土坑・竪穴 | SK | 溝跡 | SD |
| 建　物　跡 | SB | 井戸跡 | SE | その他 | SX |
| 柱　列　跡 | SA | 築地・土塁 | SF | | |

8　調査体制　―平成 19 年度―

| | |
|---|---|
| 教育長 | 八巻恒雄 |
| 教育部長 | 宇夫方正人 |
| 教育次長 | 菅原康一 |
| 歴史文化課長兼遺跡の学び館 | 武石幸久 |
| 歴史文化課課長補佐 | 武藤英富（文化財史跡担当)、佐藤和男（遺跡の学び館担当） |
| 副主幹 | 千田和文 |
| 文化財主査 | 室野秀文、菊池幸裕、津嶋知弘 |
| 文化財主任 | 三浦陽一、神原雄一郎、権頭裕子 |
| 文化財主事 | 今野公顕、花井正香、佐々木亮二 |
| 文化財調査員 | 鈴木賢治、浅沼のぞみ |

［発掘調査・室内整理作業］

泉山紀代子、大川仁美、長内理恵、加藤久栄、嘉糠和男、川村久美子、工藤エキ、工藤繁子、工藤則子、熊谷あさ子、齋藤幸恵、齊藤静子、佐藤公一、佐藤美智子、澤野むつ子、武井久子、武田弘、谷藤貴子、千葉ふさ子、橋本良子、日野杉節子、平賀眞利子、藤村睦美、藤原亮子、松浦伸子、武蔵照子、村上美香、女鹿麗子

［地権者・調査協力］

岩手県教育委員会、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、葛巻健一、沢口護、菅原浩吉、高橋剛、法領田万一、堀江皓、吉田是巳

［御指導・御助言］

井上雅孝（滝沢村教育委員会）、早野浩二（愛知県埋蔵文化財センター）、松原典明（佛教石造文化財研究所）

# 目　　次

例　言
目　次
表目次・挿図目次・写真図版目次
Ⅰ　平成18・19年度発掘調査概要……1
Ⅱ　大館町遺跡第77・78次調査……5
Ⅲ　宿田遺跡第11次調査……37
Ⅳ　宿田南遺跡第9次調査……48
Ⅴ　大宮北遺跡第11・13次調査……55
Ⅵ　館遺跡第20次調査……60
Ⅶ　西鹿渡遺跡第20・21次調査……76
Ⅷ　町田遺跡第15次調査……94

# 表　目　次

第1表　平成18年度盛岡市内遺跡群発掘調査事業調査遺跡一覧……1
第2表　平成19年度盛岡市内遺跡群発掘調査事業調査遺跡一覧……1
第3表　宿田遺跡調査成果……38
第4表　宿田南遺跡調査成果……48
第5表　大宮北遺跡調査成果……55
第6表　館遺跡調査成果……63
第7表　西鹿渡遺跡調査成果……77
第8表　町田遺跡調査成果……97

# 挿　図　目　次

第1図　調査遺跡分布図……2
第2図　大館遺跡群全体図……6・7
第3図　大館町遺跡第77次調査全体図……9
第4図　RA2233竪穴住居跡……11
第5図　RA2233竪穴住居跡出土遺物（1）……12
第6図　RA2233竪穴住居跡出土遺物（2）……13
第7図　RA2233竪穴住居跡出土遺物（3）……14
第8図　RA2234竪穴住居跡断面図……15
第9図　RA2235・2236・2237・2238・2239・2240竪穴住居跡、RD6644・6645・6646・6647・6648土坑…17
第10図　RA2234・2235竪穴住居跡出土遺物……19

第11図　ＲＡ2236・2237・2238竪穴住居跡出土遺物……20
第12図　ＲＡ2239竪穴住居跡出土遺物……21
第13図　ＲＤ6639・6640・6641・6642・6643土坑、ピット……23
第14図　ＲＡ2240竪穴住居跡、ＲＤ6645・6647土坑出土遺物……25
第15図　ＲＧ505・506溝跡……26
第16図　大館町遺跡第78次調査全体図……28
第17図　遺物包含層出土土器（１）……30
第18図　遺物包含層出土土器（２）……31
第19図　遺物包含層出土石器（１）……32
第20図　遺物包含層出土石器（２）……33
第21図　遺物包含層出土石器（３）……34
第22図　遺物包含層出土石製品・土製品……35
第23図　宿田遺跡全体図……39
第24図　宿田遺跡第11次調査全体図……40
第25図　ＲＤ037・038・039・040・041・042土坑……42
第26図　宿田遺跡第７・11次調査出土遺物（１）……44
第27図　宿田遺跡第７・11次調査出土遺物（２）……45
第28図　宿田遺跡第７・11次調査出土遺物（３）……46
第29図　宿田遺跡出土古墳時代遺物……47
第30図　宿田南遺跡第９次調査全体図……50
第31図　遺物包含層出土遺物……51
第32図　土坑墓出土一字一石経……52
第33図　土坑墓、遺構外出土一字一石経……53
第34図　大宮北遺跡全体図……56
第35図　大宮北遺跡第11・13次調査全体図……58
第36図　ＲＧ015溝跡出土遺物……59
第37図　館・松ノ木遺跡全体図……61・62
第38図　館遺跡第20次調査全体図……64
第39図　ＳＤ03溝跡……66
第40図　ＳＤ04溝跡……67
第41図　ＳＤ05溝跡……68
第42図　土坑墓全体図……69
第43図　ＳＫ159・160・161・162・163・164・165・166・168土坑墓……72
第44図　ＳＤ04溝跡、ＳＫ161・163・164・166土坑墓出土遺物……73
第45図　西鹿渡遺跡全体図……78
第46図　西鹿渡遺跡第20・21次調査全体図……80
第47図　ＲＡ040竪穴住居跡（１）……81
第48図　ＲＡ040竪穴住居跡（２）……82

第49図　ＲＡ040竪穴住居跡出土土器……83
第50図　ＲＡ041竪穴住居跡（１）……85
第51図　ＲＡ041竪穴住居跡（２）……86
第52図　ＲＡ041竪穴住居跡出土土器（１）……86
第53図　ＲＡ041竪穴住居跡出土土器（２）……87
第54図　ＲＥ002竪穴跡……88
第55図　西鹿渡遺跡第１・５・12・18・20・21次調査区全体図……91・92
第56図　西鹿渡遺跡竪穴住居跡規模散布図……93
第57図　乙部遺跡群全体図……95・96
第58図　ＲＡ115竪穴住居跡……99
第59図　ＲＡ115竪穴住居跡出土遺物……100

## 写真図版目次

第１図版　大館町遺跡（第77次調査区全景、ＲＡ2233竪穴住居跡）
第２図版　大館町遺跡（第78次調査区全景、ＲＧ505溝跡）
第３図版　宿田遺跡（調査区全景、ＲＤ038・039・040土坑）
第４図版　宿田南遺跡（調査区全景、土坑墓）
第５図版　大宮北遺跡（第11次調査区全景、ＲＧ015溝跡）
第６図版　館遺跡（調査区全景、ＳＤ04溝跡）
第７図版　西鹿渡遺跡（第20次調査ＲＡ041竪穴住居跡・ＲＥ001竪穴跡、ＲＡ041竪穴住居跡遺物出土状況）
第８図版　西鹿渡遺跡（ＲＡ040竪穴住居跡、ＲＡ040竪穴住居跡遺物出土状況、）
第９図版　町田遺跡（調査区全景、ＲＡ115竪穴住居跡）
第10図版　大館町遺跡（ＲＡ2233出土遺物）
第11図版　大館町遺跡（包含層出土遺物１・２）
第12図版　大館町遺跡（包含層出土遺物３・４）
第13図版　大館町遺跡（包含層出土遺物５・６）
第14図版　宿田遺跡（包含層出土遺物１・２）
第15図版　宿田遺跡（包含層出土遺物３・４）
第16図版　宿田南遺跡（包含層出土遺物、一字一石経）
第17図版　大宮北遺跡出土遺物、館遺跡出土遺物、西鹿渡遺跡出土遺物

遺物の表現について

（1）　土器……土器の区分は、縄文土器・土師器・あかやき土器・須恵器に大別した。

a　縄文時代早期、前期初頭に属する土器の実測図・拓本の縮小率は１／２とし、その他は１／３とした。

b　挿図の土器の配列は器種・器形・文様モチーフ及び施文技法でまとめた。

c　縄文土器で稜線・沈線は実線・破線で表し、陰影は表現していない。

d　土師器の黒色処理や彩色されたものは、網目（スクリーントーン）で表現した。

（2）　石器

a　剥片石器の縮小率は１／２、礫石器は１／３とした。

b　石器の展開順序は、基本的に左側に表面（背面）、中央に右側面、右側に裏面（腹面・主要剥離面）を配列し、必要に応じて側縁・縦断面・横断面を付け加えた。

c　挿図の配列は出土層位順に配列し、さらに器種ごとにまとめ、配列した。

d　剥片石器の摩擦痕は網目（スクリーントーン）で示し、礫石器の自然面はドットで示した。

（3）　土製品・石製品

a　いずれも縮小率を１／２とした。

b　挿図の配列は出土した層位順とし、さらに器種ごとにまとめて配列した。

（4）　挿図中の記号番号は遺物の出土地点及び出土層位を表している。

（例）　ＲＡ７０１　　Ｂ層　　→　ＲＡ７０１竪穴住居跡埋土Ｂ層より出土

（例）　Ｇ６－Ａ２０　Ⅲ層

↓　↓　↓

※１　※２　※３

※１　大グリッド……遺跡の全体を５０ｍメッシュで区切り設定した。北西隅を起点に西から東にＡ・Ｂ・Ｃ・・・のアルファベット、北から南には１・２・３・・・のアラビア数字を付し、Ａ６、C12 など、両方の組み合わせでグリッド名を表した。

※２　小グリッド……大グリッドの中をさらに２ｍメッシュで区切り、北西隅を起点として西から東にＡ～Ｙのアルファベット、北から南に１～25 のアラビア数字を付し、グリッド名は両方の組合せで表した。

※３　遺物の出土層位を示す。

11. 遺構の表現について

各遺構の平面図で、複数の遺構を同一図面に表示する場合、説明する遺構は実線で表し、重複遺構は一点鎖線で表し、掘込面に層位差のある重複遺構は二点鎖線で表した。

12. 遺跡範囲については、過去の調査成果と遺跡の地形、遺物の散布状況をもとにして、推定の範囲を表している。

# Ⅰ　平成18・19年度発掘調査の概要

## 1. 平成18年度事業の概要

**市内の遺跡**　盛岡市内には、現在750箇所の遺跡が周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されている。近年では周知の遺跡内における大規模公共事業(区画整理、道路等)、各種民間開発、個人住宅建築等の土地開発にともなう事前の発掘調査や試掘調査を毎年80件前後実施している。平成18年度は発掘調査・試掘調査（公共事業・各種民間開発・個人住宅等）をあわせて23件実施した。

**発掘調査**　平成18年度の国庫補助事業（盛岡市内遺跡群発掘調査事業）で実施した発掘調査は、西鹿渡遺跡第20次調査、宿田南遺跡第9次調査の2件である。なお、宿田南遺跡は大量の経石を納めた経塚であることが判明し、年度内に調査終了が困難であるとして、平成19年度も継続することとした。

| 遺　跡　名 | 所　在　地 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|
| 西鹿渡遺跡(第20次) | 盛岡市三本柳2地割19-50～66 | 06.07.31<br>06.08.11 | 320㎡ | 個人宅進入路 |
| 宿田南遺跡(第11次) | 盛岡市前九年一丁目4番14号 | 06.04.17<br>06.06.21 | 126㎡ | 個人駐車場建築 |

第1表　平成18年度　盛岡市内遺跡群発掘調査事業調査遺跡一覧

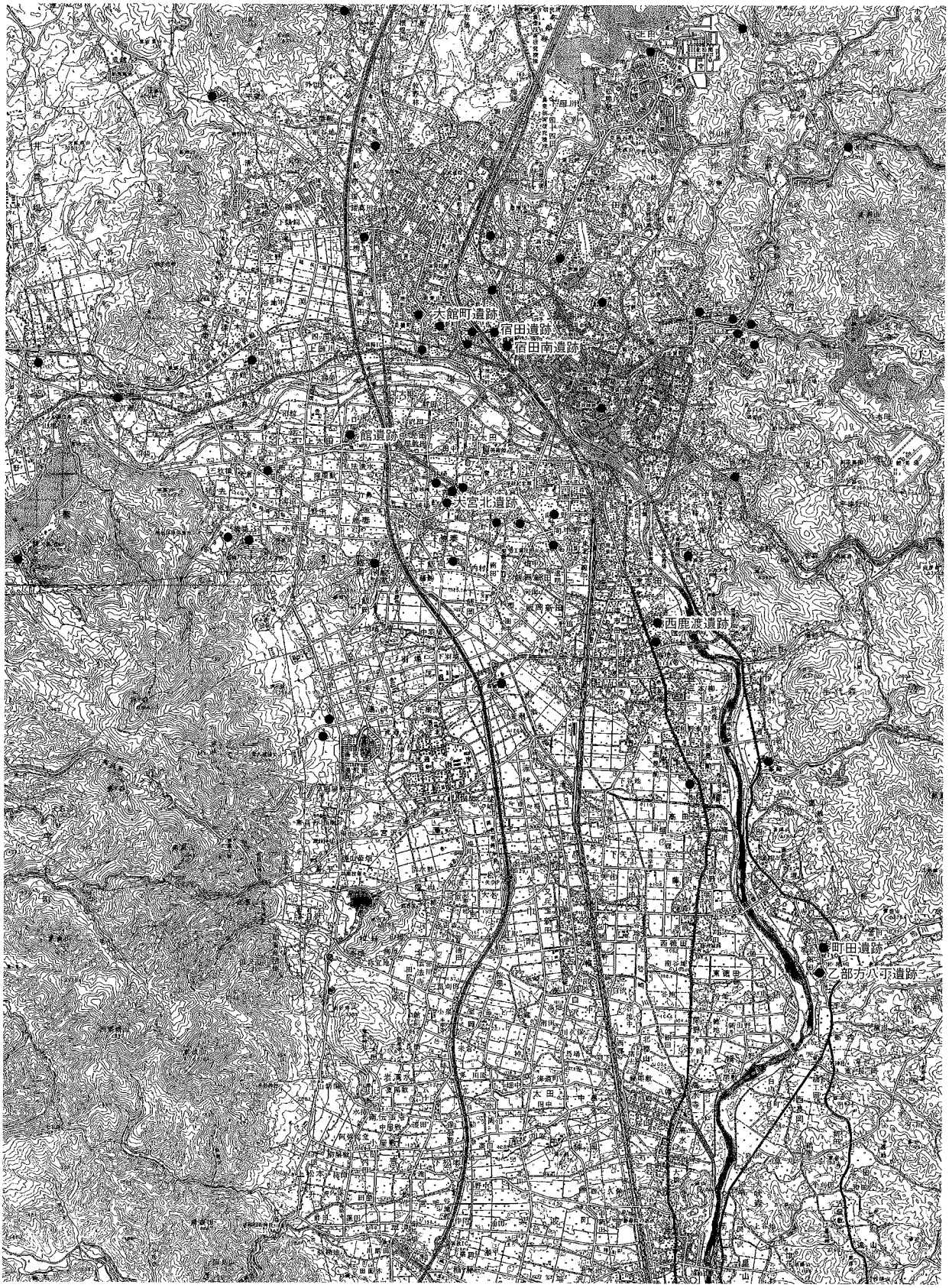
## 2. 平成19年度事業の概要

**発掘調査**　平成19年度は、発掘調査・試掘調査をあわせて25件実施した。このうち国庫補助事業(盛岡市内遺跡群発掘調査事業)で実施した発掘調査は、大館町遺跡第78次調査、宿田遺跡第11次調査、宿田南遺跡第9次、大宮北遺跡11次調査、館遺跡第20次調査、西鹿渡遺跡第21次調査、町田遺跡第15次調査、乙部方八丁遺跡第11次調査の7件である。

宿田南遺跡の報告についての詳細は、膨大な経石の出土量から本書では割愛し、平成20年度刊行予定の『盛岡市内遺跡群―平成20年度発掘調査報告書―』にあわせて掲載するものとした。

| 遺　跡　名 | 所　在　地 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|
| 大館町遺跡(第78次) | 盛岡市大新町209-1、210の一部 | 07.12.03<br>07.12.14 | 218㎡ | 範囲確認学術調査 |
| 宿田遺跡(第11次) | 盛岡市前九年二丁目104-53 | 07.04.27<br>07.05.16 | 56㎡ | 個人住宅建築 |
| 宿田南遺跡(第9次) | 盛岡市北夕顔瀬38 | 07.04.17<br>07.08.02 | 126㎡ | 個人駐車場建設 |
| 館遺跡(第20次) | 盛岡市上太田舘58 | 07.06.14<br>07.07.24 | 106㎡ | 個人住宅建築 |
| 大宮北遺跡(第11次) | 盛岡市本宮字小幅5-1 | 07.04.11<br>07.04.24 | 1,009㎡ | 個人住宅建築 |
| 西鹿渡遺跡(第21次) | 盛岡市三本柳2地割49-50～66 | 07.04.16<br>07.04.27 | 62㎡ | 個人住宅建築 |
| 町田遺跡(第15次) | 盛岡市乙部30地割39番1の一部 | 07.09.27<br>07.10.03 | 67㎡ | 個人住宅建築 |
| 乙部方八丁遺跡(第11次) | 盛岡市乙部32地割7番6、7番9 | 07.12.06 | 46㎡ | 個人住宅建築 |

第2表　平成19年度　盛岡市内遺跡群発掘調査事業調査遺跡一覧




第1図　調査遺跡分布図（1：100,000）

## 2. 盛岡の地形・地質

盛岡市は東に北上山地、西に奥羽山脈を擁し、北西には岩手山（2,038m）を望む。中央の北上平野には東北一の大河である北上川が流れる。北上山地と奥羽山脈は、構成する地質やその形成年代が異なるため、東西の地形の様相は大きく異なる。また、岩手山を含む八幡平火山地域の火山活動も盛岡の地質・地形に大きく影響を及ぼしている。

**北上山地**　北上山地は日本列島の中でも形成年代の古い地層が分布する地帯であり、地質構造上、古生代や中生代の堆積岩および花崗岩からなる。北上山地はその主要な境界である早池峰構造帯により、北部北上山地と南部北上山地に区分される。盛岡市東部は早池峰構造帯の西縁にあたる。これらの山地縁辺には、中津川・梁川などの北上川水系の河川やその支流により浸食された丘陵地や中位・低位の段丘が発達している。

盛岡市北東部を流れる中津川は、その最大支流である米内川と盛岡市浅岸付近で合流して水量を増し、市街地を西流して北上川と合流する。

梁川は盛岡市東部、北上山地の分水嶺となる岩神山（1,103m）の西斜面より流れ、最大支流である根田茂川と盛岡市水沢付近で合流し、閉伊街道（宮古街道）に沿って蛇行しながら、盛岡市東安庭付近で北上川と合流する。その流れは丘陵地や高位段丘面を開析して流域沿いに中・小規模な低位段丘を形成する。

**奥羽山脈**　奥羽山脈は北上山地に比べると比較的新しい新第三紀からなる非火山地域と、第四紀に形成された新規火山地域に区別される。岩手山はこの新規火山地域に含められる。奥羽山脈より東流する雫石川は、雫石盆地を形成し盛岡市北の浦付近において急激に流路が狭められ、北上平野に流れ込む。雫石川北岸および南岸ではその地質が大きく異なる。

雫石川北岸には、岩手山起源の大石渡岩屑なだれ堆積物を基盤とした火山灰砂台地(滝沢台地)が広がっている。その範囲は盛岡市北部から滝沢村北部まで広範囲に及んでいる。

雫石川南岸は、雫石川の流路転換によって運ばれた土砂で形成された沖積段丘が広がっている。その規模は東西約8.0km、南北3.5kmで、段丘上からは主に古代から江戸時代にかけての遺跡が多数確認されている。現在は宅地造成や圃場整備が進み、ほとんど旧地形を留めていないが、航空写真などを見ると旧河道の流路が残された水田や古い住宅街の区割り等で確認できる。

## 2. 歴史環境

**旧石器時代**　旧石器時代の遺跡は、市街地から北東へ約 11km の玉山区藪川字外山に小石川遺跡が所在する。山間部の小河川に臨む台地上にあり、後期旧石器時代の遺跡で木葉形尖頭器や石核、剥片、台石などが出土している。また、対岸には細石刃や石核の採集された大橋遺跡がある。

**縄文時代**　滝沢台地上に立地する大新町遺跡・大館町遺跡・安倍舘遺跡からは、草創期の「爪形文土器」が出土している。滝沢台地上には後続する縄文時代早期の遺跡が数多く存在し、前述の３遺跡以外にも大館堤・館坂・前九年・宿田遺跡などで早期初頭～末葉の土器が出土している。

縄文時代前期は日本列島全体で温暖化が進み、遺跡数が増加し大規模な集落が出現する時期である。しかし、盛岡周辺に限っては遺跡の数は少ない。

縄文時代中期になると遺跡数は爆発的に増加する。雫石川南岸の沖積平野を除く、広い地域に分布する。繋Ｖ・大館町・柿木平・川目Ｃ遺跡など、主要河川の流域に大規模な拠点集落が営まれるようになる。

後期から晩期には、集落の規模は小さくなり、遺跡数も減少する。柿木平遺跡や大葛遺跡では後期初頭の集落。萪内遺跡や湯壷遺跡では後期から晩期の集落が確認されている。また、宇登遺跡・上平遺跡では晩期の遺物包含層、手代森遺跡では晩期の集落と遺物包含層が確認されている。

**弥生～古墳**　弥生時代の遺跡数は少ないが、浅岸地区の向田遺跡、堰根遺跡で前期（砂沢式期）や終末期（赤穴式期）の土器を伴う竪穴住居跡が確認されている。古墳時代の集落遺跡は現在のところ確認されていないが、永福寺山遺跡や薬師社脇遺跡で北海道系の形態をもつ土坑墓群が検出されている。永福寺山遺跡では後北C2-D式土器と古式土師器が共伴し、薬師社脇遺跡では古式土師器が埋納されていた。

**古　　代**　古墳時代終末から奈良時代にかけて、雫石川南岸等沖積面の遺跡が飛躍的に増加する。７世紀中ごろには上田蝦夷森古墳群、８世紀代には太田蝦夷森古墳群、高舘古墳群などの終末期古墳が築造され、野古Ａ遺跡、台太郎遺跡、百目木遺跡などで安定した集落が形成される。

平安時代になると、803年に陸奥国最北端の城柵志波城が造営された。志波城は陸奥北部地域の経営拠点であると同時に、北方地域との結節点でもあったが、雫石川の水害を理由に、813年～814年に徳丹城（矢巾町）へ移転している。その後９世紀中ごろより、陸奥北部の経営は鎮守府胆沢城に集約されていく。志波城東側の林崎遺跡、大宮北遺跡、小幅遺跡では、集落の中に官衙的な建物群が存在している。同様の建物跡は堰根遺跡でも確認されており、在地の有力者が律令体制を背景に台頭する様子がうかがえる。この時期の集落は沖積面だけではなく、上猪去・猪去館・新道Ⅱ遺跡など、山麓台地や丘陵の斜面部にも拡がりをみせる。

10世紀後半から12世紀までの遺跡はひじょうに少ないが、大新町遺跡や上堂頭遺跡、高松神社裏遺跡では10世紀後半頃の掘立柱建物や竪穴と土器が出土している。

浅岸堰根遺跡や稲荷町遺跡で12世紀の村落や屋敷、居館の遺構が確認されている。また、内村遺跡などでは常滑の大甕が出土しているほか、大宮遺跡では大溝から12世紀～13世紀のかわらけが出土している。

**中　　世**　鎌倉時代から室町時代については、台太郎遺跡で居館と村落跡、墓域等が確認されている。戦国期の盛岡周辺は、南部氏、斯波氏などの衝突が激しかった地域であるが、市内に数多く分布する城館跡の多くは、室町時代から戦国時代のものと考えられている。

# Ⅱ．大館町遺跡　（第77・78次調査）

## １．遺跡の概要

**遺跡の位置**　大館町遺跡は、盛岡市の中心部より北西へ約3.5kmの盛岡市大新町・大館町地内に位置する。遺跡中央部には畑地が残されているが、周辺部は近年の開発による宅地化が進んでいる。遺跡の範囲は東西約220m、南北約250mと推定され、標高は132～137mである。

**地形・地質**　滝沢台地の南東部は北上川に沿って南へ舌状に張り出しており、諸葛川、木賊川、巣子川などで開析され、幾筋もの埋没谷が入りこんでいる。大館町遺跡はその滝沢台地南縁の緩斜面に立地している。周辺には大新町・大館堤・小屋塚遺跡など縄文時代早期～中期を中心とした遺跡が分布し、各遺跡は埋没谷や旧河道などによって画されている。

滝沢台地上部は厚い火山灰で覆われており、下層より外山火山灰、渋民火山灰、分火山灰が堆積する。大館町・大新町遺跡で遺構・遺物が確認されるのは、最上部の堆積物となる分火山灰層中からであり、主に岩手山・秋田駒ケ岳に噴出起源をもつ火山灰で構成される。

分火山灰層は、下層の十和田起源による八戸火山灰（層厚１～２cm）から表土直下までの堆積土を総称している。大館町・大新町遺跡では第Ⅰ層（表土下に堆積する黒色土）・Ⅱ層（黒色・黒褐色土主体―生出スコリア含）・Ⅲ層（暗褐色土主体）・Ⅳ層（黒褐色土主体－赤褐色スコリア含）・Ⅴ層（暗褐色土主体）・Ⅵ層（褐色土主体―上位より柳沢軽石・小岩井軽石・八戸火山灰）の６層に大別され、遺構・遺物が確認されているのは、Ⅵ層上部（縄文時代草創期）より上位の層からである。

**周辺の遺跡**　大館町遺跡が立地する滝沢台地は数多くの遺跡が立地している。台地南縁には西より大館堤遺跡（縄文時代早期～中期・弥生時代・古代）、大館町遺跡（縄文時代早期～中期・弥生時代・古代）、大新町遺跡（縄文時代草創期～後期・古代）、小屋塚遺跡（縄文時代早期～後期・古代）、前九年Ⅰ遺跡（縄文時代早期～中期・古代）、前九年Ⅱ遺跡（縄文時代中期・古代）、宿田遺跡（縄文時代早期・続縄文時代・古代）、館坂遺跡（旧石器時代？・縄文時代早期）、安倍館遺跡（縄文時代草創期～中期・続縄文時代・中世）などの旧石器から中世にかけての遺跡が分布している。

台地縁辺下に発達する沖積段丘面には稲荷町遺跡（古代末～中世・近世）、里館遺跡（中世）などの比較的新しい時代の遺跡が立地する。

## ２．調査成果

### （１）これまでの調査

**過去の調査**　古くから大館町遺跡は土器・石器が出土することで知られており、昭和31年には岩手大学草間俊一教授によって初めて学術調査が行われ（草間俊一 1958「先史期」『盛岡市史』第１分冊１）多量の縄文時代の遺物が層位ごとに出土することが確認された。また、昭和39年には土器の変遷を明らかにするための調査が実施されている。出土した土器は大館１類（前期初頭）・２類（円筒下層Ｄ式類似

土器）・３類（円筒上層Ａ式類似土器）・４類（円筒上層Ｂ式類似土器）・５類（大木７ａ式）・６類（円筒上層Ｃ式類似土器）・７類（大木８ａ－2 式）に細分され、特に７類とされた土器は大館町遺跡を特色付ける土器としている（草間俊一　1958 「盛岡市史」第１分冊１）。

その後も岩手大学板橋源教授および同大学考古学研究会により、宅地造成に伴う発掘調査が昭和 48・50・51 年に行われ、その結果 30 棟以上の縄文時代中期の竪穴住居跡が重複して検出された（昭和 51（1976）年調査については、岩手大学考古学研究会 1978『大館町遺跡』）。これらの調査により、大館町遺跡は長期にわたる大規模な集落遺跡であることが確認された。

盛岡市教育委員会による発掘調査は、昭和 55 年の遺跡範囲確認および宅地造成に伴う第１次調査以降、現在まで 78 次にわたり実施されている。これまでの調査で縄文時代中期中葉から後葉、いわゆる大木８ａ・８ｂ式期を主体とした竪穴住居群をはじめ、遺跡北西から南西にかけては前期末葉から中期中葉の密度の濃い遺物包含層が確認されている。また、昭和 55 年年度の第１次調査で検出されたＲＡ 102 竪穴住居跡より大木８ｂ式土器が層位を異にして出土しており、上層（Ｂ層）より隆沈線による渦巻文等を特色とする土器群が（大木８ｂ－２式）、下層（Ｄ層）より口縁部に隆沈線による文様帯を持ち体部に沈線による文様を施す土器群（大木８ｂ－１式）が出土するなど土器編年を考えるうえで重要な成果が得られている。

これまでに検出された遺構数はおおよそ竪穴住居跡 500 棟、竪穴 20 棟、掘立柱建物跡 15 棟、土坑 500 基である。これらの成果から大館町遺跡は北上川上流域における拠点的な集落であり、その重要性から平成 12 年度に岩手県指定史跡に指定されている。

### （２）平成 16・17・19 年度の調査

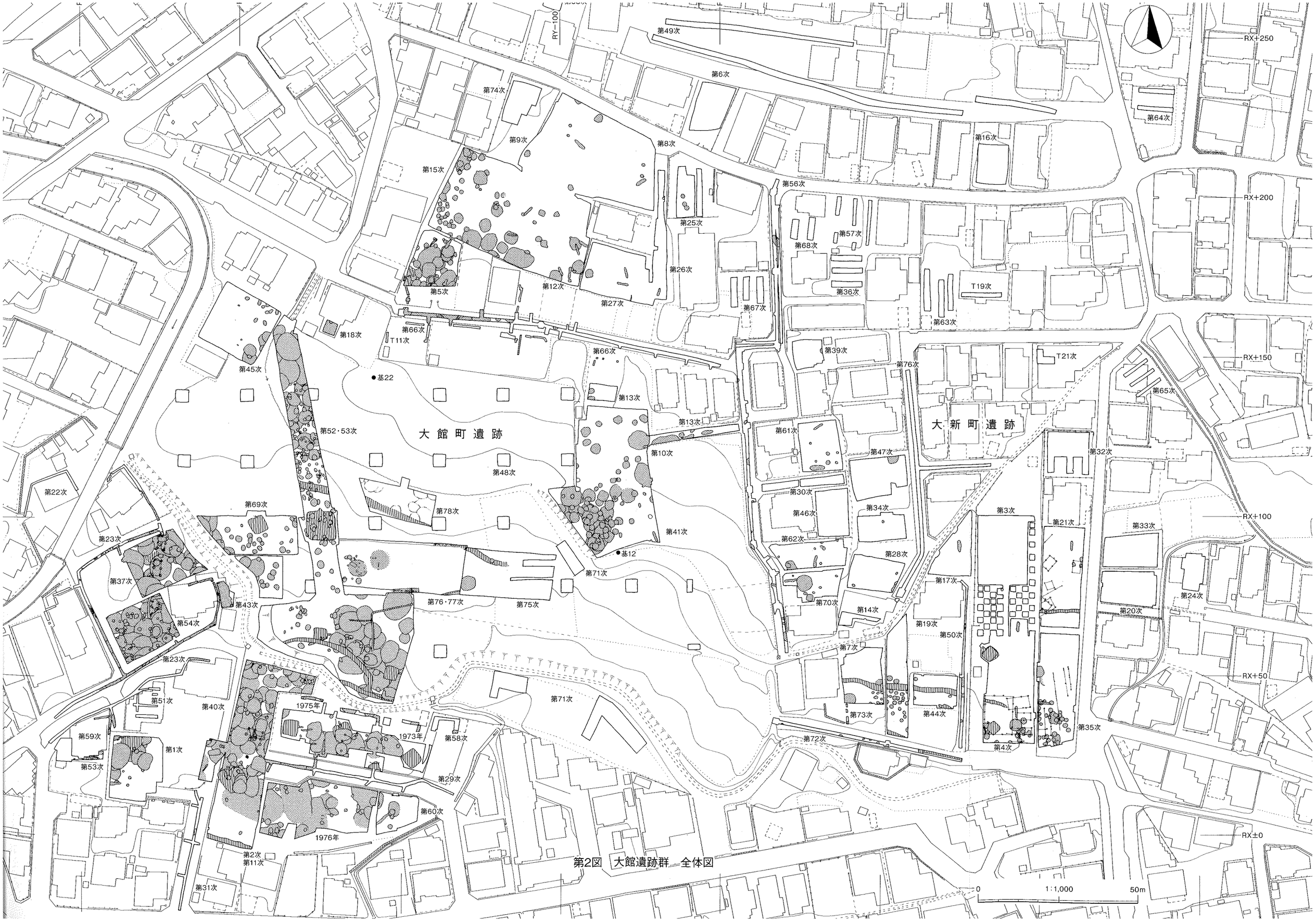
平成 16・17・19 年度の大館町遺跡の発掘調査は、範囲確認調査として第 77・78 次調査を実施した。

**第 77 次**　第 77 次調査区は大館町遺跡の中央部に位置する。調査期間は平成 16 年 11 月 08 日～12 月 14 日と平成 17 年 11 月 28 日～12 月 21 日である。調査面積は 570 ㎡である。

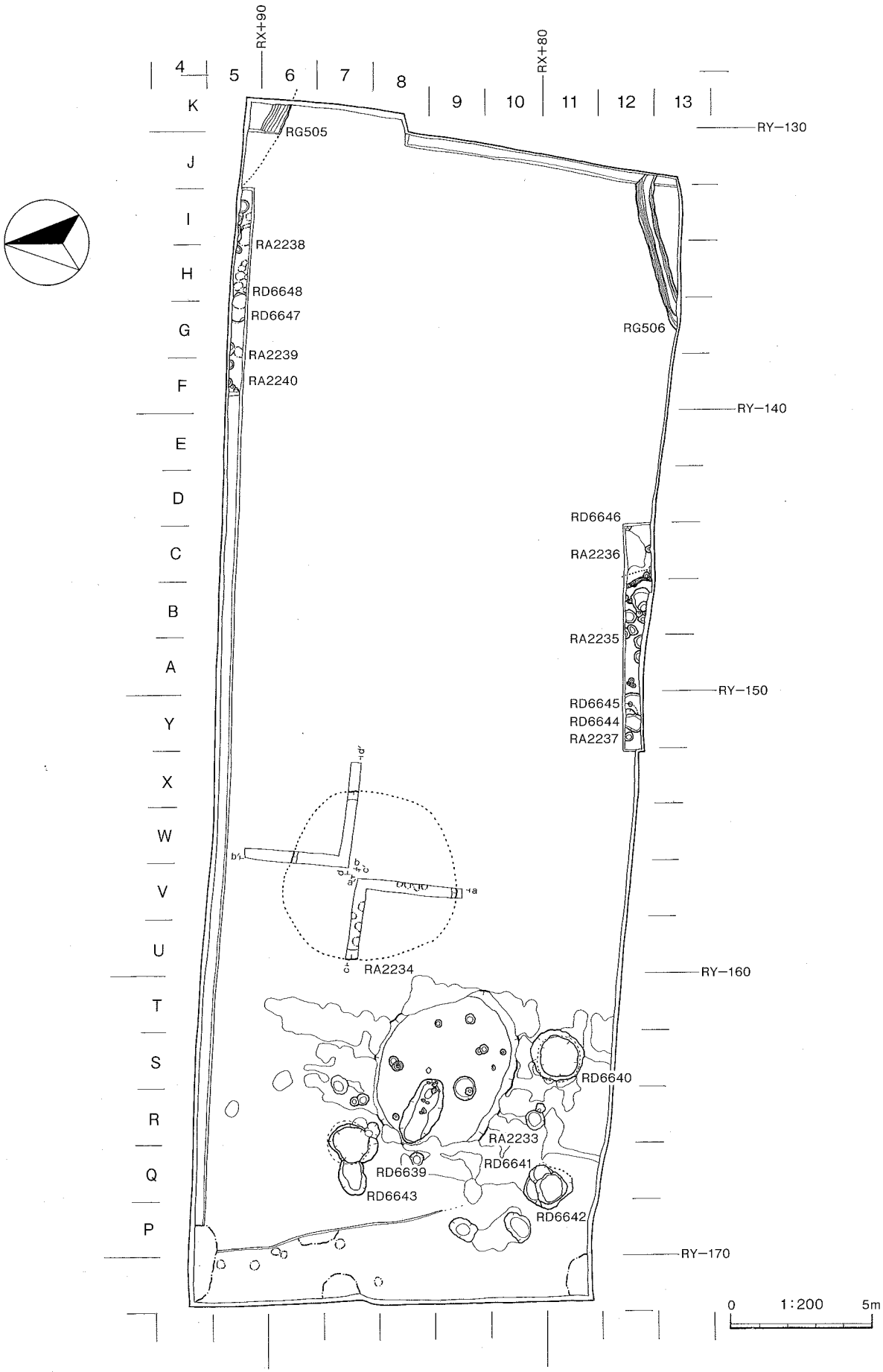
確認した遺構は、縄文時代中期の竪穴住居跡８棟と土坑 10 基、平安時代の溝跡１条、時期不明の溝跡１条である。平安時代の溝跡は東西方向に延びており、第 75 次調査区で検出されたＲＧ５０５溝跡と同一のものと考えられる。

**第 78 次**　第 78 次調査区は第 77 次調査区の北側に位置する。調査期間は平成 19 年 12 月３日～12 月 14 日で、調査面積は 218 ㎡である。

確認した遺構は、縄文時代中期の竪穴住居跡 15 棟、平安時代の溝跡１条である。溝跡は 75・77　次調査で確認されたＲＧ505 溝跡と同一のものである。溝跡は一部精査を行ったが、竪穴住居跡は検出のみに留めた。




第2図　大館遺跡群　全体図




第3図　大館町遺跡第77次調査全体図

## ３．第７７次調査

### (1) 縄文時代の遺構・遺物

**遺　構**　縄文時代の遺構は竪穴住居跡、土坑、ピットおよび縄文時代中期の遺物包含層が検出された。今次調査は範囲確認調査のため、ＲＡ2233 竪穴住居跡および土坑のみ精査を行い、それ以外の竪穴住居跡はサブトレンチで一部確認した。

**ＲＡ２２３３竪穴住居跡（第４図）**

**時　期**　縄文時代中期　**平 面 形**　楕円形　**重複関係**　なし

**規　模**　長軸上端 6.12m・下端 5.64m、短軸上端 4.84m・下端 4.28m、深さ 0.58m。

**掘 込 面**　削平　**検 出 面**　Ｉａ層（耕作土）直下

**埋　土**　自然堆積によるもので、層相によりＡ～Ｅ層に大別される。

Ａ層―黒褐色土を主体とし、粒状の褐色土を少量含む層で２層に細分される。

Ｂ層―黒褐色土を主体として粒～小塊状の褐色土を含む層である。各層は褐色土の混入の割合で４層に細別される。Ｂ４層は暗褐色土を多量に含む。

Ｃ層―黒褐色土を主体とし、粒～小塊状の褐色土を多量に含む層である。各層は褐色土の混入する割合で５層に細分される。

Ｄ層―黒褐色土を主体として粒状の褐色土を少量含む、壁際の崩壊土である。４層に細分される。

Ｅ層―暗褐色土を主体に、粒状の褐色土を多量に含む層で、炉の埋土である。

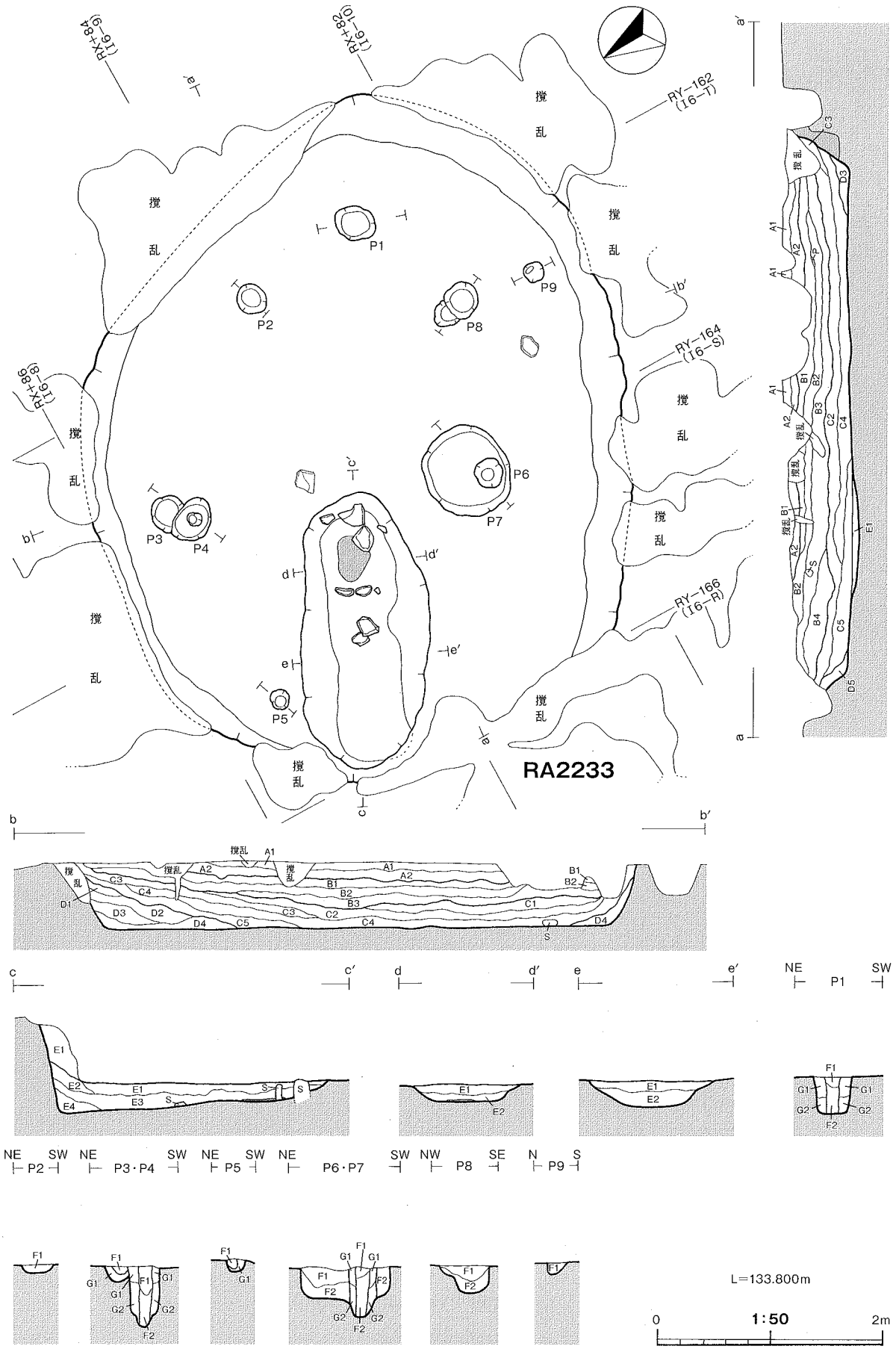
**炉の状態**　住居の長軸線上、西壁寄りに複式炉を検出している。規模は長軸 2.46m、短軸 1.12mで、燃焼部の周囲に炉石が残存している。火床面は長軸 0.42m、短軸 0.38mである。

**壁の状態**　外傾して立ち上がる。深さは 0.58mをはかる。　**床面の状態**　ほぼ、平坦である。

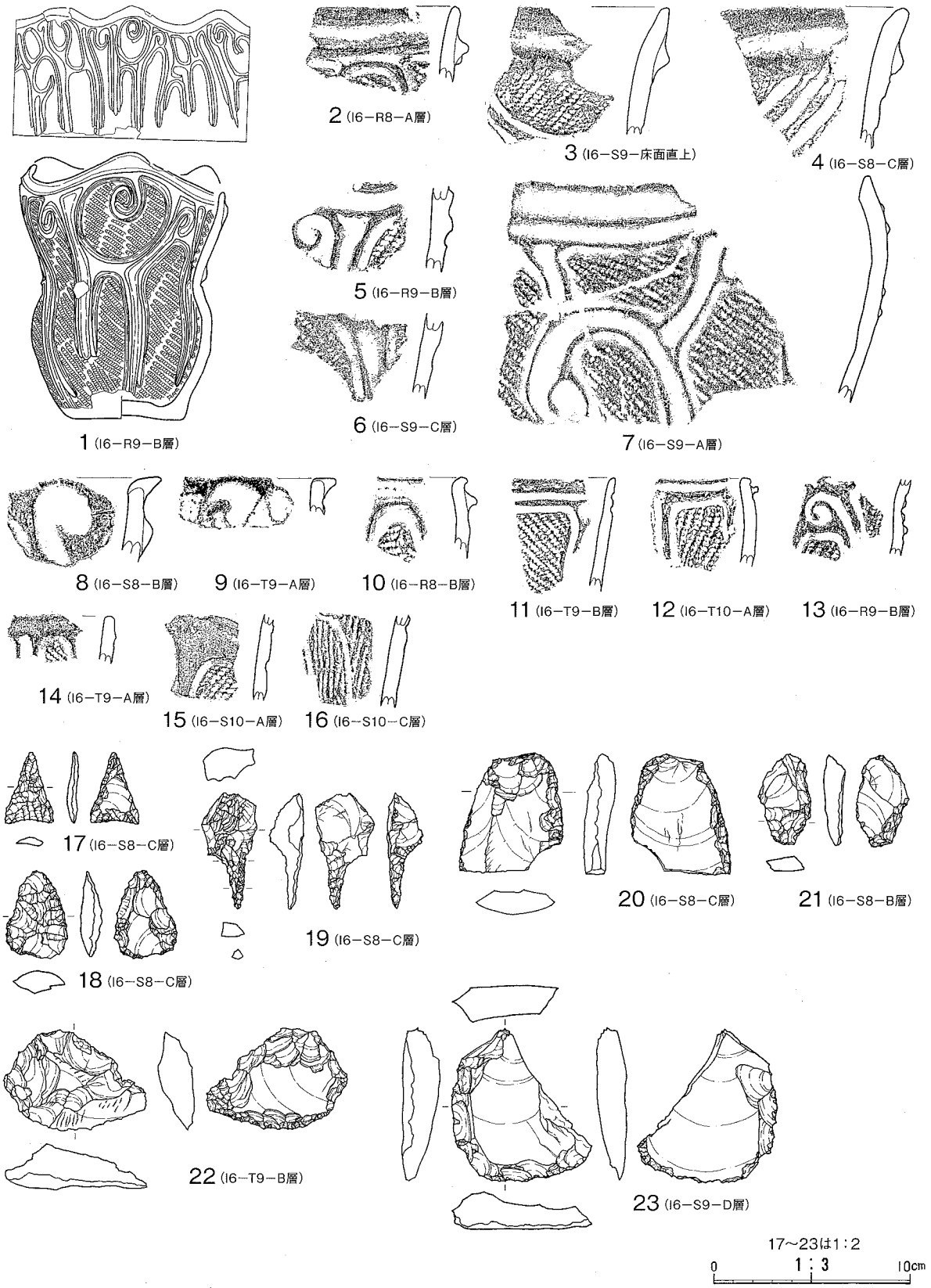
**柱　穴**　床面上に９口（Ｐ１～９）検出された。Ｐ１・Ｐ４・Ｐ６は掘込が深く柱痕跡も認められるが、それ以外のピットの掘込は浅い。埋土は柱痕跡（Ｆ層）がしまりのない黒色土で、堀方（Ｇ層）が黒褐色土と褐色土の混合土である。各ピットの深さはＰ１－0.33m、Ｐ２－0.08m、Ｐ３－0.14m、Ｐ４－0.54m、Ｐ５－0.12m、Ｐ６－0.42m、Ｐ７－0.28m、Ｐ８－0.26m、Ｐ９－0.10mである。

**土　器**　**（第５図１～16）** 1 は体部に屈曲を持ち口縁部が波状を呈する小型深鉢である。波頂部の下には隆沈線による小渦巻が施され、連結する縦位の楕円文が配される。２～４は隆沈線を施す深鉢の口縁部である。５・６は隆沈線による渦巻文・懸垂文を施す深鉢体部である。７は隆沈線による渦巻文、連結文を施し外反する浅鉢の口縁部である。８・９は簡略化された渦巻文を波頂部下に施す深鉢の口縁部である。10～12 は隆沈線により楕円文あるいは縦位の区画文を施す深鉢の体部である。13 は屈曲する深鉢の体部である。簡略化された渦巻文の下に楕円文を配する。14 は沈線による楕円文を施す深鉢の口縁部である。15 は沈線により楕円文を施した深鉢体部である。区画外は磨り消されている。16 は沈線により楕円文を描く深鉢体部である。地文には縦位の撚糸文が施されている。

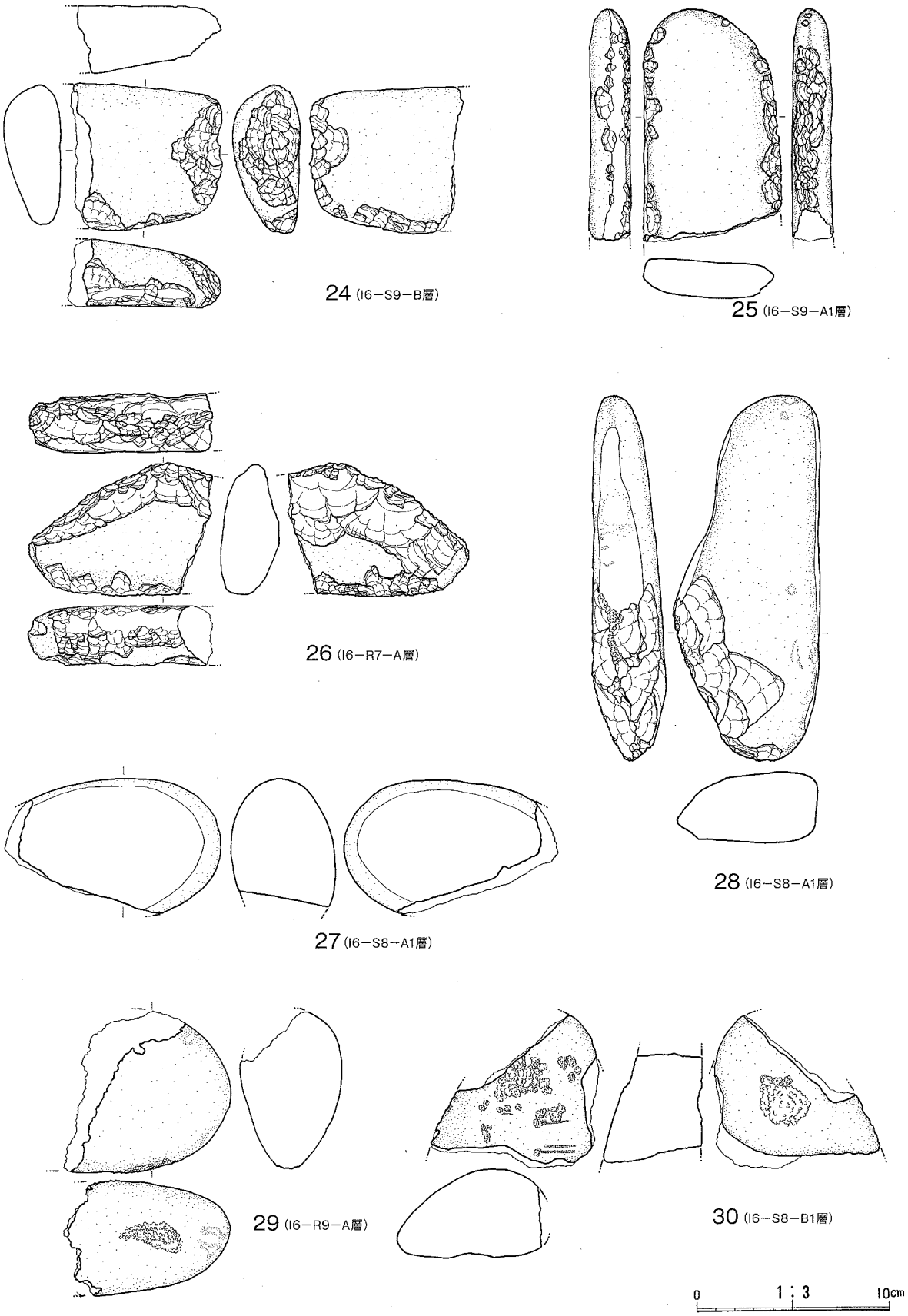
**石　器**　**（第５図 17～23・第６図・第７図）** 17 は凹基無茎鏃で、腹面に一次剥離が残っている。18 は石鏃の未製品と考えられる。19 は石錐で錐部は両面調整が施されている。20～23 は削器である。20 は側縁部の両面に調整が施される。21 は両面の片側縁のみに調整を施している。22 は両面から周縁調整



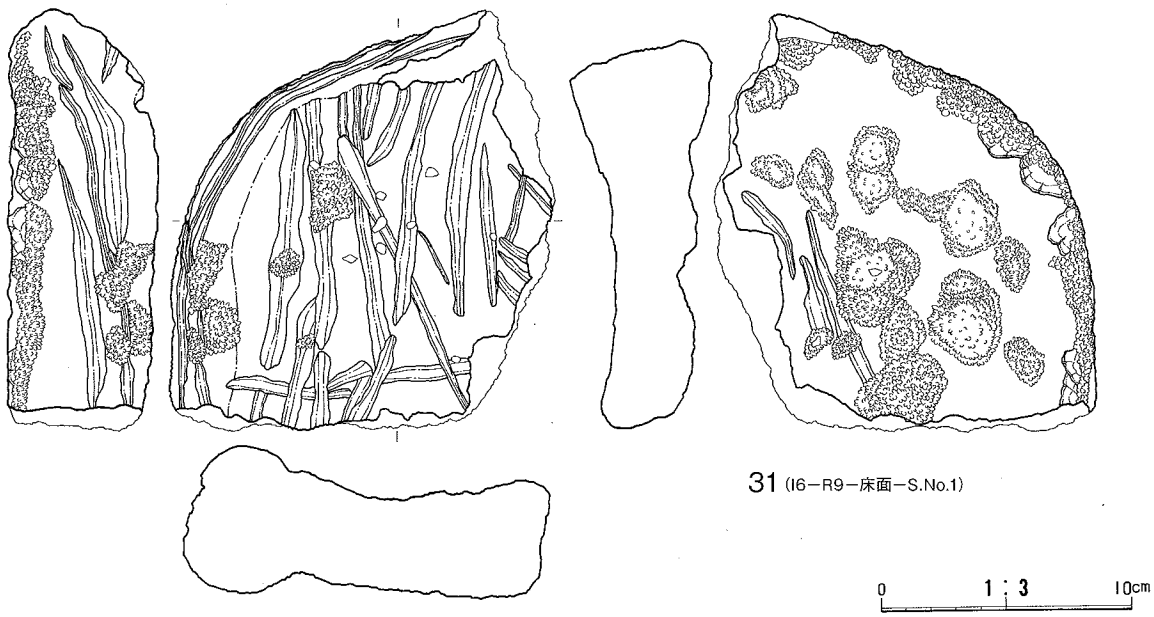

第4図　RA2233竪穴住居跡




第5図　RA2233竪穴住居跡出土遺物（1）




第6図　RA2233竪穴住居跡出土遺物（2）




第7図　RA2233竪穴住居跡出土遺物（3）

され、腹面には古い剥離が残る。23 は両面とも主要剥離面が残されている。24〜27 は敲打磨石である。いずれも半月状を呈し、側縁に敲打磨面が認められる。28 は両面使用された磨石である。29・30 は敲石である。29 は側縁、30 は両面に使用痕が認められる。31 は石皿で、両面とも使用されている。表面は溝状の条痕が、裏面は敲打痕が多く残されている。

**ＲＡ２２３４竪穴住居跡（第３図、第８図）**

**時　期**　縄文時代中期　　**平 面 形**　円形か？　　**重複関係**　不明

**規　模**　長軸上端 6.04m・下端 5.64m、短軸上端 4.84m・下端 4.28m。

**掘 込 面**　削平　　**検 出 面**　Ｉａ層（耕作土）直下

**埋　土**　自然堆積によるもので、層相によりＡ〜Ｄ層に大別される。

Ａ層―黒褐色土を主体に、粒状の褐色土を少量含む層である。

Ｂ層―暗褐色土を主体として粒〜塊状の褐色土を多量に含む層である。

Ｃ層―黒褐色土を主体として粒状の褐色土を多量に含む層である。各層に比べしまりがある。

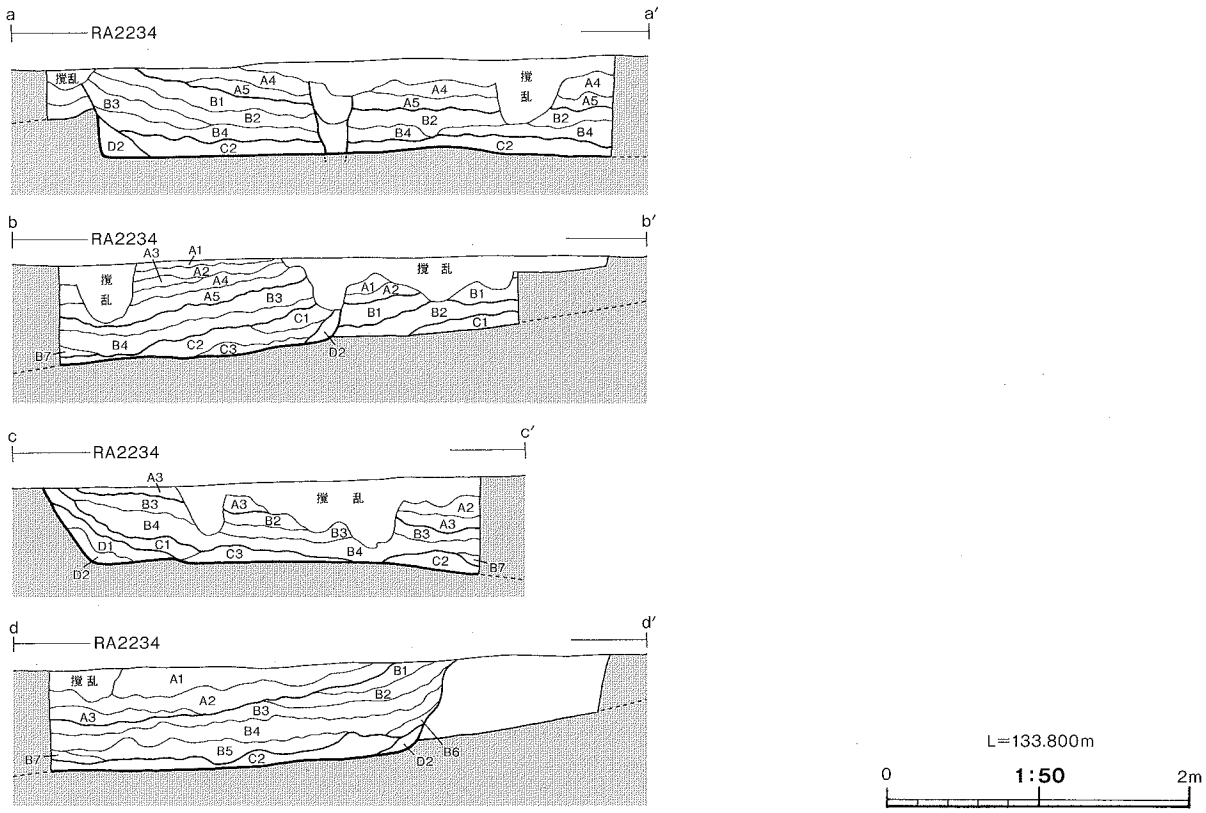
Ｄ層―暗褐色土を主体として黒褐色土を粒状に含み、スコリア粒を多量に含む層である。

**壁の状態**　外傾して立ち上がる。深さは 0.58mをはかる。　　**床面の状態**　ほぼ、平坦である。

**柱　穴**　未検出

**土　器**　**（第 10 図１・２）** １は隆沈線を施す深鉢の口縁部である。２は隆沈線による渦巻文の両脇に刺突を施す円文が配される浅鉢の口縁部である。

**石　器**　**（第 10 図３〜７）** ３は全面調整を施す石錐である。４は掻器で下端部に調整を施す。５は自然面を残す両面調整石器である。６・７は敲石である。６は長軸両端に、７は全面に敲打痕が認められる。




第8図　RA2234竪穴住居跡断面図

**ＲＡ２２３５竪穴住居跡（第９図）**

**時　　期**　縄文時代中期　　**平 面 形**　東壁、西壁の一部を検出したのみで全体形は不明である。

**重複関係**　ＲＡ2236・2237 を切る。　**規　　模**　東壁、西壁間は 5.36mをはかる。

**掘 込 面**　削平　　**検 出 面**　Ｉａ層（耕作土）直下

**埋　　土**　自然堆積によるもので、層相によりＡ～Ｄ層に大別される。

Ａ層―暗褐色土を主体に、粒状の褐色土をやや多量に含む層で、８層に細分される。

Ｂ層―黒褐色土を主体として褐色土を粒状に含む。４層に細分される。

Ｃ層―黒色土を主体として粒状の褐色土を少量含み、しまりのない層である。

Ｄ層―黒褐色土を主体として粒状の褐色土をやや多量に含み、しまりのない層である。

Ｅ層―周溝の埋土である。

**壁の状態**　外傾して立ち上がる。深さは 0.74mをはかる。　**床面の状態**　ほぼ、平坦である。

**柱　　穴**　床面下で柱穴を検出したが、この住居跡に伴うかは不明である。

**周　　溝**　東壁ぞいに検出した。幅 0.08～0.16m、深さ 0.14mをはかる。

**土　　器**　**（第 10 図８～12）** ８・９は深鉢の口縁部である。８は沈線による区画内に刺突を充填させるものである。９は口縁が外傾し、頚部および体部に横位平行沈線が施される。10・11 は沈線が施される深鉢の体部である。12 は口縁部文様帯に隆沈線による渦巻文と楕円文を施す浅鉢である。

**石　　器**　**（第 10 図 13）** 13 は敲打磨石で、片面と両側縁に敲打痕が認められる。

**ＲＡ２２３６竪穴住居跡（第９図）**

**時　　期**　縄文時代中期　　**平 面 形**　両壁をそれぞれ他の遺構に切られているため不明である。

**重複関係**　ＲＡ2235、ＲＤ6646 に切られる。　**規　　模**　検出した部分は 1.88mをはかる。

**掘 込 面**　削平　　**検 出 面**　Ｉａ層（耕作土）直下

**埋　　土**　自然堆積によるもので、層相によりＡ～Ｂ層に大別される。

Ａ層―黒褐色土を主体に粒状の褐色土を少量含む層である。

Ｂ層―黒色土を主体としてやや多量の褐色土を粒状に含む層である。

**壁の状態**　不明。深さは 0.74mをはかる。　**床面の状態**　ほぼ、平坦である。

**柱　　穴**　床面下で柱穴を検出したが、この住居跡に伴うかは不明である。

**土　　器**　**（第 11 図１～３）** １は波状口縁でＣ字状把手を持つ深鉢である。２・３は深鉢体部である。２は横位平行沈線、３は隆沈線が施される。

**石　　器**　**（第 11 図４）** ４は掻器である。背面左側縁部下部に調整を加えている。

**ＲＡ２２３７竪穴住居跡（第９図）**

**時　　期**　縄文時代中期　　**平 面 形**　東壁の一部を検出したのみで全体形は不明である。

**重複関係**　ＲＡ2235 に切られ、ＲＤ6644・6645 を切る。　**規　　模**　検出した部分は 1.96mをはかる。

**掘 込 面**　削平　　**検 出 面**　Ｉａ層（耕作土）直下

**埋　　土**　自然堆積によるもので、層相によりＡ～Ｄ層に大別される。

Ａ層―黒褐色土を主体に、粒状の褐色土と焼土を少量含む層で、３層に細分される。

Ｂ層―黒色土を主体として褐色土を粒状に含む層である。

Ｃ層―黒褐色土を主体にして粒状の褐色土をやや多量に含む層で、２層に細分される。

Ｄ層―黒色土を主体として粒～塊状の褐色土を多量に含み、２層に細分される。

Ｅ層―暗褐色土を主体として粒～塊状の褐色土多量に含む。下部にある土坑の凹みを埋めるための貼り床の一種と考えられる。

**壁の状態**　外傾して立ち上がる。深さは 0.92mをはかる。　**床面の状態**　ほぼ、平坦である。

**柱　　穴**　床面下で柱穴を検出したが、この住居跡に伴うかは不明である。

**土　　器**　**（第 11 図５）** ５は口縁が波状を呈しやや内湾する小型深鉢である。

**石　　器**　**（第 11 図６）** ６は敲石で長軸端部に敲打痕が多く認められる。

**ＲＡ２２３８竪穴住居跡（第９図）**

**時　　期**　縄文時代中期　　**平 面 形**　西壁は他の遺構に切られ、東壁は未検出のため、全体形は不明である。

**重複関係**　ＲＤ6648 に切られる。　**規　　模**　検出した部分は 3.58mをはかる。

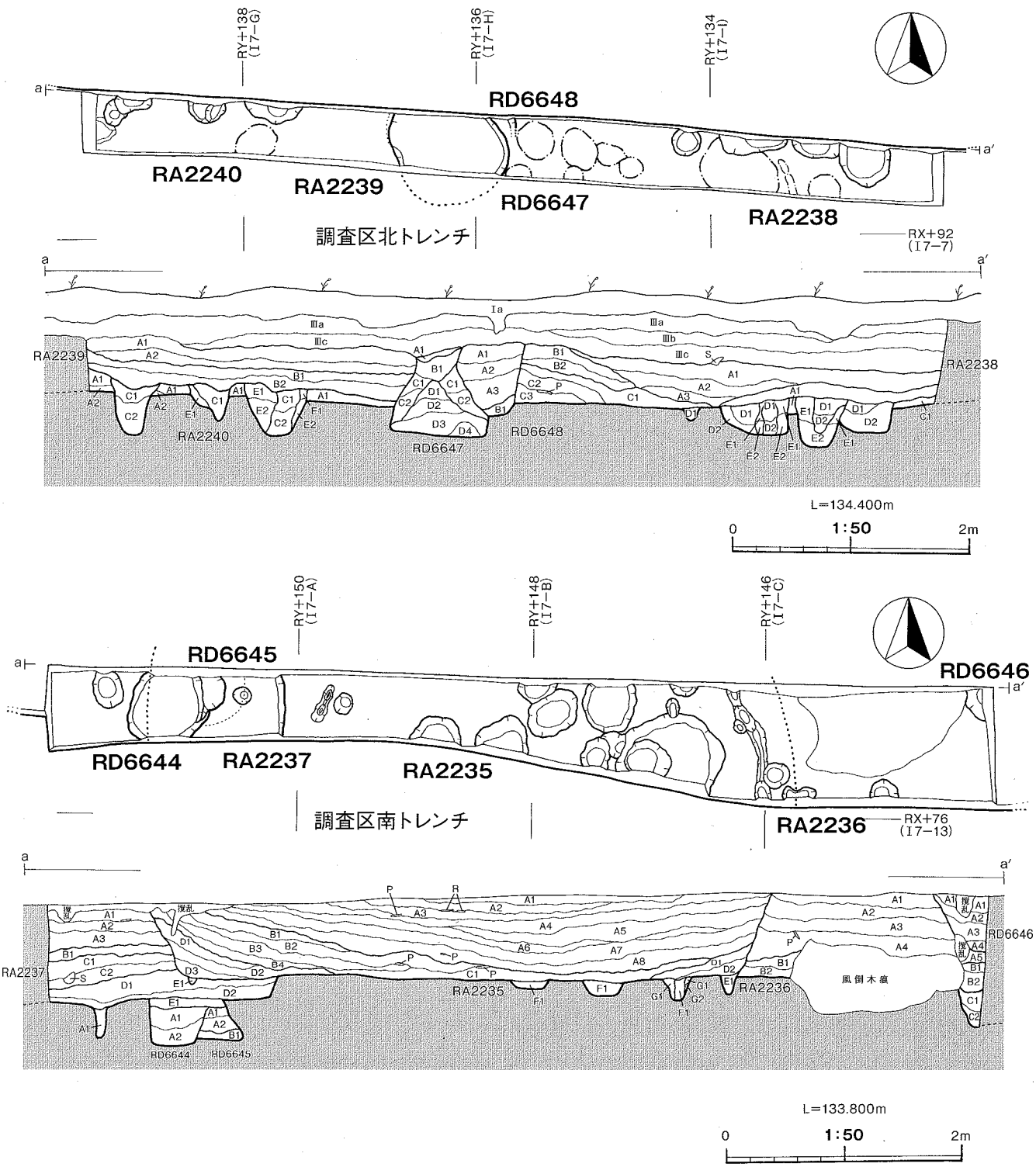
**掘 込 面**　Ⅲｃ層下　　**検 出 面**　Ⅲｃ層下

**埋　　土**　自然堆積によるもので、層相によりＡ～Ｃ層に大別される。

Ａ層―黒褐色土を主体に、粒状の褐色土とスコリア粒を少量含む層である。しまりのある層で３層に細分される。

Ｂ層―黒褐色土を主体として粒状の褐色土をやや多量に含む層である。２層に細分される。

Ｃ層―暗褐色土を主体に、粒状の褐色土を多量に含みしまりのない層である。３層に細分される。




第9図　RA2235・2236・2237・2238・2239・2240竪穴住居跡、
RD6644・6645・6646・6647・6648土坑

**壁の状態**　不明。深さは0.48mをはかる。　**床面の状態**　ほぼ、平坦である。

**柱　穴**　床面下で12口検出したが、そのうち5口のみを精査した。床面からの深さはP1−0.12m、P2−0.24m、P3−0.25m、P4−0.42m、P5−0.24mである。

**土　器**　**（第11図7〜9）** 7・8は沈線による懸垂文を施す深鉢底部である。9は縄文主体の深鉢で口縁部はやや直立ぎみに立ち上がる。

**石　器**　**（第11図10・11）** 10・11は削器である。10は側縁部に両面調整を施している。11は両面に自然面を残し、背面のみに調整を施す。

### ＲＡ２２３９竪穴住居跡（第９図）

**時　　期**　縄文時代中期　　**平 面 形**　東壁は他の遺構に切られ、西壁は未検出のため全体形は不明である。

**重複関係**　ＲＤ6647 に切られ、ＲＡ2240 を切る。　**規　　模**　検出した部分は 2.72mをはかる。

**掘 込 面**　Ⅲｃ層下　　**検 出 面**　Ⅲｃ層下

**埋　　土**　自然堆積によるもので、層相によりＡ～Ｂ層に大別される。

Ａ層―暗褐色土を主体に粒状の褐色土を少量含む層である。２層に細分される。

Ｂ層―黒褐色土を主体として褐色土を粒状に少量含む層である。２層に細分される。

**壁の状態**　不明。深さは 0.74mをはかる。　**床面の状態**　ほぼ、平坦である。

**柱　　穴**　床面下で柱穴を５口検出し、このうち４口を精査した。Ｃ層は黒色土を主体に、しまりのない層である。Ｄ層は黒褐色土を主体とし、褐色土が粒状に混入する層である。床面からの深さはＰ１－0.46m、Ｐ２－0.24m、Ｐ３－0.38m、Ｐ４－0.29mである。

**土　　器**　**（第 12 図１～３）** １はＳ字状把手を口縁部に持つ深鉢である。２は口縁部文様帯に沈線による波状文を配するキャリパー形深鉢である。３は縦位短沈線文上に山形沈線文を施し、その下部に刺突列を配する深鉢の口縁部である。

**石　　器**　**（第 12 図４～10）** ４・５は石鏃である。４は凸基有茎鏃で木葉形を呈する。５は凸基短径鏃で先端部欠損している。６は両面調整を施す箆状石器である。７は礫器で、８は両面に使用痕が認められる磨石である。９は敲石で両面および長軸端部に敲打痕が認められる。９は石皿の破片である。両面使用されており、表面には筋状の条痕が２条認められる。

### ＲＡ２２４０竪穴住居跡（第９図）

**時　　期**　縄文時代中期　　**平 面 形**　東壁は他の遺構に切られ、西壁は未検出のため全体形は不明である。

**重複関係**　ＲＡ2239、ＲＤ6647 に切られる。　**規　　模**　検出した部分は 2.60mをはかる。

**掘 込 面**　不明　　**検 出 面**　ＲＡ2239 竪穴住居跡床面下

**埋　　土**　ＲＡ2239 の貼床を兼ねている。人為堆積によるもので、黒褐色土を主体とし塊状の褐色土を多量に含む。硬くしまる層である。

**壁の状態**　不明。深さは 0.18mをはかる。　**床面の状態**　ほぼ、平坦である。

**石　　器**　**（第 14 図１・２）** １は自然面を残す削器で、背面右側縁部が使用により抉れた状態になっている。２は敲石で片面のみ使用されている。

### ＲＤ６６３９土坑（第 13 図）

**時　　期**　縄文時代　　**平 面 形**　不整楕円形　　**重複関係**　ＲＤ6643 を切る。　**掘 込 面**　削平

**検 出 面**　Ｉａ層（耕作土）直下　**規　　模**　長軸上端 1.74m・下端 1.79m、短軸上端 1.44m・下端 1.48m

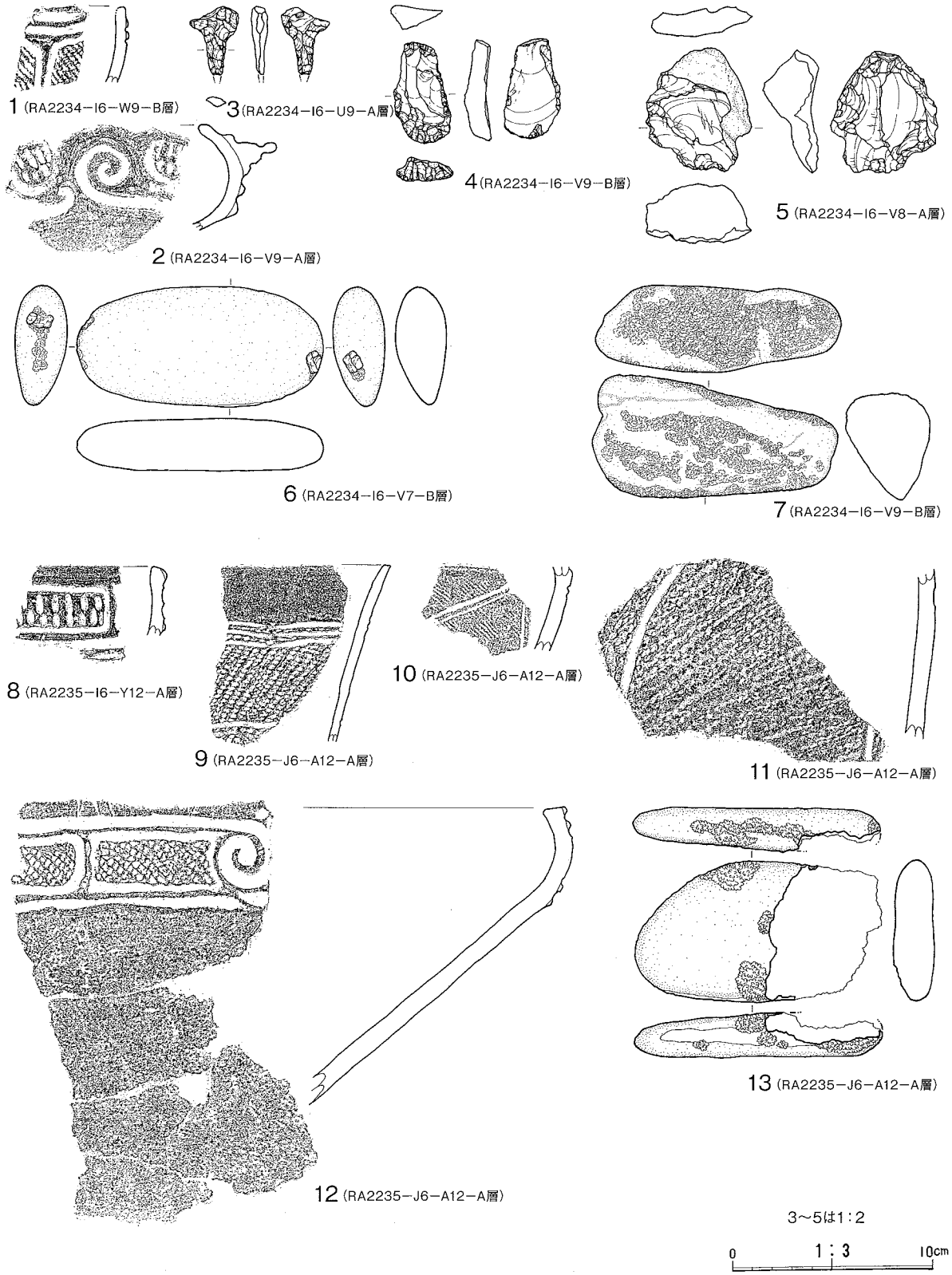
**埋　　土**　自然堆積によるものである。Ａ～Ｃ層に大別される。各層においてスコリア粒を少量含む。

Ａ層―黒褐色土を主体とする層で、粒～塊状の暗褐色土の混入の割合で５層に細分される。

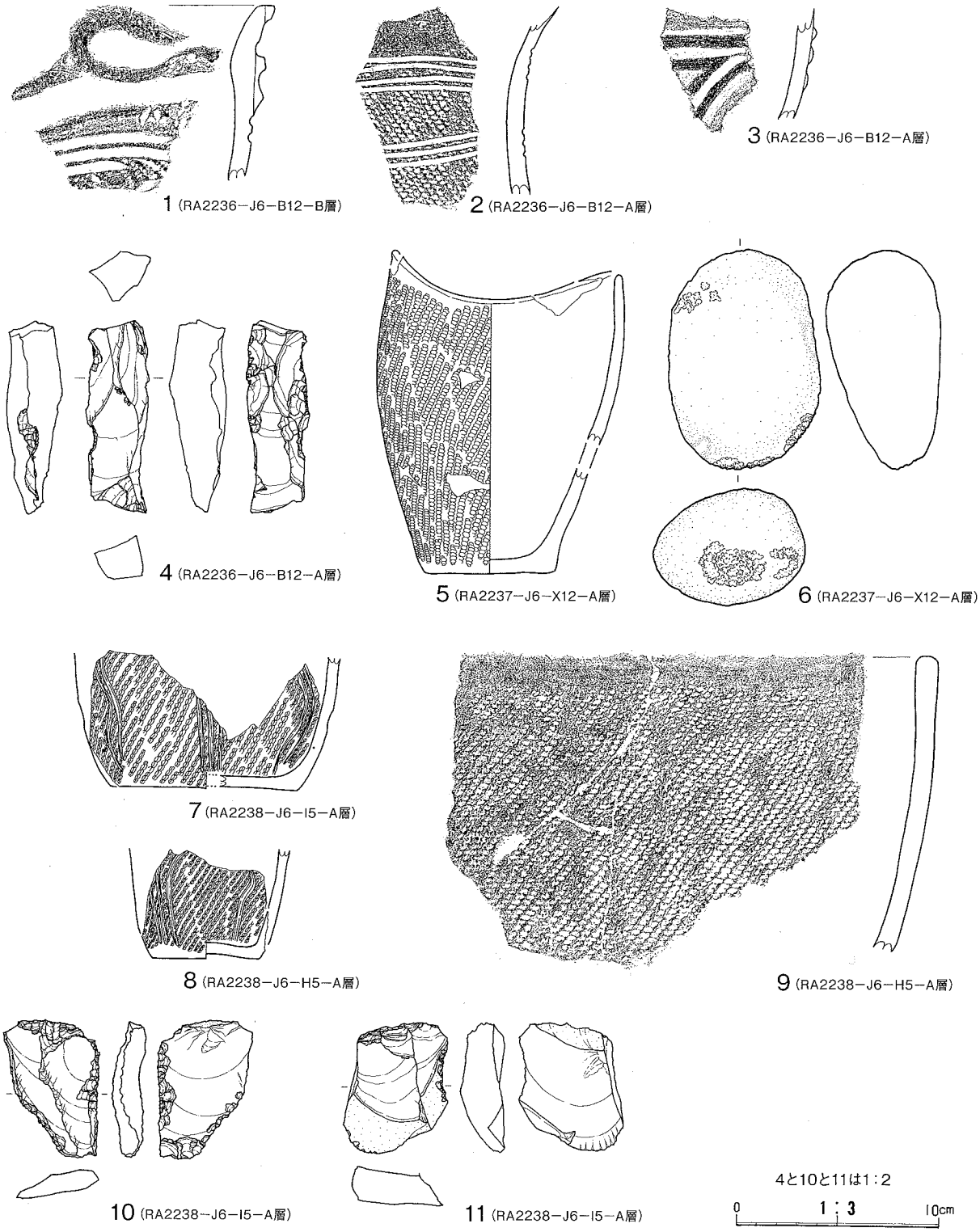
Ｂ層―暗褐色土を主体とする層で、塊状の褐色土を多量に含む。３層に細分される。

Ｃ層―黒褐色土を主体とする層で、粒～塊状の暗褐色土を多量に含む。５層に細分される。

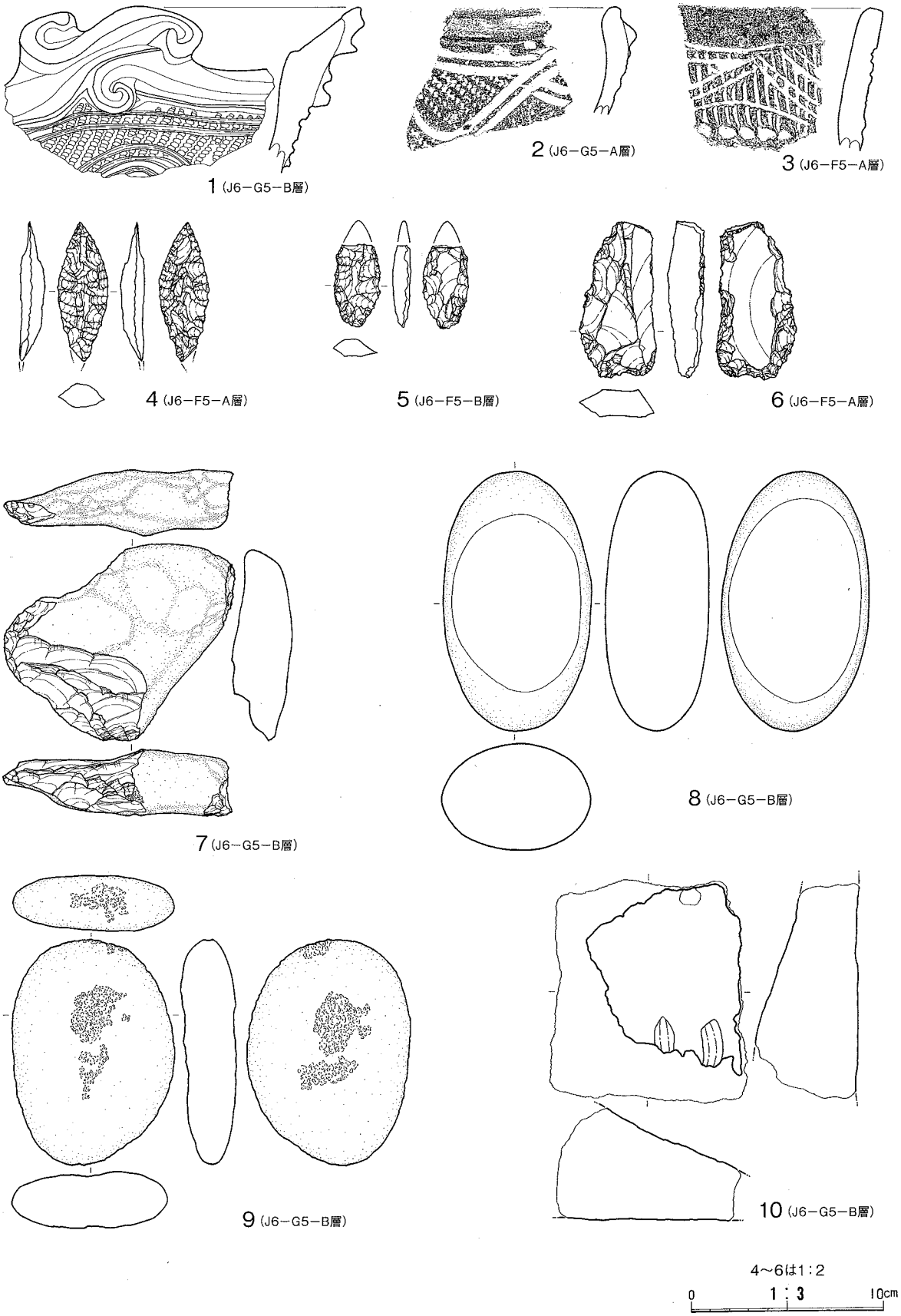
**壁の状態**　断面はフラスコ形を呈する。深さは 0.74mをはかる。　**遺　　物**　なし




第10図　RA2234・2235竪穴住居跡出土遺物




第11図　RA2236・2237・2238竪穴住居跡出土遺物




第12図　RA2239竪穴住居跡出土遺物

**ＲＤ６６４０土坑（第13図）**

**時　　期**　縄文時代　**平 面 形**　不整円形　**重複関係**　なし　**掘 込 面**　削平

**検 出 面**　Ｉａ層直下　**規　　模**　上端1.88m・下端1.56m

**埋　　土**　自然堆積によるものである。Ａ～Ｄ層に大別される。

Ａ層―暗褐色土を主体とする層で、粒状の褐色土を少量含む。４層に細分される。

Ｂ層―黒褐色土を主体とする層で、粒状の暗褐色土を少量含む。２層に細分される。

Ｃ層―黒褐色土を主体とする層で、塊状の褐色土をやや多量に含む。５層に細分される。

Ｄ層　黒褐色土を主体とする層で、粒状の褐色土を少量含む。２層に細分される。

**壁の状態**　断面はフラスコ形を呈する。深さは0.64mをはかる。　**遺　　物**　なし

**ＲＤ６６４１土坑（第13図）**

**時　　期**　縄文時代　**平 面 形**　不明　**重複関係**　ＲＤ6642を切る。　**掘 込 面**　削平

**検 出 面**　Ｉａ層直下　**規　　模**　長軸上端0.98m・下端0.78m、短軸上端0.48m以上、下端0.36m以上

**埋　　土**　自然堆積によるものである。暗褐色土を主体に、暗褐色土の混入の割合で細別される。

**壁の状態**　外傾して直立ぎみに立ち上がる。深さは0.58mをはかる。　**遺　　物**　なし

**ＲＤ６６４２土坑（第13図）**

**時　　期**　縄文時代　**平 面 形**　不整円形　**重複関係**　ＲＤ6641に切られる。　**掘 込 面**　削平

**検 出 面**　Ｉａ層直下　**規　　模**　長軸上端0.98m・下端0.78m、短軸上端0.48m以上、下端0.36m以上

**埋　　土**　自然堆積によるものである。Ａ～Ｃ層に大別される。

Ａ層―黒褐色土を主体とする層で、粒～塊状の褐色土を少量含む。しまりのない層である。

Ｂ層―黒褐色土を主体とする層で、塊状の粘質度の高い褐色土が多量に含まれる。硬くしまる層である。３層に細分される。

Ｃ層―粘質の高い褐色土を主体とする層で、粒～塊状の黒褐色土を多量に含む層である。

**壁の状態**　外傾してゆるやかに立ち上がる。深さは0.58mをはかる。　**遺　　物**　なし

**ＲＤ６６４３土坑（第13図）**

**時　　期**　縄文時代　**平面形**　楕円形　**重複関係**　ＲＤ6639に切られる。　**掘込面**　削平

**検 出 面**　Ｉａ層直下　**規模**　長軸上端1.12m以上・下端0.94m以上、短軸上端0.88m、下端0.64m

**埋　　土**　自然堆積によるものである。Ａ～Ｃ層に大別される。

Ａ層―黒褐色土を主体とする層で、粒状の褐色土を少量含む。

Ｂ層―暗褐色土を主体とする層で、粒状の褐色土をやや多量に含む。２層に細分される。

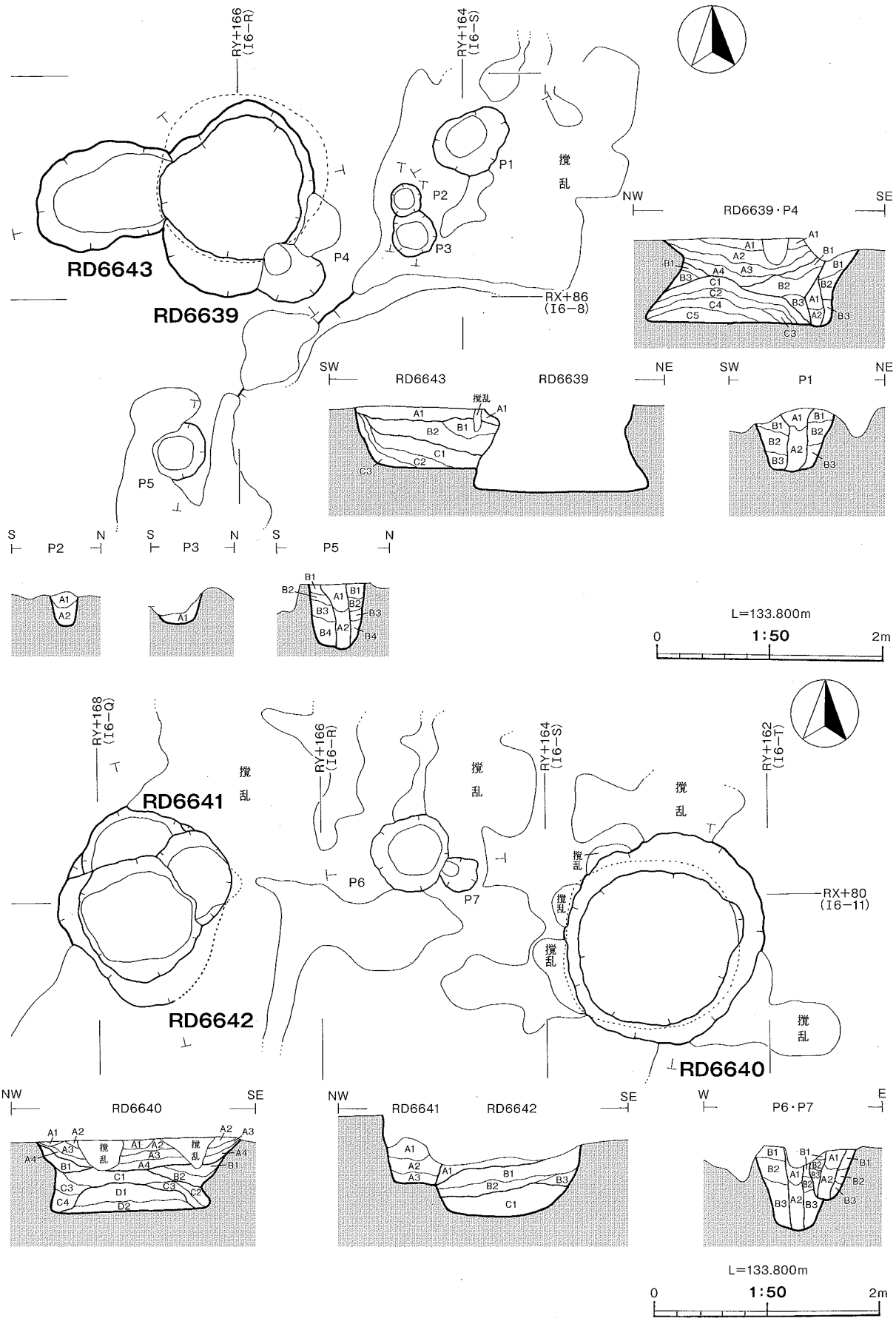
Ｃ層―暗褐色土を主体とする層で、粒状の褐色土を微量に含む。３層に細分される。

**壁の状態**　外傾してやや直立ぎみに立ち上がる。深さは0.56mをはかる。　**遺　物**　なし

**ＲＤ６６４４土坑（第９図）**

**時　　期**　縄文時代　**平 面 形**　東壁、西壁の一部を検出したのみで全体形は不明である

**重複関係**　ＲＡ2237に切られ、ＲＤ6645を切る。　**掘 込 面**　削平　**検 出 面**　ＲＡ2237床面直下




第13図　RD6639・6641・6642・6643土坑、ピット

**規　　模**　東壁、西壁間の上端0.68m・下端0.52m

**埋　　土**　自然堆積によるものである。黒褐色土を主体に、暗褐色土の混入の割合で細別される。

**壁の状態**　外傾して直立ぎみに立ち上がる。深さは0.38mをはかる。　**遺　　物**　なし

**ＲＤ６６４５土坑（第９図）**

**時　　期**　縄文時代　**平 面 形**　南東壁の一部を検出したのみで全体形・規模は不明である

**重複関係**　ＲＡ2237、ＲＤ6644に切られる。　**掘 込 面**　不明　**検 出 面**　ＲＡ2237床面直下

**埋　　土**　自然堆積によるものである。Ａ層～Ｂ層に大別される。

Ａ層―　Ａ層は暗褐色土を主体に、暗褐色土の混入の割合で細別される。

**壁の状態**　断面フラスコ状を呈する。深さは0.34mをはかる。

**土　　器**　**（第14図３～６）**３～５は同一個体で、口縁部が外反する深鉢である。口縁部文様帯および体部には横位の絡条体圧根が施される。６は口縁部文様帯に横位の絡条体圧痕を施し、頸部に斜位の絡条体圧痕が加飾される隆帯を巡らす深鉢である。

**ＲＤ６６４６土坑（第９図）**

**時　　期**　縄文時代　**平 面 形**　壁の一部を検出したのみで全体形・規模は不明である

**重複関係**　ＲＡ2236を切る。　**掘 込 面**　不明　**検 出 面**　Ｉａ層直下

**埋　　土**　自然堆積によるものである。Ａ層～Ｃ層に大別される。

Ａ層―黒褐色土を主体とする層で、粒状の褐色土を微量に含む。５層に細分される。

Ｂ層―黒色土を主体とする層で、粒状の褐色土を少量含む。２層に細分される

Ｃ層―黒色土を主体とする層で、塊状の褐色土を多量に含む。２層に細分される。

**壁の状態**　外傾してゆるやかに立ち上がる。深さは1.12mをはかる。　**遺　　物**　なし

**ＲＤ６６４７土坑（第９図）**

**時　　期**　縄文時代　**平 面 形**　壁の一部を検出したのみで全体形・規模は不明である

**重複関係**　ＲＡ2239を切る。　**掘 込 面**　Ⅲc層直下　**検 出 面**　Ⅲc層直下

**埋　　土**　自然堆積によるものである。Ａ層～Ｄ層に大別される。

Ａ層―黒褐色土を主体とする層で、粒状の褐色土を微量に含む。

Ｂ層―暗褐色土を主体とする層で、粒状の褐色土を少量含む。しまりのある層である

Ｃ層―暗褐色土を主体とする層で、塊状の黒褐色土を多量に含む。２層に細分される。

Ｄ層―黒褐色土を主体とする層で、塊状の暗褐色土・褐色土を多量に含む。４層に細分される。

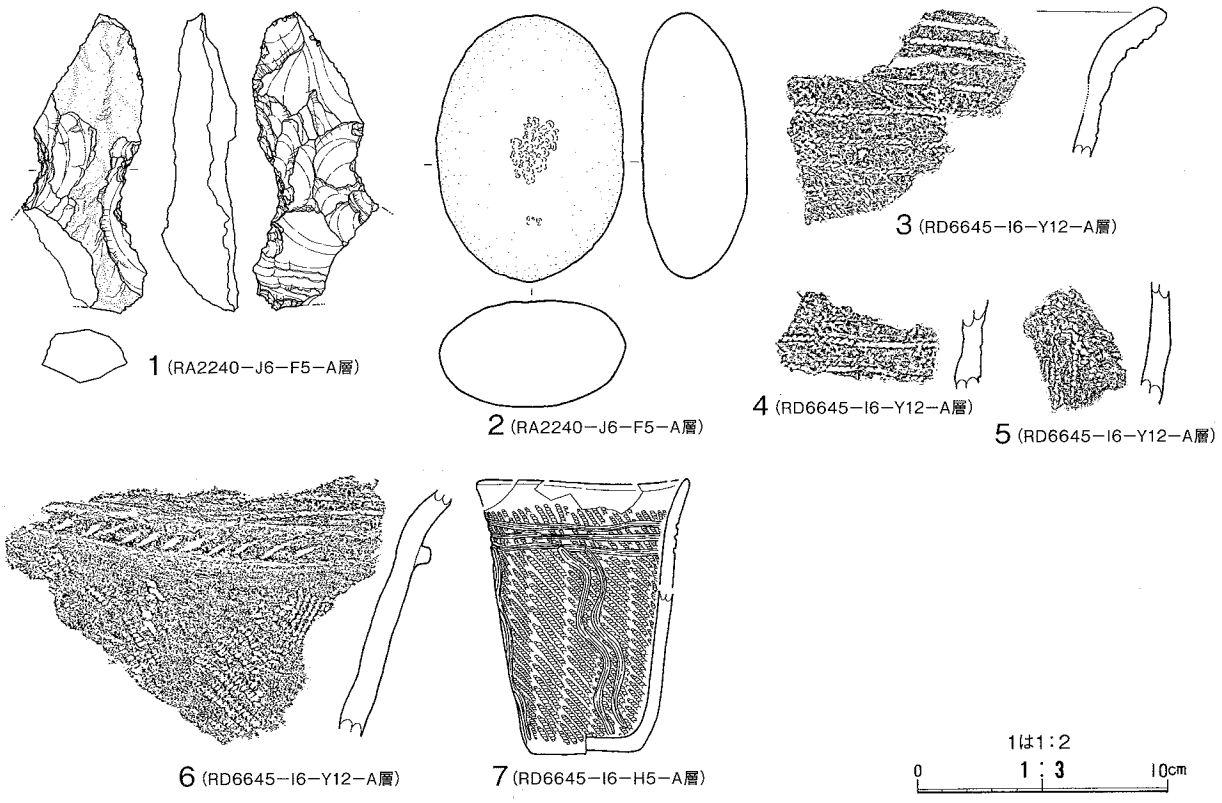
**壁の状態**　断面フラスコ状を呈する。深さは0.78mをはかる。

**土　　器**　**（第14図７）**７は口縁がやや外傾する小型深鉢で、頸部に３本の横位沈線文を巡らし、体部に波状の懸垂文を施す。

**ＲＤ６６４８土坑（第９図）**

**時　　期**　縄文時代　**平 面 形**　壁の一部を検出したのみで全体形・規模は不明である

**重複関係**　ＲＤ6647に切られ、ＲＡ2238を切る。　**掘 込 面**　Ⅲc層直下　**検 出 面**　Ⅲc層直下




第14図　RA2240竪穴住居跡、RD6645、6647土坑出土遺物

**埋　　土**　自然堆積によるものである。A層～B層に大別される。

A層―黒褐色土を主体とする層で、粒状の褐色土を少量含む。

B層―黒褐色土を主体とする層で、粒状の褐色土を微量に含む。ややしまりのない層である

**壁の状態**　断面フラスコ状を呈する。深さは0.68mをはかる。　**遺　　物**　なし

**ピット群**　調査区南東付近から７口のピットを検出した。埋土は黒褐色土が主体となるものが多い。柱痕跡の認められるピットはＰ１・Ｐ４・Ｐ５・Ｐ６・Ｐ７である。以下は各ピットの深さである。

Ｐ１―0.56m・Ｐ２―0.30m・Ｐ３―0.28m・Ｐ４―0.68m・Ｐ５―0.58m・Ｐ６―0.72m・Ｐ７―0.46m。

## （２）古代以降の遺構

### ＲＧ５０５溝跡（第15図）

**位　　置**　調査区北東隅で検出され、溝の形状等から第52・75次調査で検出されたＲＧ505溝跡の延長部分と考えられる。　**規　　模**　検出された総延長3.38m、深さ0.66m　**検 出 面**　表土直下

**埋　　土**　自然堆積による。A～C層に大別される。

A層―黒色土を主体とする層である。粒状の黒褐色土を少量含む。

B層―黒褐色土を主体とする層である。粒～状の暗褐色土を多量に含む。

C層―黒褐色土を主体とする層である。粒状の褐色土を少量含む。

**壁の状態**　底面より外傾して直線的に立ち上がる。　**底　面**　平坦

**出土遺物**　時期を示す遺物は出土していない。

### ＲＧ５０６溝跡（第 15 図）

**位　置**　調査区南東隅を東西に延びる

**規　模**　検出された総延長 5.02m、最大幅上端 1.24m・下端 0.38m、深さ 0.34m

**検 出 面**　表土直下

**埋　土**　自然堆積による。A～C層に大別される。

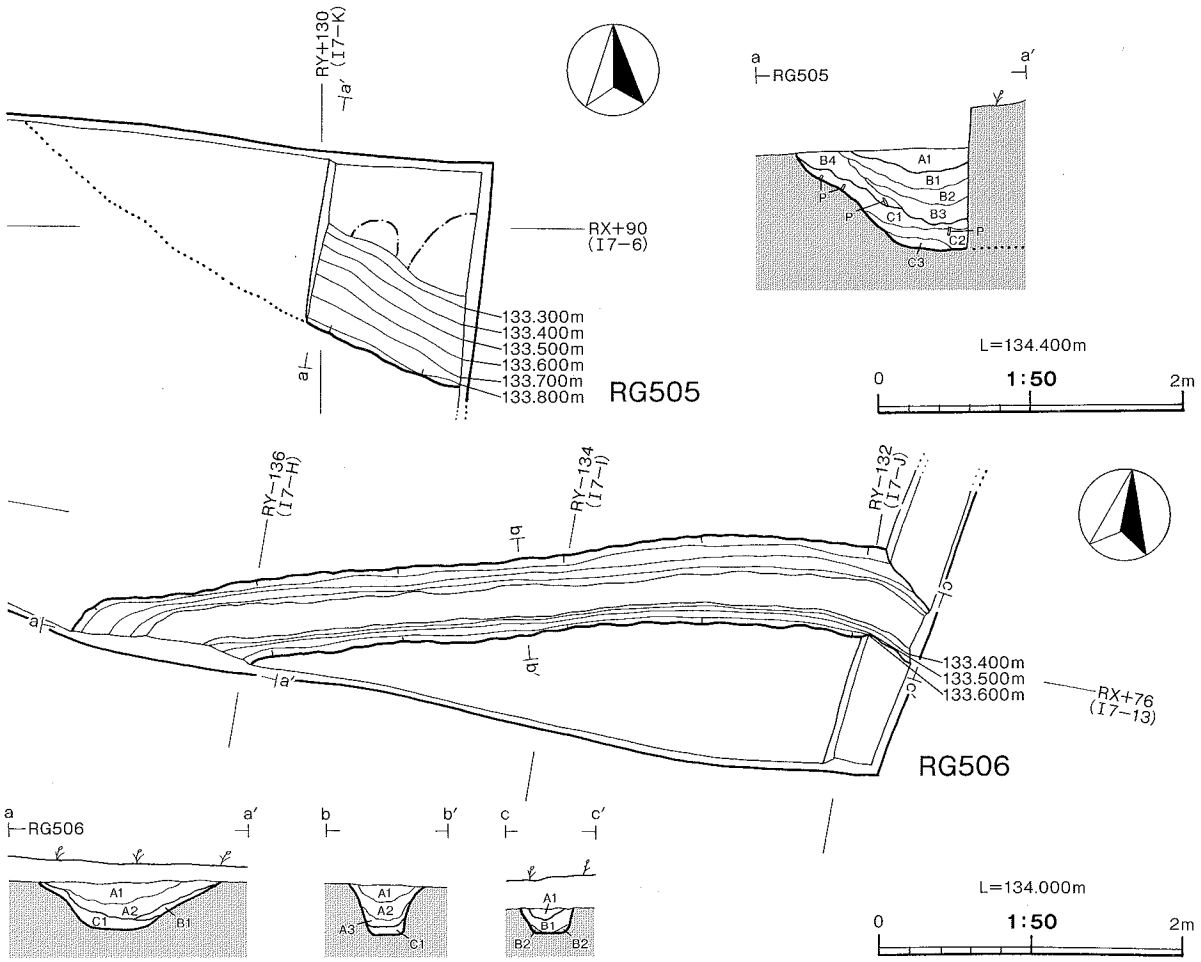
A層―　黒色土を主体とする層である。粒～塊状の黒褐色土を多量に含む。２層に細分される。

B層―　黒褐色土を主体とする層である。粒状の褐色土を少量含む。２層に細分される。

C層―　黒褐色土主体とする層で、しまりがない。粒状の褐色土を微量に含む。

**壁の状態**　底面より外傾して緩やかに立ち上がる　**底　面**　平坦

**出土遺物**　時期を示す遺物は出土していない。




第15図　RG505・506溝跡

## ４．第７８次調査

### (1) 縄文時代の遺構

第78次調査は、集落中央の広場と北東竪穴住居域の境界範囲を確認する目的で調査を実施した。調査区全域に暗褐色土層が広がっており、縄文時代中期の竪穴住居跡の埋土と推測されたが、調査区中央部付近は山芋等の根菜類の撹乱が広がっており、検出作業が困難な状態であった。

**竪穴住居跡**　比較的撹乱の少ない西側と東側で検出した結果、竪穴住居跡と推定されるプランを15棟確認した。調査区中央部にも竪穴住居跡が広がっていると推測されることから、調査区全体では30棟を超える竪穴住居跡が分布していると考えられる。

### （２）古代以降の遺構

**溝　　跡**　調査区南西から南東にかけて延びる溝跡を確認した。規模・形状から第75・77次調査で検出されているＲＧ505溝跡と同一のものであると考えられる。調査区北側で検出した溝跡は、最近まで使用されていた水路跡である。

**土坑・ピット**　調査区東側でしまりのない黒色土を主体とする土坑およびピットと考えられるプランを検出した。縄文時代の竪穴住居跡や溝跡の埋土とはあきらかに異質なものである。検出のみに留めたため、規模等は不明である。

**ＲＧ５０５溝跡（第16図）**

**位　　置**　調査区南西～南東　**規　　模**　検出された総延長は20.10m、幅上端1.65～2.38m・下端0.72～0.55mをはかる。深さ0.80～0.90m　**検 出 面**　表土直下

**埋　　土**　自然堆積による。Ａ～Ｆ層に大別される。各層とも微量のスコリア粒を含む。

Ａ層―黒褐色土を主体とする層である。粒状の暗褐色土を少量含み、粉状の白色火山灰を微量に含む。

Ｂ層―黒色土を主体とする層である。粒～塊状の黒褐色土をやや多量に含む。硬くしまる層である。

Ｃ層―黒褐色土を主体とする層である。粒状の褐色土を少量含む。３層に細分される。

Ｄ層―暗褐色土を主体とする層である。粒～塊状の黒褐色土を少量含む。硬くしまる層である。

Ｅ層―黒褐色土を主体にする層である。粒～塊状の褐色土をやや多量に含む。２層に細分される。

Ｆ層―暗褐色土を主体とする層である。塊状の黄褐色粘質土を多量に含む。壁の崩壊土と考えられる。

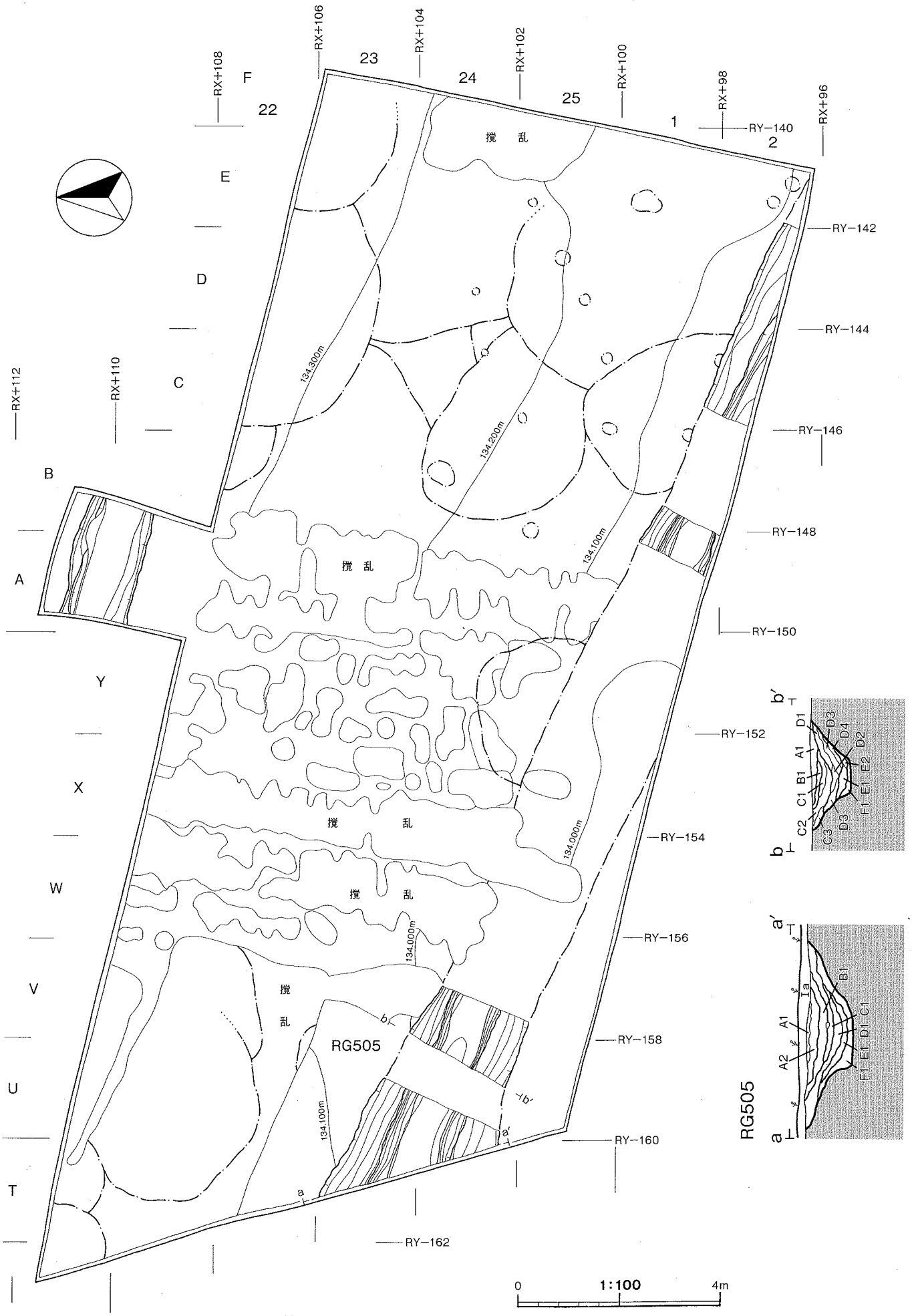
**壁の状態**　底面より外傾して直線的に立ち上がる。　**底　　面**　平坦

**出土遺物**　時期を示す遺物は出土していない。

### （２）遺構外出土遺物

**土　　器（第17図・第18図）**

**早　　期**　１・２は沈線文土器である。１は深鉢口縁部で帯状格子目文が施される。２は浅く細い沈線が施される深鉢体部片である。３は押型文土器で、斜格子目文が施される深鉢体部である。



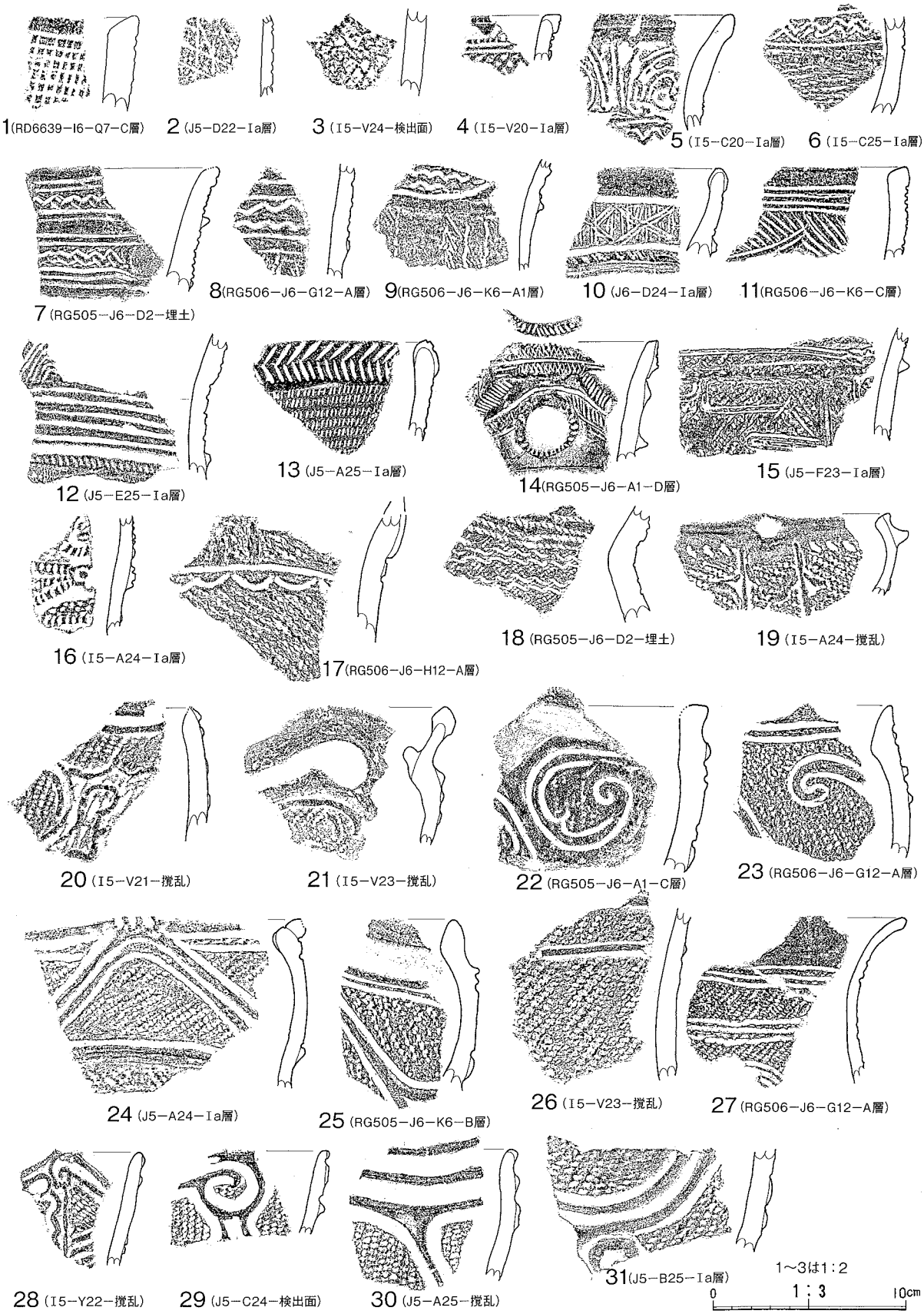

第16図　大館町遺跡第78次調査調査全体図

**前　期**　４は口唇部に短沈線による刻目を施し、口縁部文様帯には半裁竹管による沈線文上にソーメン状の細い粘土紐を貼り付け格子目状の浮線文を作りだしている。浮線文の上部には半裁竹管による結節を施す半隆線文が巡らされる。北陸地方に分布する、前期末の福浦上層式や朝日下層式土器に類似するものである。５・６は同一固体で、口縁部文様帯に半裁竹管による渦巻および鋸歯状の沈線文を巡らし、体部に横位撚糸文を施す深鉢である。

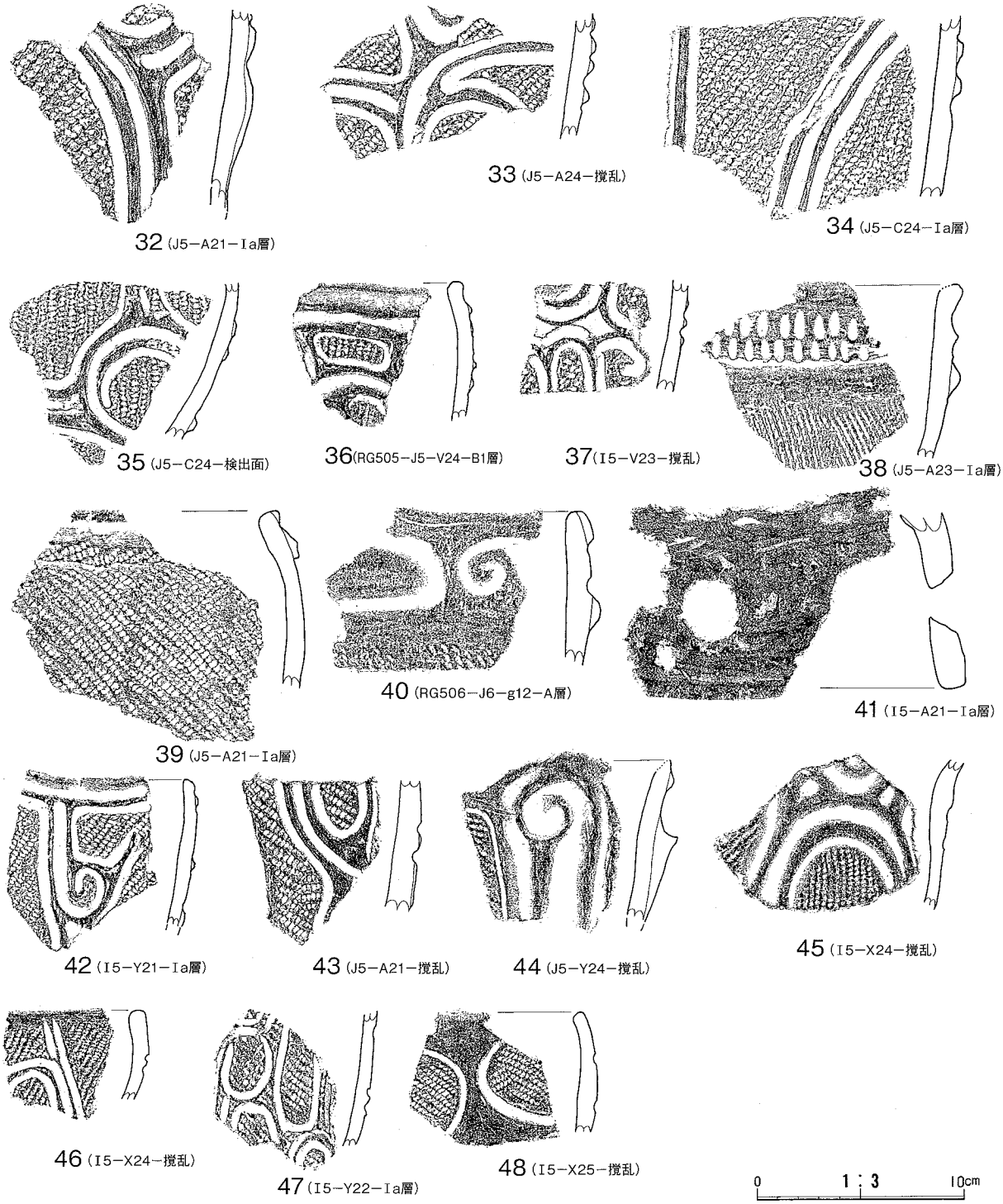
**中　期**　７～９は横位沈線文および鋸歯状文を施す深鉢である。10～14 は深鉢の口縁部である。10 は口縁部文様帯に半載竹管による幾何学文様が施され、頸部に刻目を付けた隆帯を巡らす。11 は横位および斜位沈線によって口縁部文様帯を構成する。12 は波状沈線文の下部に多段の横位沈線文を巡らし、頸部に刻目をつけた隆帯を施す。13 は短沈線による綾杉文の下部に絡条体で多段の列点を施す。14 は刻目をつけた円形浮文を波頂部に貼付する深鉢の口縁部である。15 は頸部に絡条体圧痕を施す隆帯を巡らし、体部に半載竹管による２条二組の沈線を施文する深鉢である。16 はボタン状貼付文の周囲に刻目のある隆帯を巡らす、深鉢の体部である。17 は頸部を巡る沈線文下に半円状の連弧文を施す深鉢の体部である。18 は頸部で屈曲し外反する深鉢の体部で、口縁部文様帯に原体圧痕を巡らし体部には横位の撚糸文を施す。19 は浅鉢の口縁部である。突起下に垂下隆帯を施し、口縁部に棒状工具による列点文を巡らす。20～25 はキャリパー形深鉢の口縁部である。20 は貼付隆帯により剣先状の文様を施す。21 はC字状把手下に貼付隆帯による渦巻文を施す。22・23 は隆沈線による渦巻文を施す。24・25 は口縁部文様帯に隆沈線による波状文を巡らしている。26 は横位の貼付隆帯を巡らす深鉢である。27 は口縁部が大きく外反する深鉢で、３条一組の横位沈線文を頸部と体部上半に巡らす。28 は波状口縁の小型深鉢である。隆帯による渦巻文および懸垂文を波頂部下に施している。29～37 は隆沈線による渦巻文・懸垂文を施す深鉢である。38・39 は粗製深鉢である。38 は口縁部に刺突列を施す隆帯を巡らし、体部には縦位の撚糸文を施す。39 は原体圧痕を施す隆帯を口縁部に巡らす。40 は口縁部文様帯に沈線による渦巻文・楕円文を配し、体部に縦の撚糸文を施す浅鉢の口縁部である。41 は台部に孔をもつ器台である。42 はやや簡略化された渦巻文を施す深鉢口縁部である。43 は隆沈線による円文を施す深鉢体部である。44 は波状口縁の深鉢で、波頂部下に蕨手状の渦巻文を施す。45 は隆沈線による楕円文を施す深鉢体部である。46 は沈線による楕円文を施す深鉢口縁部である。47 は沈線による楕円文・U字状文を施す深鉢体部である。48 は沈線によって区画された円文の中に縄文を充填させる浅鉢口縁部である。

## 石　器（第 19～21 図）

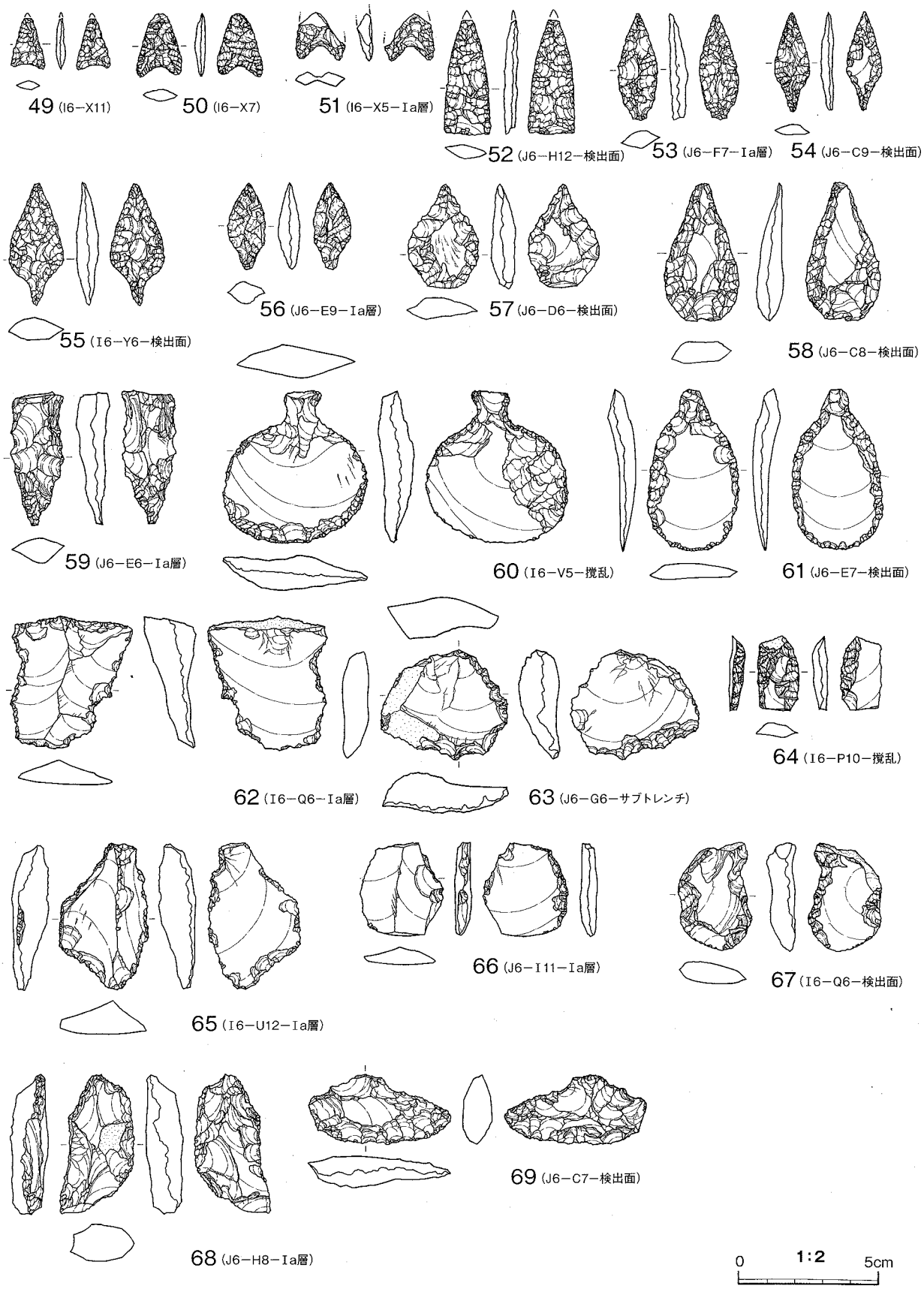
49～58 は石鏃である。49～51 は凹基無茎鏃で、49 は先端部、51 は上半部が欠損している。52 は平基無茎鏃で先端部が欠損している。53～54 は凸基有茎鏃で 54・55 の腹面には古い剥離痕が残る。57・58 は凸基無茎鏃で両面に古い剥離痕が残る。59 は石錐で両面加工を施し、錐部を作り出している。60・61 は石匙である。60 は背面下端部と腹面右側面に主に調整が施されている。61 は両面周縁調整を施す。62 は削器で、63～69 は掻器である。62 は素材剥片の形を大きく変えることなく、両面の側縁部に調整を加えている。63 は背面右側縁上半と腹面下端部に主な調整を加えて刃部を作出している。64 は背面左側縁に急斜度の調整を施している。65 は背面左側縁の一部にのみ調整を加え、それ以外は使用による微小な剥離である。66 は背面右側縁と腹面右側縁に調整を施す。67 は両面に周縁調整を施し、背面右側縁上部にやや浅いが抉りを作出している。68 は背面左側縁に急斜度の調



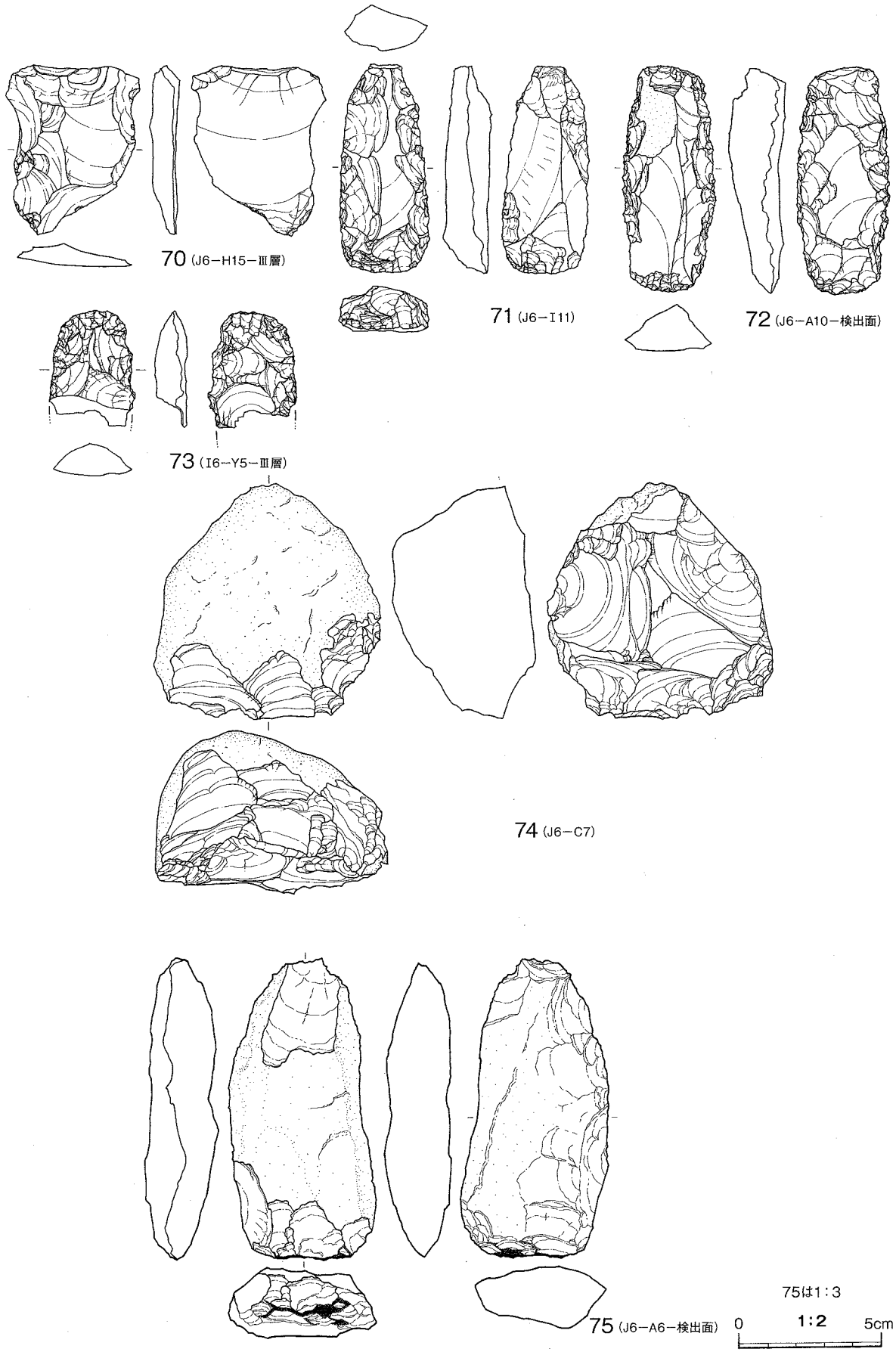

第17図　遺物包含層出土土器（1）



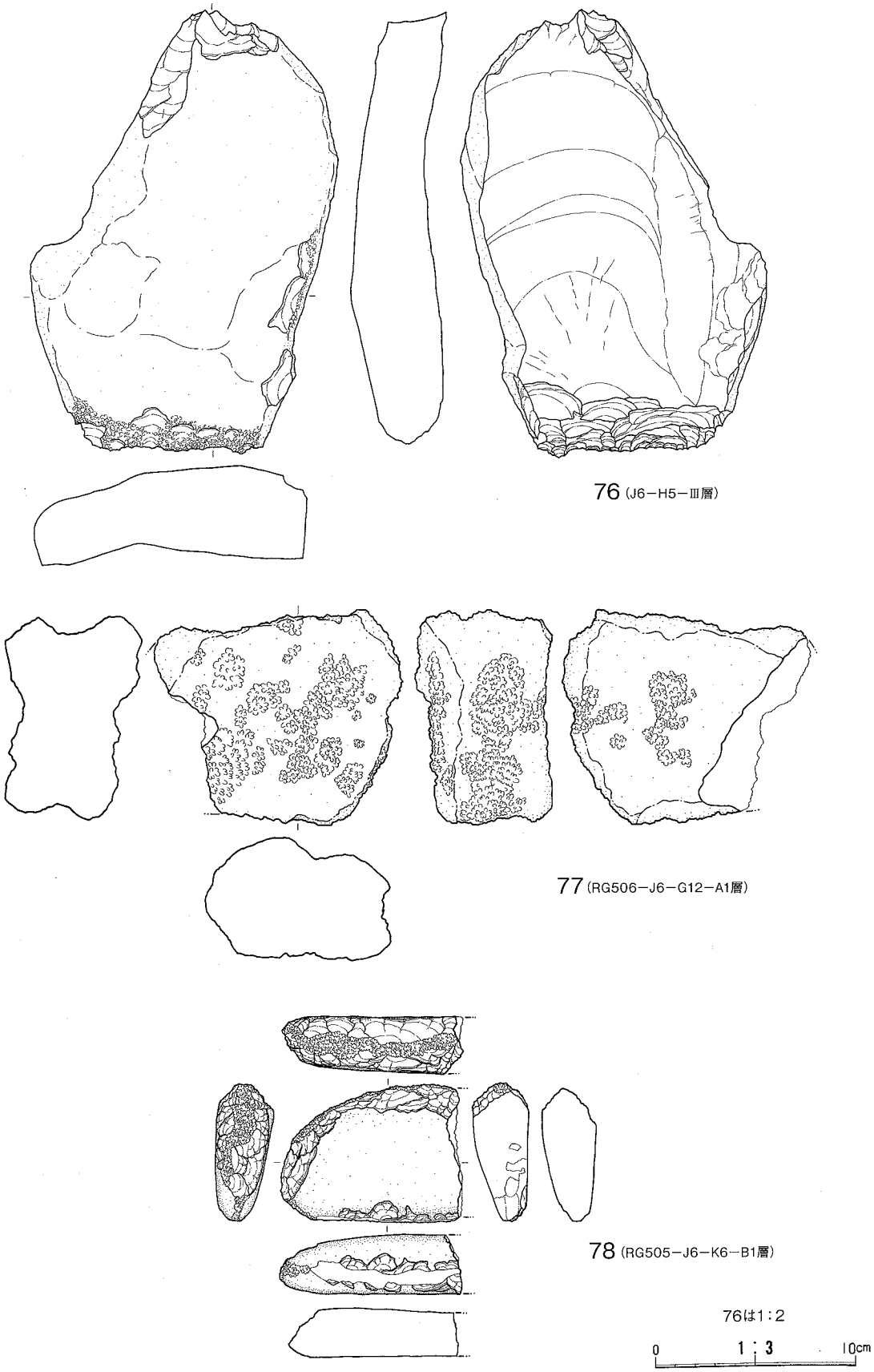

第18図　遺物包含層出土土器（2）



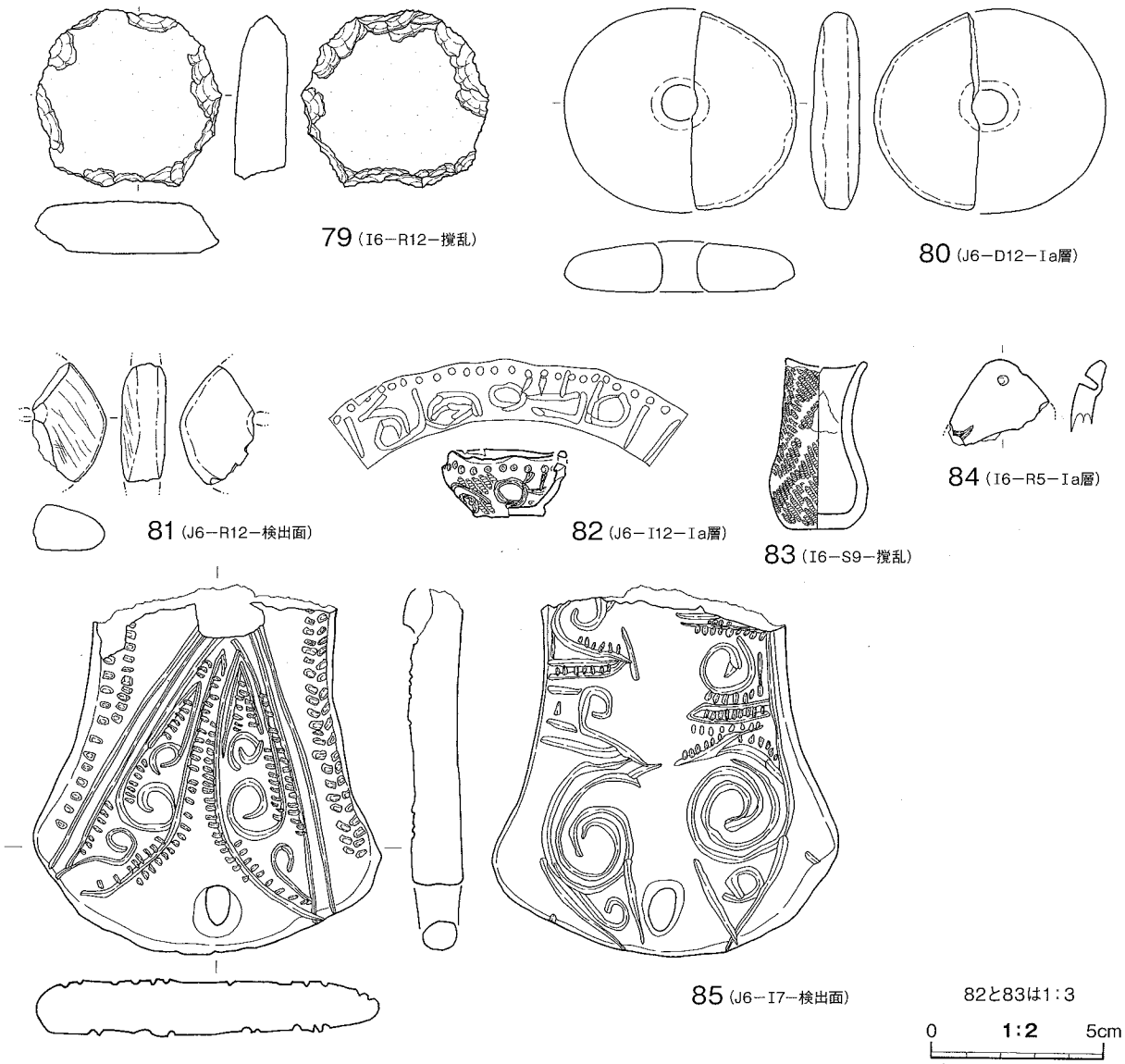

第19図　遺物包含層出土石器（1）




第20図　遺物包含層出土石器（2）




第21図　遺物包含層出土石器（3）




第22図　遺物包含層出土石製品・土製品

整を加えている。69 は両面調整を施す。70 は片面調整石器で背面に調整を施している。71～73 は石箆である。71 は下端刃部に急斜度な調整を施す。72 は側縁部には荒い調整を施しているが、下端刃部には丁寧な調整を加えている。73 は下半部を欠損している。74 は石核である。75・76 は礫器で、75 は下端部の稜線が磨滅、76 は刃部に敲打痕を伴う。77 は凹石で、両面および側面に敲打痕が認められる。78 は敲打磨石で半月状を呈しており、側面に敲打痕が認められる。

**石製品・土製品（第 22 図）**

79 は円盤状石製品で周囲を剥離によって整形している。80・81 は有孔石製品である。82・83 はミニチュア土器である。82 は口縁部に小孔を巡らし、沈線により文様を施している。83 は頚部がくびれ一輪挿しの形を呈するものである。84 は三角形土製品の破片である。85 は両面に沈線による渦巻文・懸垂文が描かれ、沈線間あるいは体部縁辺に刺突列を施す板状土偶である。

## 5．まとめ

**検出遺構**　第 77・78 次調査では多数の竪穴住居跡が確認されたが、今回の調査目的が竪穴住居域の範囲確認であるため、その多くは検出または、トレンチによる一部分の精査のみに留めた。精査した遺構の中でＲＡ2233 竪穴住居跡は、複式炉を伴う住居跡で、大館町遺跡内では検出例の少ない竪穴住居跡である。遺構の重複の激しい大館町遺跡の中で、他の遺構の重複を受けていないことから、集落内でも新しい時期に位置づけられる遺構と考えられる。また、出土した土器は渦巻文が鈎状になるなど簡略化され、縦位の文様帯が意識されるようになる。大木８ｂ－３式～大木９式の過渡期に相当するものと考えられる。これらの土器群は遺物包含層の中にも若干含まれており、大館町遺跡の集落の変遷を考える上で貴重な資料である。

**竪穴住居群**　第 77・78 次調査区の全面で確認された多数の竪穴住居群は、第 52 次調査区の北部で確認された竪穴住居群に続いてくものと考えられる。しかし、遺跡北部の第５・12 次調査区や東部の第 10 次調査区で確認されている竪穴住居群との関連性が不明である。今後、遺跡北部・東部との間に位置し、今次調査区よりも地形が一段高くなっている北東部分と、第 52 次調査区と第 37・54 次調査区の間に位置する北西部分の調査によってさらに大館町遺跡の集落の構造が明らかになると考えられる。

（佐々木亮二）

# Ⅲ．宿田遺跡（第11次調査）

## 1．遺跡の環境

### （1） 遺跡の概要

**位　　置**　宿田遺跡は、盛岡市街地より北西約2.5㎞の前九年一丁目に所在する。盛岡市立厨川小学校の北西に隣接し、現況は宅地である。遺跡範囲は南北約 210m、東西約 170mと推定される。標高は約 138mである。

**過去の調査**　宿田遺跡は昭和25年頃に小岩末治氏によって縄文時代早期の遺跡であることが確認された遺跡である。当時、岩手県内において縄文時代早期遺物の発見例は稀有であったことから小岩氏は表面採集された資料を『岩手県史（上古編）』（1960年）に紹介している。資料紹介された遺物は縄文時代早期中葉の貝殻文土器、早期後葉の槻木１式に類似する土器で、県内における土器編年上重要な土器とされた。

その後、盛岡市教育委員会により第1～10次にわたる調査が実施され、遺跡の中央部の第1・4・6次調査では縄文時代早期の土坑、遺物包含層、古墳時代の土坑、奈良～平安時代の円形周溝が確認されている。第４次調査で確認された縄文時代の土坑からは早期後葉の条痕文土器である槻木Ⅰ式とムシリⅠ式が共伴して出土しており、早期の土器編年を考える上で貴重な資料となっている。

遺跡南部で実施された７・８・９次調査では、縄文時代早期の竪穴住居跡や土坑、遺物包含層に加えて、主体部が残存する古代の円形周溝墓が確認されている。主体部からは直刀二振と鉄鏃が納められており、刀身の形態から７世紀から８世紀前葉に属するものと推定されている。また、少量であるが遺跡のほぼ全域から北海道系の土器である北大Ⅰ式土器、５世紀代の土師器片、黒曜石製の掻器・剥片が出土しており、特に第７次調査では滝沢村大釜館遺跡から発見された東海地方の特色を持つ甕と同様の特徴を持つ土器小片が出土した。

**地形・地質**　雫石川北岸には洪積段丘に相当する岩手山起源の大石渡岩屑なだれ堆積物（滝沢泥流）を基盤とした火山灰砂台地（滝沢台地）が発達している。宿田遺跡は、滝沢台地南縁部に立地し、遺跡の東西は沢による浸食で解析され、南は緩やかな傾斜を持ちながら沖積地に至る。

宿田遺跡が立地する滝沢台地は火山灰で覆われており、下層より外山火山灰層・渋民火山灰層・分火山灰層が堆積する。最上部の堆積物となる分火山灰層は主に岩手山・秋田駒ヶ岳に噴出起源を持つ火山灰で構成される。分火山灰層は下層より十和田起源である八戸火山灰（八戸火砕流）が薄く堆積し（層厚１～２㎝）、八戸火山灰直上には秋田駒ヶ岳起源の小岩井軽石層が堆積する。八戸火山灰の降下年代は約13、000年前とされ、小岩井軽石層直上に堆積するローム質火山灰（柳沢軽石層）の降下年代が約11、000年前とされている。なお、小岩井軽石層は秋田駒ヶ岳より東に、盛岡市飯岡付近を南限、玉山村渋民付近を北限とした幅で東方に向かって降下しており、東辺は太平洋に面する普代村付近を北限に、南は宮古市付近まで火山灰層を露頭観察することができる。

分火山灰下部からの出土遺物は、玉山村小石川遺跡では八戸火山灰層より木葉形尖頭器を主とする石器群が、葛巻町泥這遺跡からは石斧と尖頭器を主とする石器群が発見されている。

大新町遺跡では、前述した柳沢軽石層（Ⅵ層）直上より縄文時代草創期の爪形文土器と共伴する石器が出土し、柳沢軽石層上に堆積する暗褐色土（Ⅴ層）下部より縄文時代早期初頭の無文土器、早期前葉の押型文・沈線文土器が多量に出土している。前九年Ⅰ遺跡では柳沢軽石層と暗褐色土の斬位層付近より多量の無文土器と少量の爪形状刺突が施される土器が多量に出土している。なお、暗褐色土層は縄文時代早期の遺物が発見される層であるが、層位の細分が困難なほど変化が少なく、滝沢台地上の遺跡では早期初頭から末葉までの遺物が混在した状態で出土することが多い。

## 2．調査の概要

### （1）これまでの調査

宿田遺跡は昭和25年頃に小岩末治氏によって縄文時代早期の遺跡であることが確認され、表面採集された資料は『岩手県史（上古編）』（1960年）に紹介されている。

その後、盛岡市教育委員会により平成2年度～17年度までに10件の本調査を実施している（第　図）。このうち第5次調査は宿田遺跡西辺に隣接する道路建設予定地の調査であったが、他の調査は個人住宅建設に係る緊急発掘調査である。

| 次数 | 所在地 | 調査原因 | 面積 | 期間 | 検出遺構・遺物 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 盛岡市前九年一丁目119-9、10 | 個人住宅建築 | 144㎡ | 90.12.08 | 縄文時代早期土坑跡、古代の円形周溝 |
| | | | | 90.12.18 | 縄文時代早期の土器・石器　ほか |
| 2 | 盛岡市前九年一丁目121-2 | 個人住宅建築 | 345㎡ | 93.12.27 | 縄文時代早期土坑跡 |
| | | | | 93.12.28 | |
| 3 | 盛岡市前九年一丁目4-76 | 個人住宅建築 | 100㎡ | 96.11.08 | 時期不明溝跡 |
| 4 | 盛岡市前九年一丁目5-19 | 個人住宅建築 | 175㎡ | 01.10.01 | 縄文時代早期土坑跡、古代の円形周溝 |
| | | | | 01.10.31 | 縄文時代早期の土器・石器　ほか |
| 5 | 盛岡市前九年一丁目4-14 | 市道建設 | 724㎡ | 03.04.14 | 時期不明溝跡　旧河道 |
| | | | | 03.04.24 | 古代の土師器　寛永通宝 |
| 6 | 盛岡市前九年一丁目5-21 | 個人住宅建築 | 70.8㎡ | 03.07.10 | 縄文時代早期土坑跡、古代の円形周溝 |
| | | | | 03.08.05 | 縄文時代早期の土器・石器　ほか |
| 7 | 盛岡市前九年一丁目121-2および121-5の一部 | 個人住宅建築 | 220㎡ | 05.04.18 | 縄文時代早期竪穴住居跡1、土坑11 |
| | | | | 05.07.30 | 古代の円形周溝墓1、土坑4、溝跡3 |
| 8 | 盛岡市前九年一丁目121-2 | 個人住宅建築 | 135㎡ | 05.04.18 | 縄文時代早期土坑跡、遺物包含層 |
| | | | | 05.07.30 | 縄文時代早期の土器・石器　ほか |
| 9 | 盛岡市前九年一丁目121-2 | 個人住宅建築 | 89㎡ | 05.04.18 | 縄文時代早期土坑跡、遺物包含層 |
| | | | | 05.07.30 | 縄文時代早期の土器・石器　ほか |
| 10 | 盛岡市前九年二丁目105-6 | 個人住宅建築 | 143㎡ | 05.04.19 | 縄文時代早期土坑跡、遺物包含層 |
| | | | | 05.05.13 | 縄文時代早期の土器・石器　ほか |
| 11 | 盛岡市前九年二丁目104-53 | 個人住宅建築 | 56㎡ | 07.04.27 | 縄文時代早期土坑跡、遺物包含層 |
| | | | | 07.05.16 | 縄文時代早期の土器・石器 |

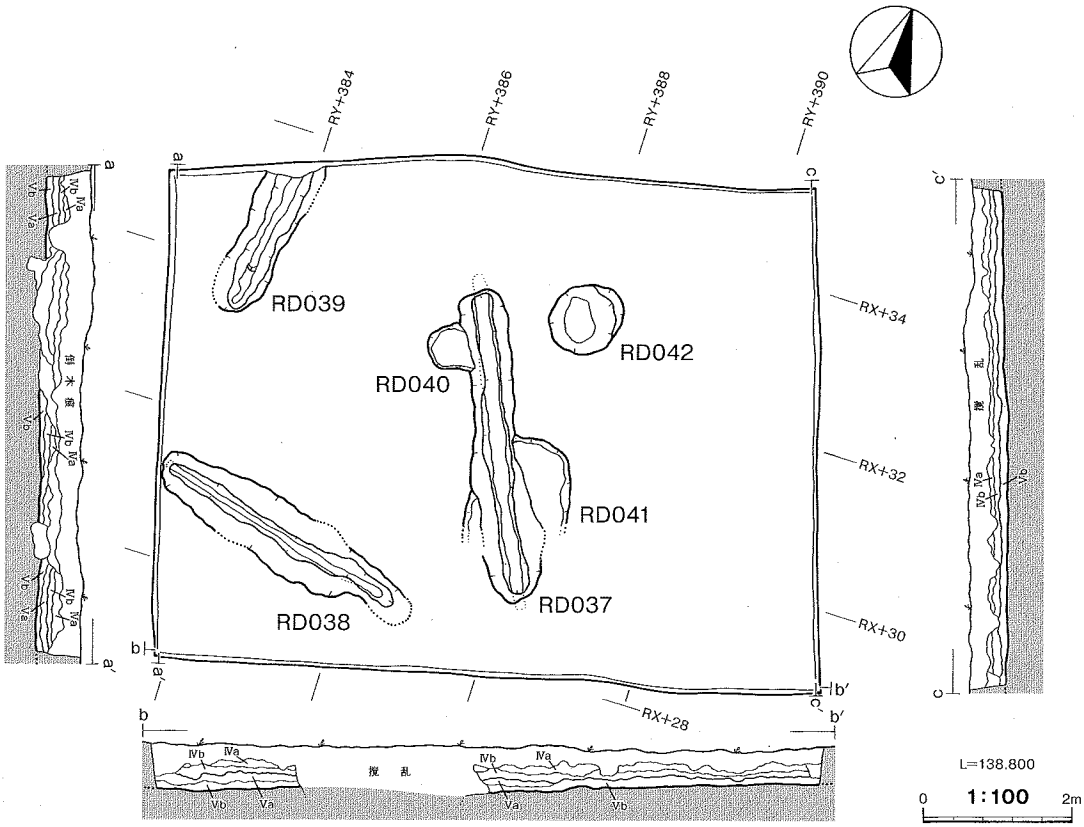
第3表　宿田遺跡調査成果

第23図　宿田遺跡全体図

## （2）平成19年度の調査

平成19年度は個人住宅建設に伴う発掘調査を第11次調査として実施した。調査箇所は宿田遺跡南部、前九年一丁目104地内で、調査期間は平成19年4月27日～5月16日、調査面積は56㎡である。

調査の結果、縄文時代の土坑6基（ＲＤ０３７～０４２）が検出され、遺構内外より縄文時代前期初頭の土器片が出土した。




第24図　宿田遺跡第11次調査全体図

## 3. 調査成果

### （1）縄文時代の遺構・遺物

**ＲＤ０３７土坑（第25図）**

**時　　期**　縄文時代　**平 面 形**　溝状　**重複関係**　ＲＤ040・041を切る　**掘 込 面**　削平

**検 出 面**　Va層上面　**規　　模**　長軸上端4.06m・下端4.18m、短軸上端0.98m・下端0.11m

**埋　　土**　自然堆積によるものである。Ａ・Ｂ層に大別され、Ａ層は３層、Ｂ層は２層に細分される。

Ａ層―Ａ層は黒褐色土を主体に、各層はスコリア粒を含む褐色土の混入量により細分される。

Ｂ層―$B_1$層は褐色土を主体に粒～塊状の暗褐色土が混入する層である。$B_2$層は黒褐色土を主体とする層である。

**壁の状態**　土坑上部より外傾して立ち上がる。深さは1.13mをはかる。　**遺　　物**　なし

**ＲＤ０３８土坑（第25図）**

**時　　期**　縄文時代　**平 面 形**　溝状　**重複関係**　なし　**掘 込 面**　削平　**検 出 面**　Va層上面

**規　　模**　長軸上端3.67m・下端3.79m、短軸上端0.90m・下端0.12m

**埋　　土**　自然堆積によるものである。A～C層に大別され、A層は3層、B層は3層に細分される。

A層―A層は暗褐色土を主体に、暗褐色土の混入の割合で細別される。

B層―暗褐色土を主体に、黒褐色土を粒状に少量含む。各層はスコリア粒を多量に含む。

**壁の状態**　土坑上部より外傾して立ち上がる。深さは1.53mをはかる。　**遺　　物**　なし

**ＲＤ０３９土坑（第25図）**

**時　　期**　縄文時代　**平 面 形**　溝状　**重複関係**　なし　**掘 込 面**　削平　**検 出 面**　Va層上面

**規　　模**　北半分は調査区外に延び、検出分の規模は長軸上端2.22m以上・下端2.08m以上をはかる。

**埋　　土**　自然堆積によるものである。A～C層に大別され、各層は2層に細分される。

A層―黒褐色土を主体に、各層は暗褐色土の混入の割合で細別される。

B層―黒褐色土を主体として、褐色土を粒～塊状に含む層である。

C層―黒褐色土を主体として、褐色土を塊状に含む層である。

**壁の状態**　外傾して立ち上がる。深さは0.18mをはかる。

**遺　　物（第26図1）**　1は胎土に繊維を含む深鉢体部片で、器面には縄文が施される。

**ＲＤ０４０土坑（第25図）**

**時　　期**　縄文時代　**平 面 形**　不整楕円形？　**重複関係**　ＲＤ037に切られる　**掘 込 面**　削平

**検 出 面**　Va層上面　**規　　模**　長軸上端0.58m・下端0.52m以上、短軸上端0.62m・下端0.47m

**埋　　土**　自然堆積によるものである。黒褐色土を主体に暗褐色土と黄褐色土を粒状に少量を含む。

**壁の状態**　外傾して立ち上がる。深さは0.29mをはかる。　**遺　　物**　なし

**ＲＤ０４１土坑（第25図）**

**時　　期**　縄文時代　**平 面 形**　不整楕円形　**重複関係**　ＲＤ037に切られる　**掘 込 面**　削平

**検 出 面**　Va層上面　**規　　模**　長軸上端1.42m以上・下端1.28m以上、短軸上端1.31m・下端1.23m

**埋　　土**　自然堆積によるもので、黒褐色土を主体に粒～塊状の暗褐色土が含まれる。

**壁の状態**　外傾して立ち上がる。深さは0.24mをはかる。　**遺　　物**　なし

**ＲＤ０４２土坑（第25図）**

**時　　期**　縄文時代　**平 面 形**　不整円形　**重複関係**　なし　**掘 込 面**　削平　**検 出 面**　Va層上面

**規　　模**　長軸上端0.92m・下端0.51mをはかる。

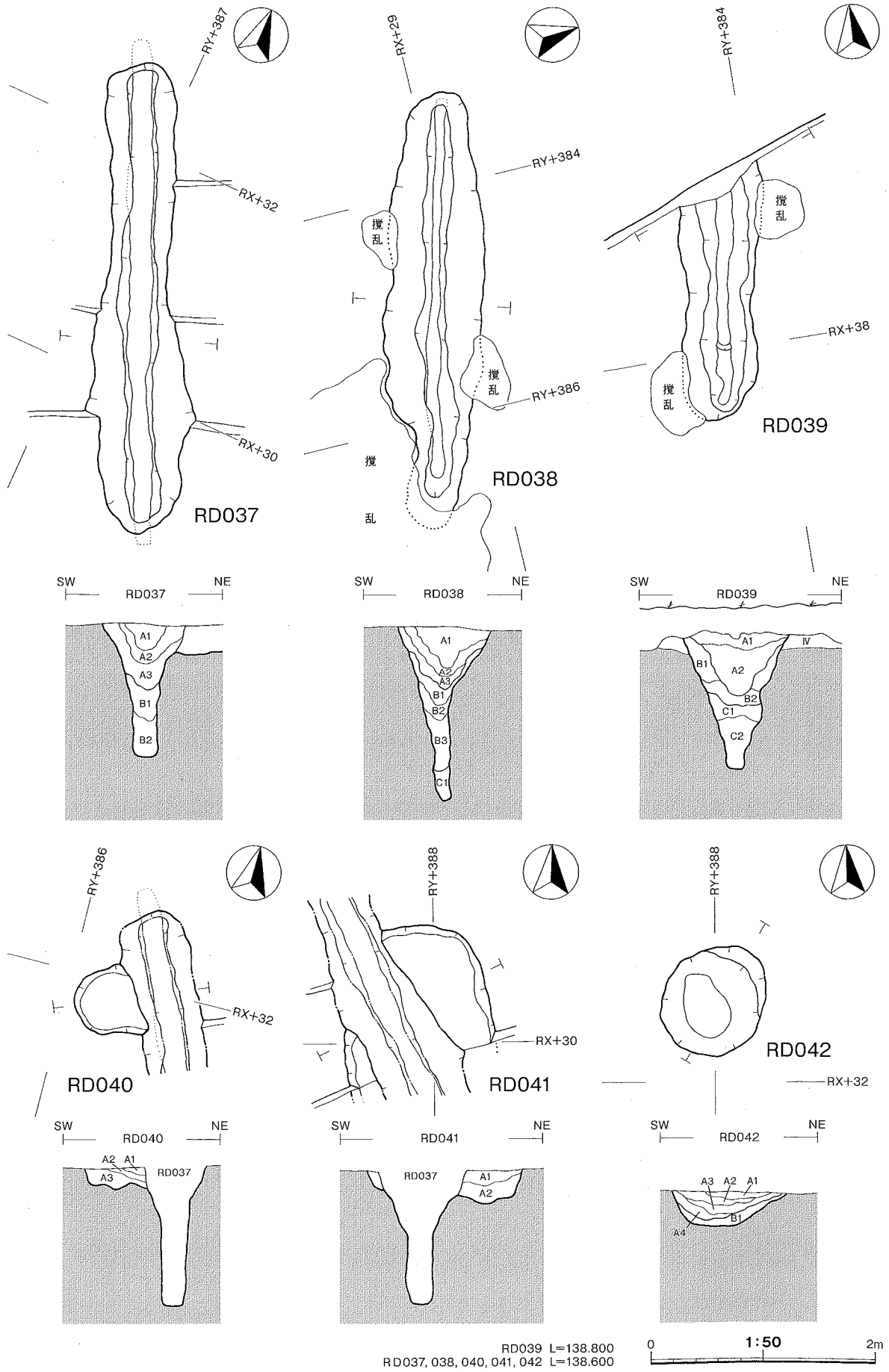
**埋　　土**　自然堆積によるものである。A・B層に大別され、A層は4層に細分される。

A層―黒褐色土を主体に、各層は暗褐色土の混入の割合で細別される。

B層―暗褐色土を主体として、褐色土を塊状に含む層である。

**壁の状態**　緩やかに外傾する。深さは0.78mをはかる。

**遺　　物（第26図2）**　2は胎土に繊維を含む深鉢口縁部片で、器面には縄文が施される。




第25図　RD037・038・039・040・041・042土坑

### （2）遺構外出土遺物（第26図3～第28図75）

**第11次調査**　3～8は胎土に繊維を含む深鉢で、器面には縄文が施される。4は口縁部に小突起が施される。9・10は横位の平行沈線が施される深鉢で、胎土には微量の繊維が含まれる。11は深鉢底部片である。

**第7次調査**　第7次調査については既に報告済であるが（平成17年度市内遺跡群）、紙面の関係で未掲載であった資料を本報告書に掲載することとした。

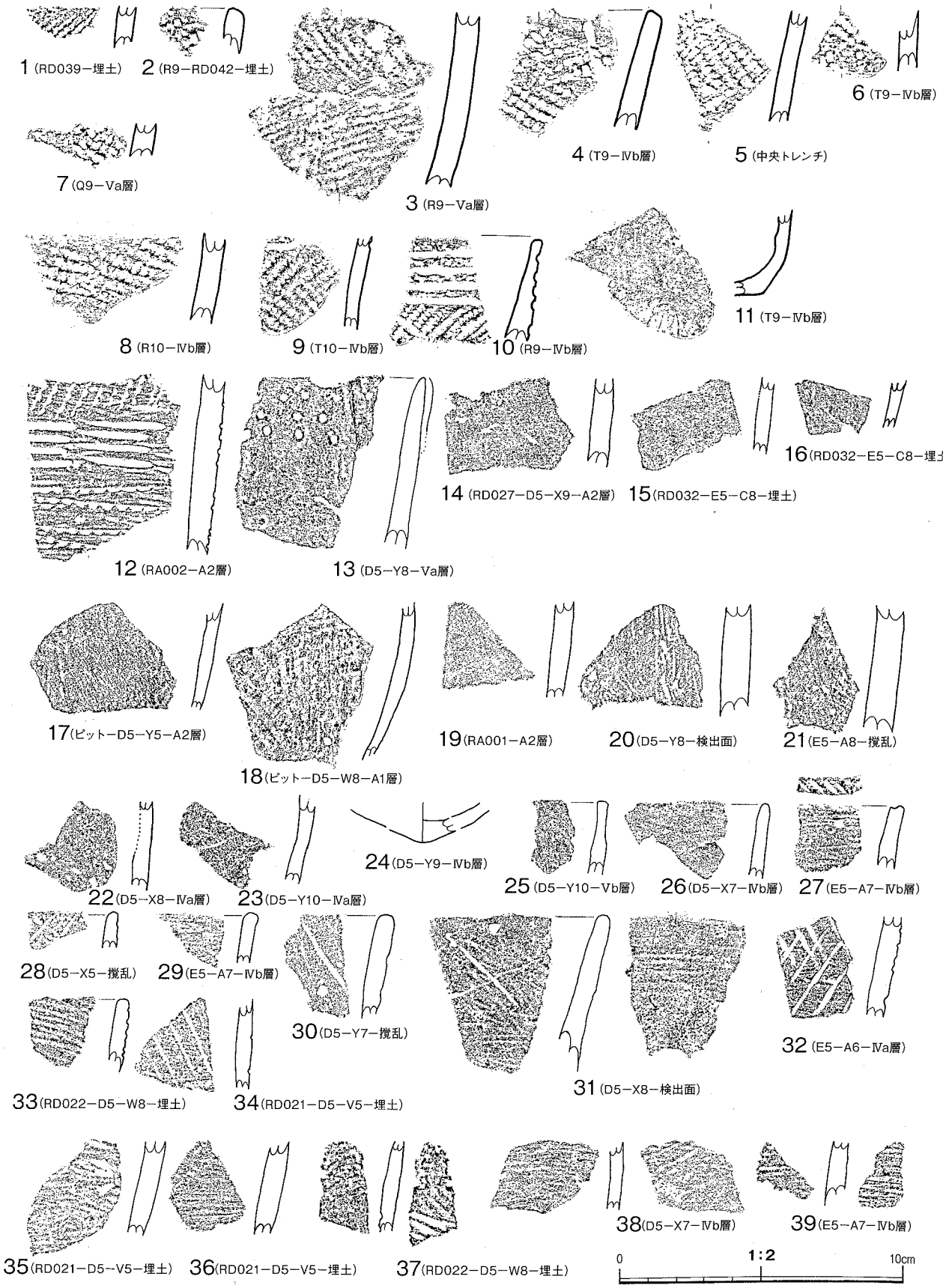
**早　　期**　12は縦位の貝殻腹縁文・横位の短平行沈線・横位の貝殻腹縁文を交互多段に施す深鉢である。13は口縁部に短隆線を縦位に施し、口縁に沿うように刺突を施すものである。14～26は無文の深鉢で、14～23は体部、24は底部、25・26は口縁部である。27～48は条痕を地文とする土器群である。27は口唇に刻目が施される深鉢口縁部片である。28～31は深鉢口縁部片で、口縁下に浅い沈線による文様が描かれる。32は沈線による格子目文が描かれる深鉢体部片である。33は斜位の深い条痕を施す深鉢口縁部片で、34は斜位の沈線を施す深鉢体部片である。35～47は条痕が施される深鉢体部片である。48は微隆起線による梯子状文が施される深鉢体部片である。49～52は表裏に縄文が施される深鉢体部片である。胎土には石英粒・雲母、微量の繊維が含まれる。53～61は前述した表裏縄文土器と同様の土器で、裏面に縄文が認められなかったものである。53は器面の一部が剥落（正面より右上の端部）したものだが、剥落した部分に縄文を施文した痕跡が観察されたものである。

**古墳時代**　62は縞縄文と微隆起線文が施される深鉢体部片である。63は深い刷毛目痕が残る甕の肩部で、器面の色調は青灰色を呈する。

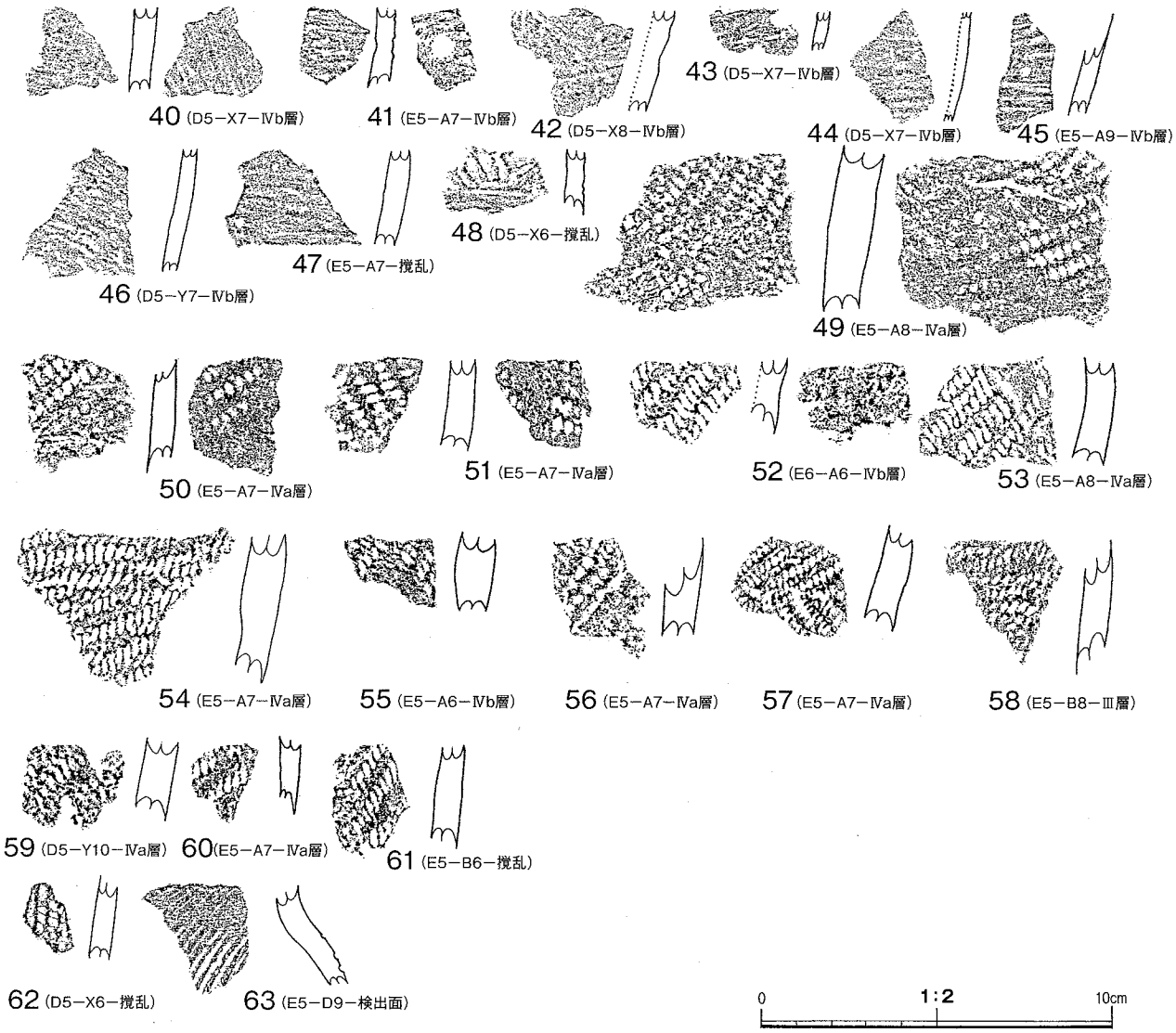
## 4.まとめ

**第11次調査**　第11調査の結果、本調査区を含む宿田遺跡北部は縄文時代の溝状土坑が集中する地区である可能性が高いことが確認された。これまで、宿田遺跡の調査は遺跡南部の緩斜面で実施されることが多く、縄文時代早期の集落及び古代の古墳群を中心とした遺跡であると考えられていた。しかし、今回の調査によって宿田遺跡の南辺は縄文時代の狩猟場であったことが確認され、宿田遺跡は幅広い土地利用が行われた遺跡であることが明らかとされた。

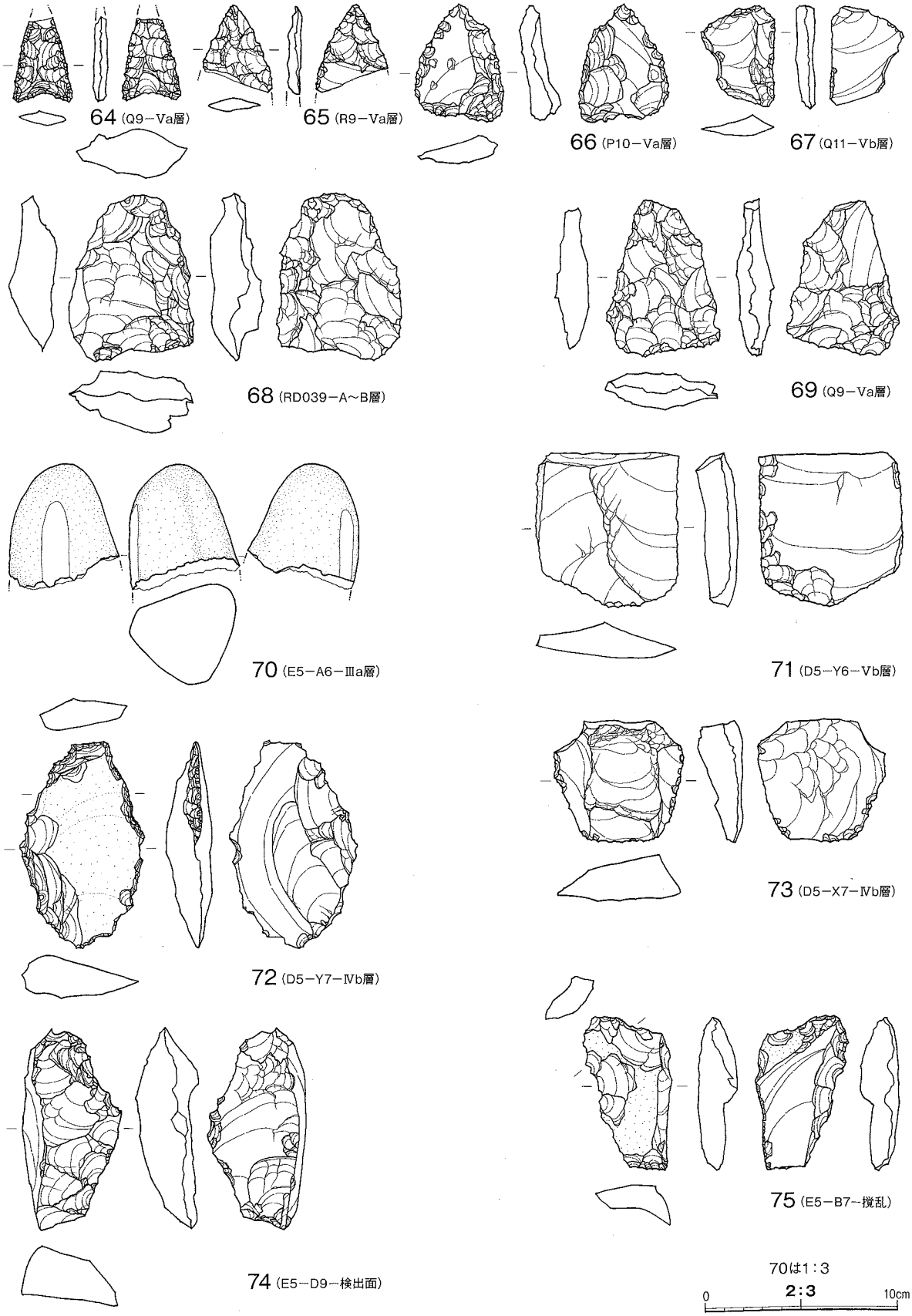
**第7次調査**　第7次調査は平成17年度に実施され、縄文時代早期の竪穴住居跡、古代の古墳が確認されている。また、包含層からは5世紀の古式土師器や黒曜石製の掻器が出土するなど、市内では数少ない遺構・遺物が確認された調査として注目された。今回資料提示したものは、平成17年度の報告で未掲載であったものだが、注目されるのは第27図63の甕であろう。同様の土器は隣村の滝沢村大釜館遺跡より出土しており、小破片ながら肉眼による比較では同様の土器であった。大釜館遺跡出土の土器は東海地方で5世紀代に流行した「宇田型甕」に比定され、宿田遺跡出土の甕についても同様のものと考えられる。また、宿田遺跡では出土量が少ないものの南小泉式に類似する古式土師器、北海道系の北大1式、宮城県湯の倉産黒曜石が出土するなど5世紀代の交流を知る上で重要な遺跡であることが改めて確認された。



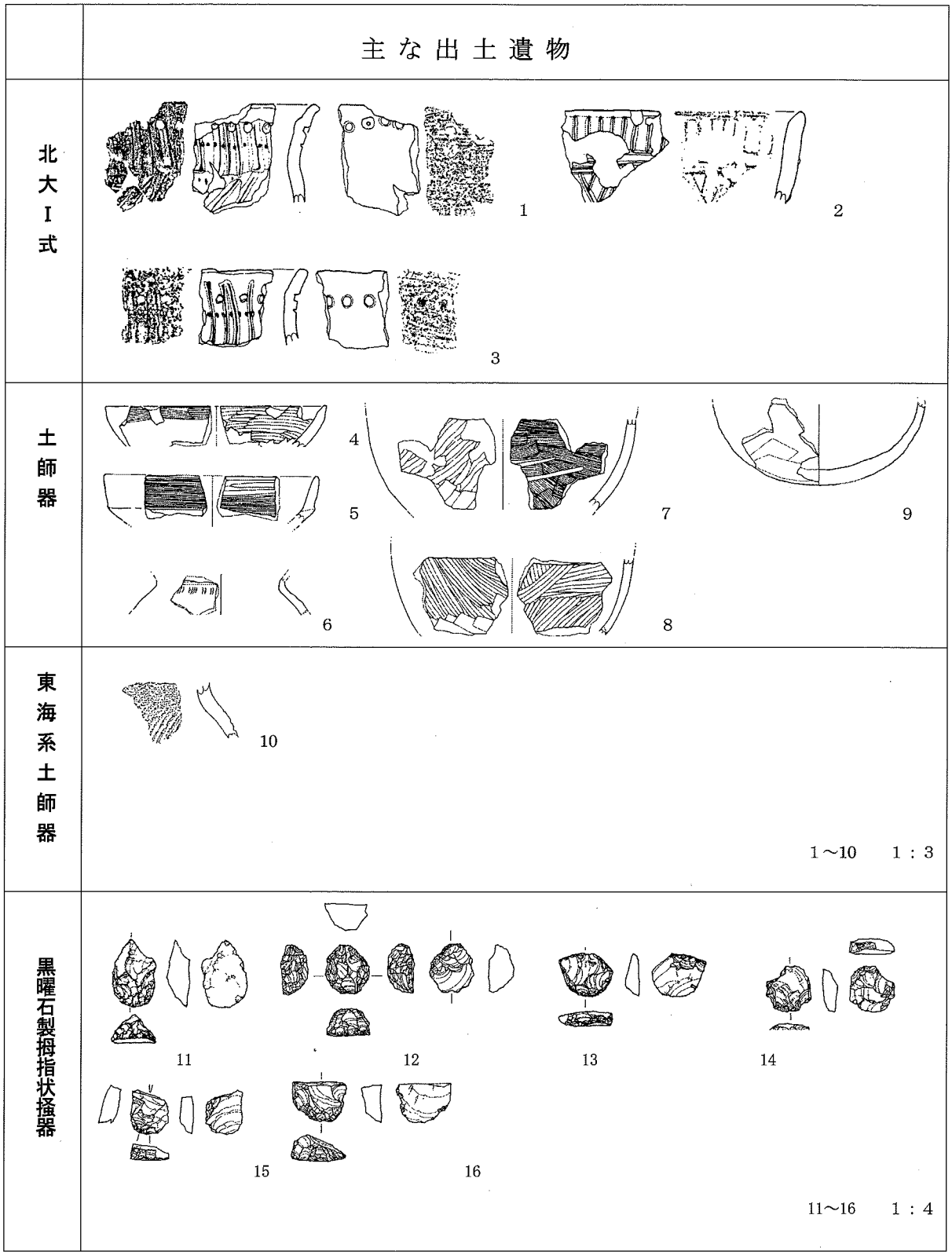

第26図　宿田遺跡第7・11次調査出土遺物（1）




第27図　宿田遺跡第7・11次調査出土遺物（2）




第28図　宿田遺跡第7・11次調査出土遺物（3）




第29図　宿田遺跡出土の古墳時代遺物

# Ⅳ．宿田南遺跡　（第９次調査）

## １．遺跡の概要

**遺跡の位置**　宿田南遺跡は、盛岡市の中心部より北西へ約 3km の盛岡市北夕顔瀬町地内に位置する。現況は宅地で周辺部よりも一段高くなっており、比高差は約４～５ｍである。遺跡の範囲は東西約 150m、南北約 150ｍと推定され、標高は 132～133ｍをはかる。

**遺跡の地形**　滝沢台地の南東部は北上川に沿って南へ舌状に張り出しており、諸葛川、木賊川、巣子川などで開析され、幾筋もの埋没谷が入りこんでいる。宿田南遺跡が立地する段丘は本来、滝沢台地南縁の一部であったものが河道によって侵食され、残丘になったものと考えられる。周辺には宿田・館坂・前九年遺跡など縄文時代早期を中心とした遺跡や、中世の遺構が多数確認されている里館遺跡が分布している。

## ２．調査成果

### （１）これまでの調査

**過去の調査**　昭和 61 年度から 17 年度までに８次にわたる調査が実施されている。これまでに確認された主な遺構は溝跡５条などでいずれも時期は不明である。

| 次数 | 所在地 | 調査原因 | 面積 | 期間 | 検出遺構・遺物 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 盛岡市北夕顔瀬町8-36 | 個人住宅建築 | 33㎡ | 86. 10. 27<br>86. 11. 01 | 時期不明溝跡１、柱穴20 |
| 試掘2 | 盛岡市北夕顔瀬町29-18 | 個人住宅建築 | 26㎡ | 90. 11. 06 | 遺構・遺物なし |
| 3 | 盛岡市北夕顔瀬町37-2ほか | 個人住宅建築 | 142㎡ | 94. 08. 22<br>94. 08. 25 | 時期不明溝跡２、柱穴６ |
| 試掘4 | 盛岡市北夕顔瀬町37-2ほか | アパート建築 | 113㎡ | 95. 03. 27 | 遺構・遺物なし |
| 試掘5 | 盛岡市北夕顔瀬町29-1 | アパート建築 | 38㎡ | 95. 11. 16 | 遺構・遺物なし |
| 試掘6 | 盛岡市北夕顔瀬町41-1ほか | アパート建築 | 64㎡ | 95. 12. 27 | 遺構・遺物なし |
| 7 | 盛岡市北夕顔瀬町26-20 | 個人住宅建築 | 63㎡ | 98. 05. 12<br>98. 05. 20 | 時期不明溝跡２ |
| 試掘8 | 盛岡市北夕顔瀬町38 | 個人駐車場建築 | ４㎡ | 05. 12. 05 | 土坑１ |
| 9 | 盛岡市北夕顔瀬町38 | 個人駐車場建築 | 126㎡ | 06. 04. 17<br>06. 06. 21<br>07. 04. 16<br>07. 08. 02 | 経塚１、近世土坑墓27、時期不明溝跡1<br>経石（多字一石経、一字一石経）<br>かわらけ、寛永通宝、煙管、手鏡<br>続縄文土器、黒曜石製石器 |

第4表　宿田南遺跡調査成果

## （2）平成18・19年度の調査

平成18・19年度の宿田南遺跡の発掘調査は、国庫補助事業として1件の個人駐車場建築に係る事前本調査を実施した。

**第9次調査**　第9次調査区は遺跡西端に位置し、第3次調査区の西側に隣接している。調査期間は平成18年4月16日～6月21日と平成19年4月17日～8月2日で、調査面積は126㎡である（第30図）。

2ヵ年にわたる調査の結果、礫石経塚1基、江戸時代の土坑墓27基、時期不明溝跡1条、古墳時代の遺物包含層を検出した。なお、礫石経塚および土坑墓等の詳細については平成20年度に別途報告書を刊行する予定である。

**礫石経塚**　経塚からは約32，000点の経石が出土している。そのうち判読および墨痕の認められる経石は調査終了時点で187点を数えた。経石の種類は、両面に隙間なく書写された多字一石経と両面あるいは三面書写の梵字である。なお現在、整理途中であり判読可能な経石の総数は変動する可能性がある。

**土坑墓**　土坑墓からは陶磁器・かわらけ・煙管・手鏡・寛永通宝などの副葬品のほかに、一字一石経が出土している。今年度は経石のみ報告することとした

**遺物包含層**　経塚盛土直下より、古墳時代の遺物を含む黒色土層を確認した。

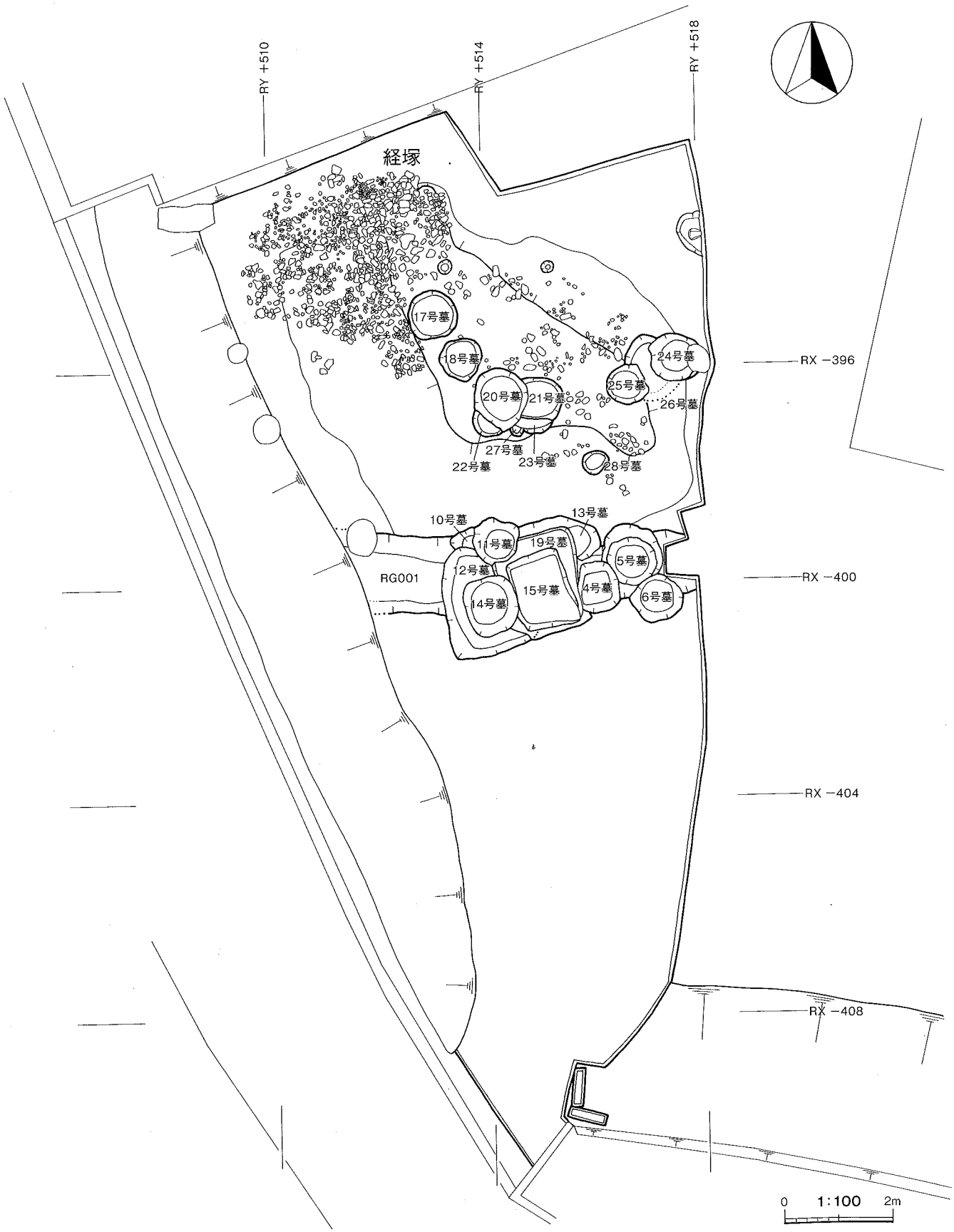
## （3）出土遺物（第31図1～第32図29）

**古墳時代**　1～6は続縄文（後北C2-D式）と考えられる土器である。1は微隆起線で区画された帯縄文と、刺突列によって施文された波状口縁を呈する深鉢である。口唇部に刻目が施された微隆起線を巡らし、波頂部より二条の微隆起線を垂下させ体部で微隆起線によって区画された弧状の帯縄文と連結する。体部下半はその弧状帯縄文から垂下する微隆起線に挟まれた、帯縄文と三角形刺突列が交互に施される。2は縦横に微隆起線を施す深鉢体部片である。3～5は帯縄文を施す深鉢体部片である。6は帯縄文を施す底部片である。

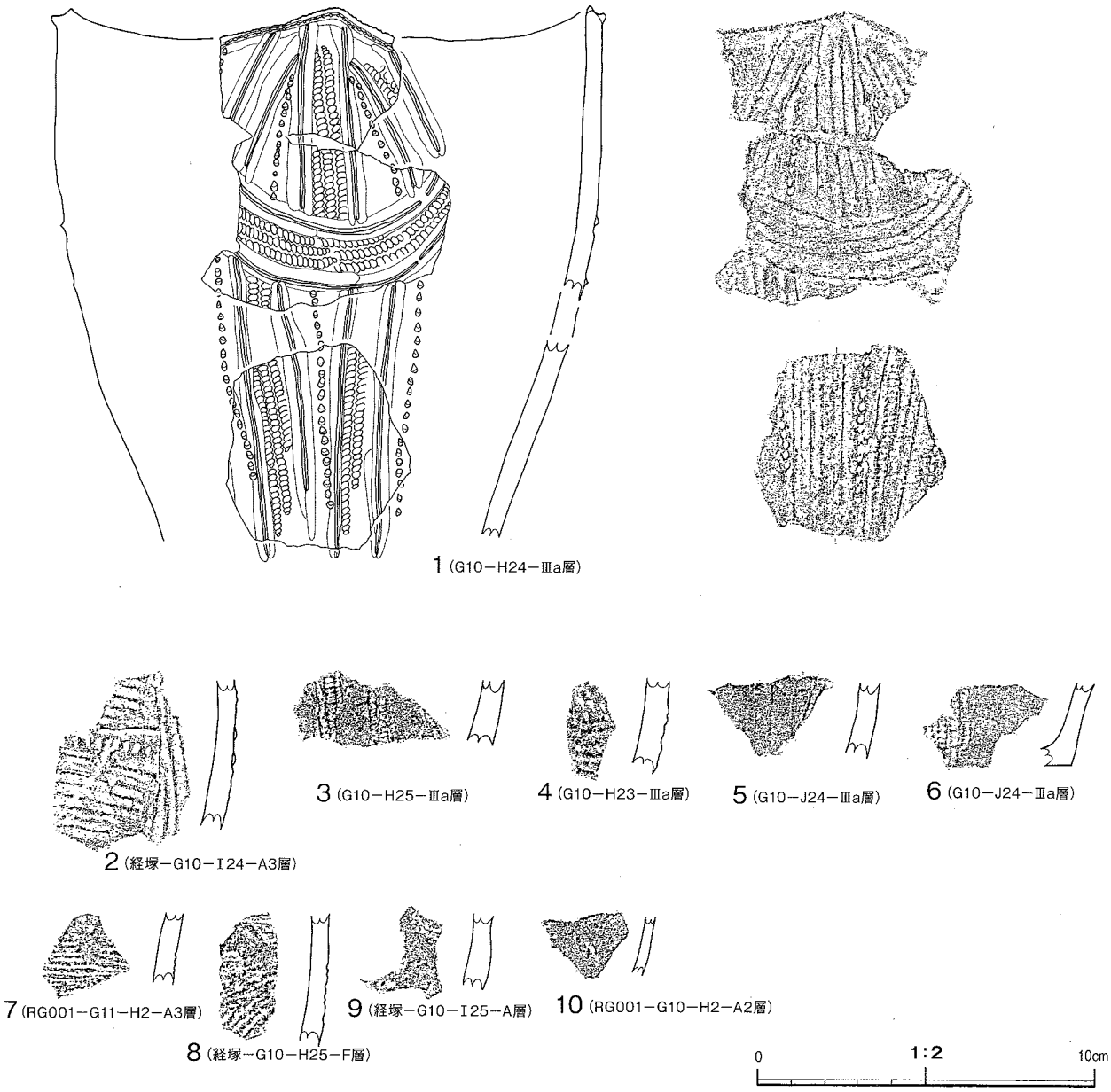
**弥生時代**　7～10は甕の体部である。7・8は付加条縄文を施す。9・10は無文部である。

**一字一石経**　土坑墓および表土（Ⅰa層）からは約3，400点の経石が出土しているが、そのうち判読および墨痕の認められる経石は19点のみであった。

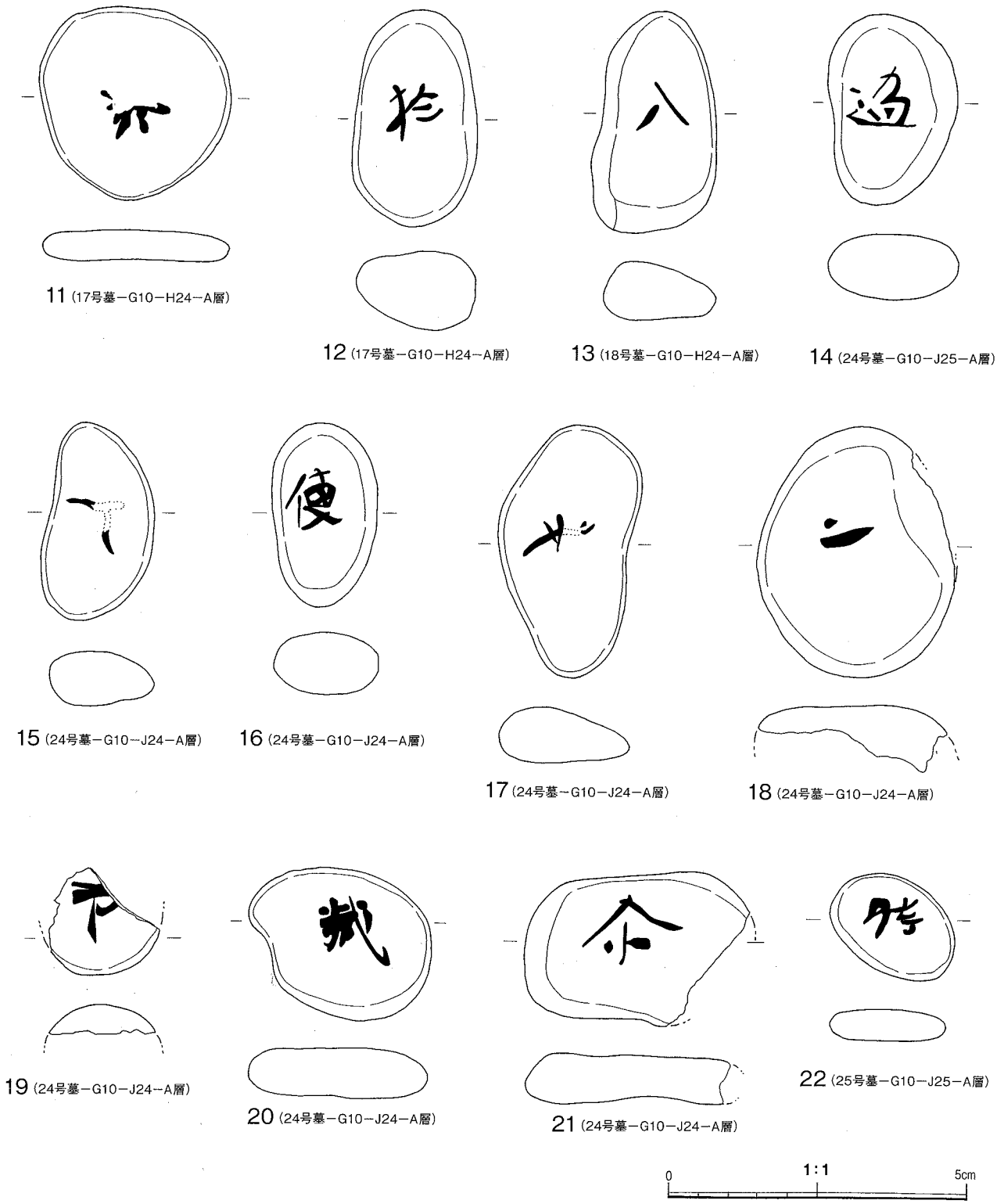
11は墨痕のみで文字は判読不能。12は「於」、「於」の異体字である。13は「入」。14は「過」、「過」の異体字。15は「入」あるいは「人」か。16は「便」。17・18は墨痕のみで判読不能。19は「令」の下部か。20は「隣」の異体字である「鄰」か。21は「尒」、「爾」の異体字。22は「時」あるいは「待」か。23は「過」、「過」の異体字。24は「何」もしくは「向」か。25は「中」か。26は「才」か。27は「億」。28は「辞」か。29は「名」もしくは「谷」か。



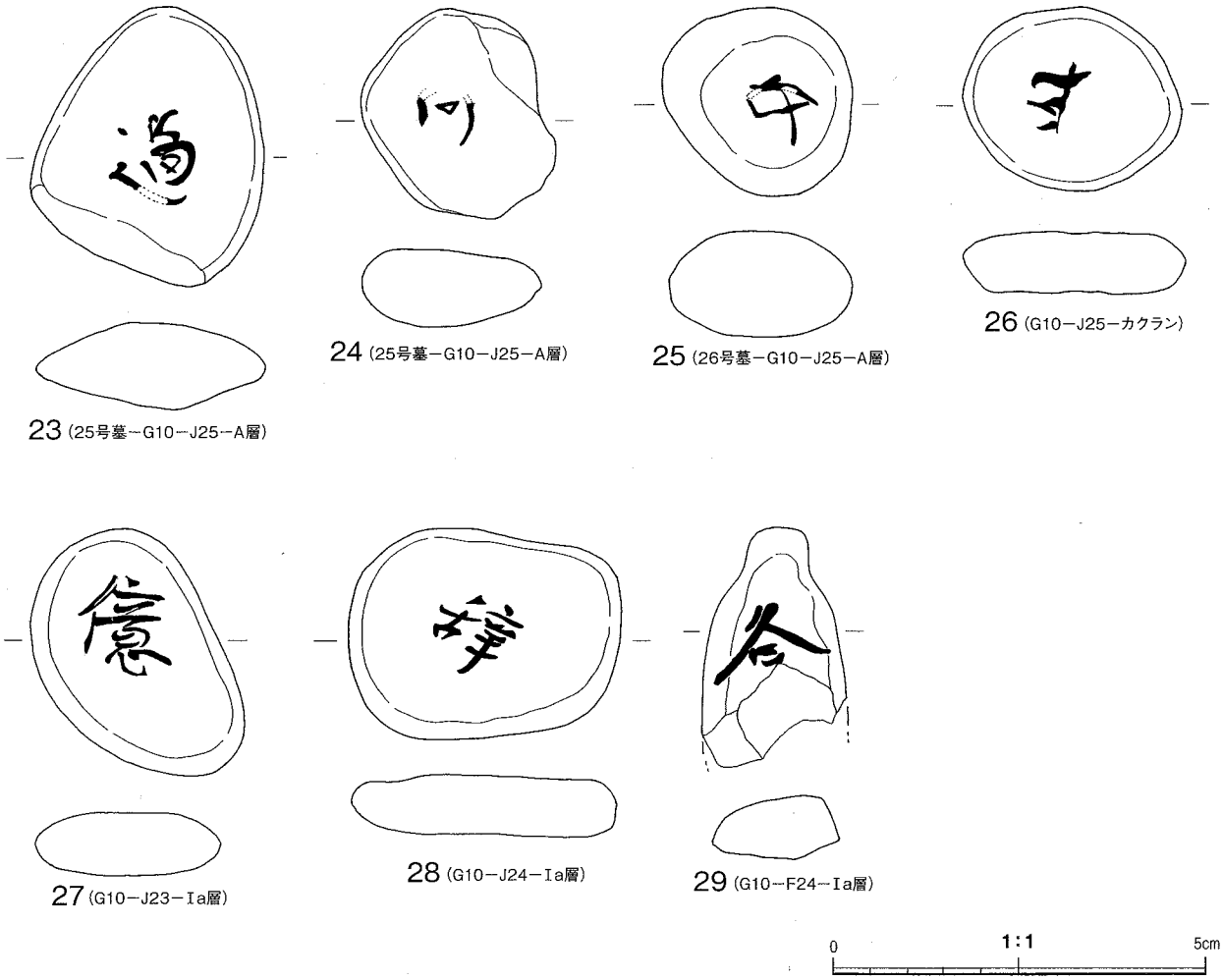

第30図　宿田南遺跡第9次調査区全体図




第31図　包含層出土遺物




第32図　土坑墓出土一字一石経




第33図　土坑墓・遺構外出土一字一石経

## 3．まとめ

2ヵ年にわたる調査の結果、県内でも事例のない多字一石経を埋納した礫石経塚、近世の土坑墓27基等を確認した。前述したように詳細については、平成20年度刊行予定の「盛岡市内遺跡群　平成20年度発掘調査報告書」にて記す。

**続縄文土器**　経塚盛土直下で確認された黒色土層からは、続縄文土器の破片が出土している。黒色土層は当時の旧表土と考えられるが、過去の調査では確認されていない。おそらく、経塚築造時にはこの層が段丘面に残存していたと考えられるが、後世の掘削等により失われ、その影響が及ばなかった経塚の盛土直下のみが今回の調査で確認されたと考えられる。出土した土器は、口唇部に刻目を加えた微隆起線を巡らし、体部上半は微隆起線に挟まれた帯縄文が縦位あるいは弧状に組み合い、三角形刺突列が施文されるものである。市内では安倍館遺跡や永福寺山遺跡でも同様の土器が出土しており、後北C2-D式期中段階に位置づけている（盛岡市教委 1997・1999）。また、本遺跡の北部に位置する宿田遺跡では、北大Ⅰ式期に位置づけられる土器や古式土師器、黒曜石製拇指状掻器が出土している（盛岡市教委 2002）。

**一字一石経**　土坑墓および表土から出土した墨痕が認められる経石は19点を数え、判別できるものは、すべて

漢字が書写されていた。礫石経塚に納められる経典の中で最も使用頻度が高い経典は「妙法蓮華経」であることから、判読できた文字を『大正新脩収藏經』テキストデータベースで検索したところ、すべて妙法蓮華経の中に含まれている文字であることが分かった。しかし、土坑墓から出土した経石は3,400点あまりで妙法蓮華経の総数69,384字には遠く及ばない。さらに土坑墓単体であれば1、000点も出土していないのがほとんどである。おそらく、妙法蓮華経八巻二十八品のうちの一部分を書写したものである可能性が高い。

**埋経の目的**　経塚出現は10世紀末と考えられている。当初の目的は末法思想に基づき、後世に経典を残すことであり、経典も紙本経が主であった。中世以降、末法思想は薄れ、埋経の意味・目的は変化し、経典の媒体も紙本経から礫石経へと変わってゆく。近世の経塚造営の目的は専ら、先祖供養・子孫繁栄・五穀豊穣・村内安全などの現世利益的な性格が強くなる。盛岡市内では永祥院経塚（盛岡市教委1985）などが調査されているが、法名を記した多字石が多いことから追善供養の目的で造営されたと思われる。今回、宿田南遺跡で出土した一字一石経は、経典・願文等は明らかでないが、土坑墓にともなうものであることから追善供養としての埋経であったと考えられる。

（佐々木亮二）

【引用・参考文献】

盛岡市教育委員会 1985『盛岡市埋蔵文化財年報』―昭和55～58年度―

盛岡市教育委員会 1997『永福寺山遺跡』－昭和40・41年発掘調査報告書―

盛岡市教育委員会 1999『安倍館遺跡』―厨川城跡の調査―

盛岡市教育委員会 2002『盛岡市内遺跡群』―平成13年度発掘調査概報―

# Ⅴ．大宮北遺跡（第11・13次調査）

## 1．遺跡の環境

### （1）遺跡の概要

**位　　置**　大宮北遺跡はJR盛岡駅から南西に約2kmの本宮字小幅・大宮地内に所在する。現状は宅地および畑・果樹園であるが、遺跡の東側は土地区画整理事業区域内（盛岡南新都市開発）に位置し、宅地化が進められている。遺跡範囲は南北約250m、東西約300mと推定される。標高は126m前後である。

**地形・地質**　本遺跡は、雫石川によって形成された低位沖積段丘に立地する。この低位沖積段丘は雫石川南岸に発達しており、網目状の旧河道によって画され、これらは1m内外の比高差として確認できる。

**周辺の遺跡**　本遺跡の周辺には、古代から中世にかけての遺跡が多く分布している。北東に小幅遺跡、宮沢遺跡、東に鬼柳A遺跡、南に大宮遺跡、北西に林崎遺跡、そして西約300mには国指定史跡志波城跡が立地し、各遺跡は旧河道によって画されている。本遺跡に隣接する小幅・宮沢遺跡では9世紀後半から10世紀の竪穴住居跡を主体とした集落および近世の建物跡が検出されている。林崎遺跡は志波城跡の北東に隣接し、9世紀後半の竪穴住居跡、10世紀後半の掘立柱建物跡や板塀跡が検出されている。また、竪穴住居跡より「寺」と書かれた墨書土器や多嘴瓶、灯明皿に使われたと考えられる坏など、宗教的な遺物が出土することから一般的な集落と異なる性格の遺跡であることが考えられる。隣接する大宮遺跡の大溝跡からは、12世紀末～13世紀初頭に位置づけられるかわらけが多数出土している。

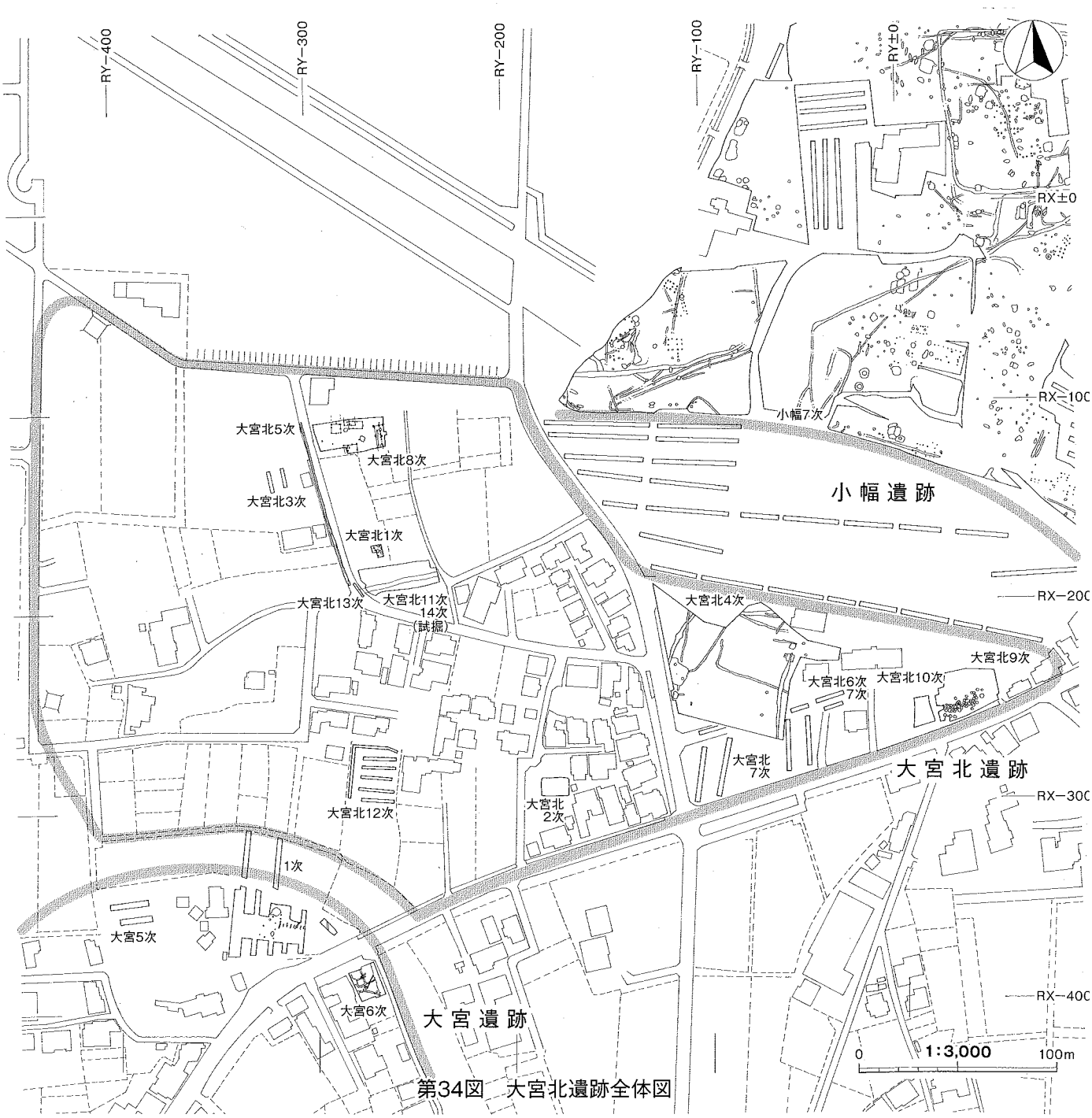
| 次数 | 所在地 | 調査原因 | 面積 | 期間 | 検出遺構・遺物 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 本宮字小幅地内 | 個人住宅建築 | 22㎡ | 84.05.09～84.05.17 | 平安時代土坑8基 |
| 試掘2 | 本宮字大宮61-5 | 住宅改築 | 120㎡ | 86.11.17～86.11.18 | 遺構・遺物なし |
| 試掘3 | 本宮字大宮98－4 | 個人住宅建築 | 41㎡ | 93.07.13 | 遺構・遺物なし |
| 4 | 本宮字小幅13－1 | 盛南開発事業 | 3,900㎡ | 96.04.05～96.05.24 | 平安時代竪穴住居跡他 |
| 5 | 本宮字小幅98－4、97－4 | 水道管敷設 | 170㎡ | 98.09.01～98.09.07 | 平安時代の溝跡3条 |
| 試掘6 | 本宮字小幅16－3 | 盛南開発事業 | 120㎡ | 99.11.17 | 遺構・遺物なし |
| 試掘7 | 本宮字小幅16-4 | 盛南開発事業 | 257㎡ | 00.05.23～00.07.10 | 遺構・遺物なし |
| 8 | 本宮字小幅1 －3 | 個人住宅建築 | 500㎡ | 00.06.02～00.07.10 | 平安時代の掘立柱建物跡7棟他 |
| 9 | 本宮字小幅18-1、18-3 | 盛南開発事業 | 792㎡ | 00.05.23～00.06.01 | 近世～近代の土坑墓。 |
| 10 | 本宮字小幅16-7 | 盛南開発 | 440㎡ | 01.04.23～01.04.24 | 遺構なし。 |
| 11 | 本宮字小幅 5-1 | 個人住宅建築 | 1,009㎡ | 07.04.11～07.04.24 | 平安時代の溝跡1条。 |
| 試掘12 | 本宮字大宮60-19 | 個人住宅建築 | 231㎡ | 07.05.24 | 遺構・遺物なし |
| 13 | 本宮字大宮98－4 | 下水道管敷設 | 16㎡ | 07.05.28 | 平安時代の溝跡1条 |
| 試掘14 | 本宮字大宮153 | 農地施設建築 | 126㎡ | 07.07.17 | 遺構・遺物なし |

第5表　大宮北遺跡調査成果

## 2. 調査の概要

### （1） これまでの調査

本遺跡は、昭和 59 年度から今年度まで 14 次にわたる調査が実施されている。個人住宅の建設、上下水道管敷設、区画整理（盛岡南新都市開発整備事業）、それにともなう個人住宅の代替地としての発掘調査が実施されている。第４次調査は、区画整理（盛岡南新都市開発整備事業）に伴う発掘調査で、平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、溝跡が検出されている。第８次調査では、建替えの認められる掘立柱建物跡と土坑が検出され、土坑内より 10 世紀後半に位置づけられる土器が多数出土した。第９次調査区では、近世から近代にかけての土坑墓が 60 基確認されている。




第34図　大宮北遺跡全体図

## （２） 平成19年度の調査

**調査の概要**　平成19年度は、個人住宅建設（第11次）と関連する上下水道管敷設（第13次）に伴う発掘調査を実施（第５表）し、調査の結果、平安時代の溝跡（ＲＧ０１５）が１条検出され、溝跡埋土より10世紀代に製作されたと考えられるあかやき土器が出土した（第36図1～15）。

### ＲＧ０１５溝跡（第35図）

**位　　置**　調査区中央を東西に延びる。　**断 面 形**　箱堀状を呈する。

**規　　模**　検出された総延長10.3m、最大幅上端2.61m・下端1.95m、深さ0.83m

**検 出 面**　表土直下

**壁の状態**　底面より直立ぎみに立ち上がる。　**底　　面**　平坦

**埋　　土**　自然堆積による。Ａ・Ｂ層に大別され、Ａ層は４層、Ｂ層は６層に細分される。

$B_6$層とした層は砂質土・礫を主体とした水流によって形成された層と考えられる。しかし、$B_1$～$_5$層は周辺の地山である黄褐色土と暗褐色土、炭化物が混在することから人為的な混合土と考えられ、さらにその上面に完形土器を含む多量の土器等が廃棄されていることから人為による用水路的な機能の停止とそれに関わる儀式的な行為が想像された。

Ａ層－黒褐色土を主体とし、粒状の黄褐色土の混入量により４層に細分され、全体的に礫が混入する。

Ｂ層－暗褐色土を主体とする。粒～塊状の黄褐色土の混入量により層が細分されるほか、$B_3$層・$B_5$層に微量の炭化物が含まれる。$B_6$層は砂質の黄褐色シルトを主体とする層で多量の礫が混入する。

**遺物の出土状況**　Ｂ層上面を中心に遺物が出土したほか、図示していないが溝底面より須恵器甕片が出土。

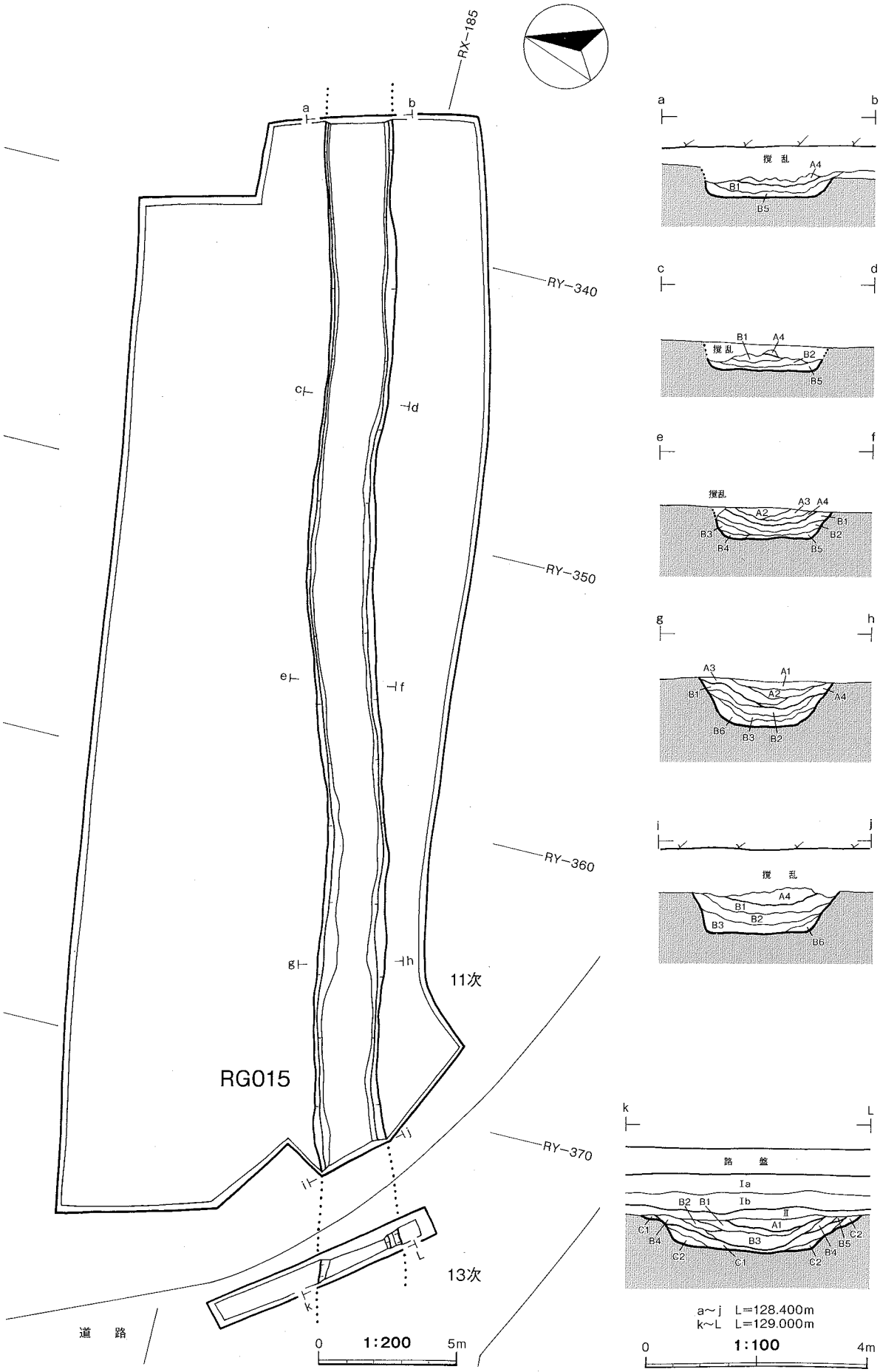
### 遺物（第36図１～15）

**あかやき土器坏**　１～９はロクロ整形によるあかやき土器坏で、全て回転糸切り手法で無調整である。

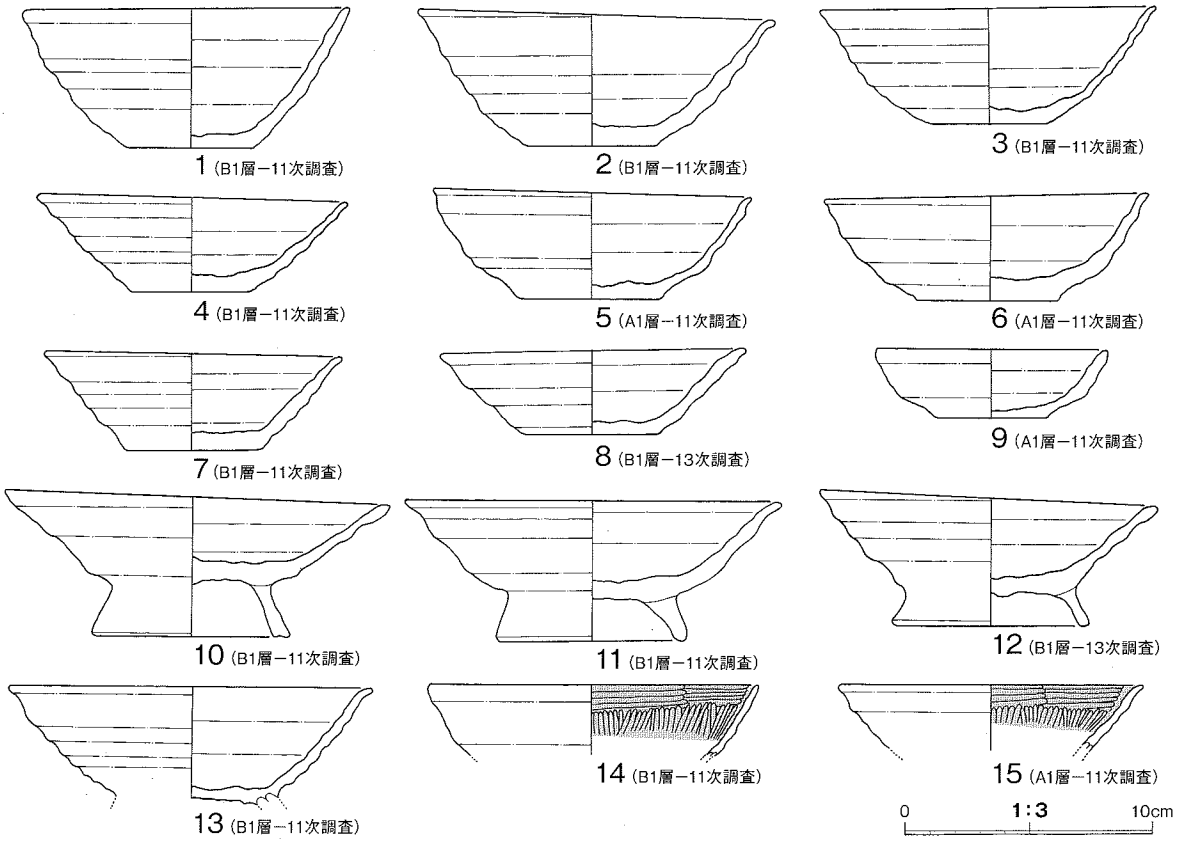
１～３は口縁部がやや外反し、体部下半にふくらみを持つ器形である。４・７・８は底部から直線的に器壁が外反する器形の坏である。５・６は体部下半にふくらみを持ち、底部付近がしまる坏である。９は小形坏である。

**高台付坏**　10～13はあかやき土器高台付坏で、口縁部が外反し、リング状の高台部を坏底部に接着させるものである。

**土師器坏**　14・15は内面ミガキ調整、黒色処理される土師器坏である。




第35図　大宮北遺跡　第11・13次調査全体図




第36図　RG015溝跡出土遺物

## （3） まとめ

**ＲG015 溝跡**　今回の第 11・13 次発掘調査で確認されたＲＧ０１５溝跡は遺跡南辺を東西に延びるもので形状が箱堀状を呈し、幅 2.5m内外の溝である。埋土は、Ａ・Ｂ層に大別され、層相を観察した結果、人為的に埋められた溝である可能性が高い。さらに、第８次調査では 10 世紀代の土器が伴う掘立柱建物跡が７棟検出されていることからも一般的な集落ではないことが明らかである。これらのことからＲＧ０１５溝跡は、掘立柱建物群が建築された空間を区画する遺構であることも考えられる。

**出土土器**　ＲＧ０１５溝跡よりあかやき土器の坏類が出土している。これらの土器はＢ層上面に集中することから一括廃棄されたものと考えられる。器種構成は坏・高台付坏・小形坏からなり、少量であるが内面黒色処理の土師器坏が伴う。高台付坏や小形坏の存在から 10 世紀代と考えられるが、内外面ミガキの高台付土師器坏、小皿が伴わないことから 10 世紀後半まで年代が下る土器群ではないものと考えられる。

盛岡周辺における古代末期の様相は未だ不鮮明な点が多い中で、今回の溝跡一括土器群の発見は、その様相を知る上で重要な成果であったといえよう。

# Ⅵ. 館遺跡(第 20 次調査)

## 1. 遺跡の環境

### （1）遺跡の概要

**位　　置**　館遺跡は、東北縦貫自動車道盛岡インターチェンジから南へ約２ｋｍの盛岡市上太田館・松ノ木地内に所在する。遺跡の範囲は東西約 200～220m、南北 110～150m と推定され、道路や水路に囲まれている。周辺には水田がひろがり、宅地が点在する。本遺跡の現況は宅地、寺院の境内地である。

**地形・地質**　本遺跡を含む太田地区の遺跡は、雫石川の流路転換によって形成された沖積段丘上に立地している。この沖積面には雫石川の下刻により大きく４本の旧河道が確認されており、これら旧河道の両岸には自然堤防や微高地（沖積段丘）が形成されている。館遺跡もこの沖積段丘上に立地している。

**周辺の遺跡**　太田地区には、古代城柵志波城をはじめとする古代の遺跡が数多く分布する。現在までに縄文時代後期から近世に至る遺跡が確認されている。縄文時代後期以前の遺跡は、太田地区の南に接する箱ヶ森（865m）山麓に形成される扇状地上に数多く分布する（上平遺跡群）。

本遺跡に関連する古代・中世の遺跡は、遺跡数が少ないものの７世紀後半の集落が竹鼻遺跡・台太郎遺跡で確認され、８世紀以降になると遺跡数が増加する傾向になる。太田蝦夷森古墳群や高舘古墳群といった古墳群と共に、志波城跡、八卦遺跡、八ツ口遺跡、松ノ木遺跡など、８世紀後半の集落が現れ、9 世紀初頭（延暦 22 年・西暦 803 年）には古代城柵志波城が造営される。志波城は朝廷の北東北経営の拠点的な役割を担ったと考えられ、志波城廃絶以降になると、周辺域に集落が拡散し、10 世紀後半には地域支配の拠点的な集落も見られるようになる（林崎遺跡・大宮北遺跡など)。11 世紀代の遺跡は現在未確認であるが、これまで 10 世紀と考えられていた一部の遺構・遺物が該当してくる可能性もあり、これまでに出土した 10 世紀代の土器を再調査し相対年代から編年を構築する必要があるであろう。古代末から中世初頭の遺構・遺物は大宮遺跡より検出されている。大宮遺跡より検出された大溝内より多量のかわらけが出土しているが、小規模な調査であったため遺跡の全体像を掴むまでに至っていない。

中世になると、台太郎遺跡・矢盛遺跡・向中野館遺跡・飯岡館遺跡・猪去館遺跡などに地域支配の拠点となる城館が築かれるようになる。本遺跡周辺では、猪去館が斯波氏一族の猪去氏の居城に擬定され、斯波氏家臣の飯岡館に飯岡氏、多田氏（太田氏）が太田館に、多田氏の分流の大釜氏が大釜館（滝沢村）に居を構えていたことが知られる。また、『岩手県史』３は「奥南盛風記」を引いて、天正元（1573）年に、九戸政実と結んだ滴石斯波氏が、太田、大釜の両館を焼き払い、不来方城まで押し寄せた事を伝えている。

第37図　館・松ノ木遺跡全体図

## 2. 調査の概要

### (1)過去の調査

上太田館地内は以前から平安時代の土器が採集される遺跡として周知され、また戦国期の太田館跡と推定されていた遺跡である。昭和 54 年の墓地造成にともなう調査（1次調査）の実施以降、本遺跡は平安時代集落跡、中世城館跡であることが確認されている。寺の墓地から南西側にかけて、東西約 70～80m、南北約 80m以上の隅丸方形、あるいは隅丸長方形の曲輪が存在し、周囲には土塁と堀が廻らされている。また、本遺跡の北側に隣接する松ノ木遺跡でも古代の竪穴住居のほか、館に関係する可能性のある大溝の一部が確認されていることから、現在の本堂や庫裏、南側墓地のあたりにもう一つの曲輪が存在する可能性も考えられる。

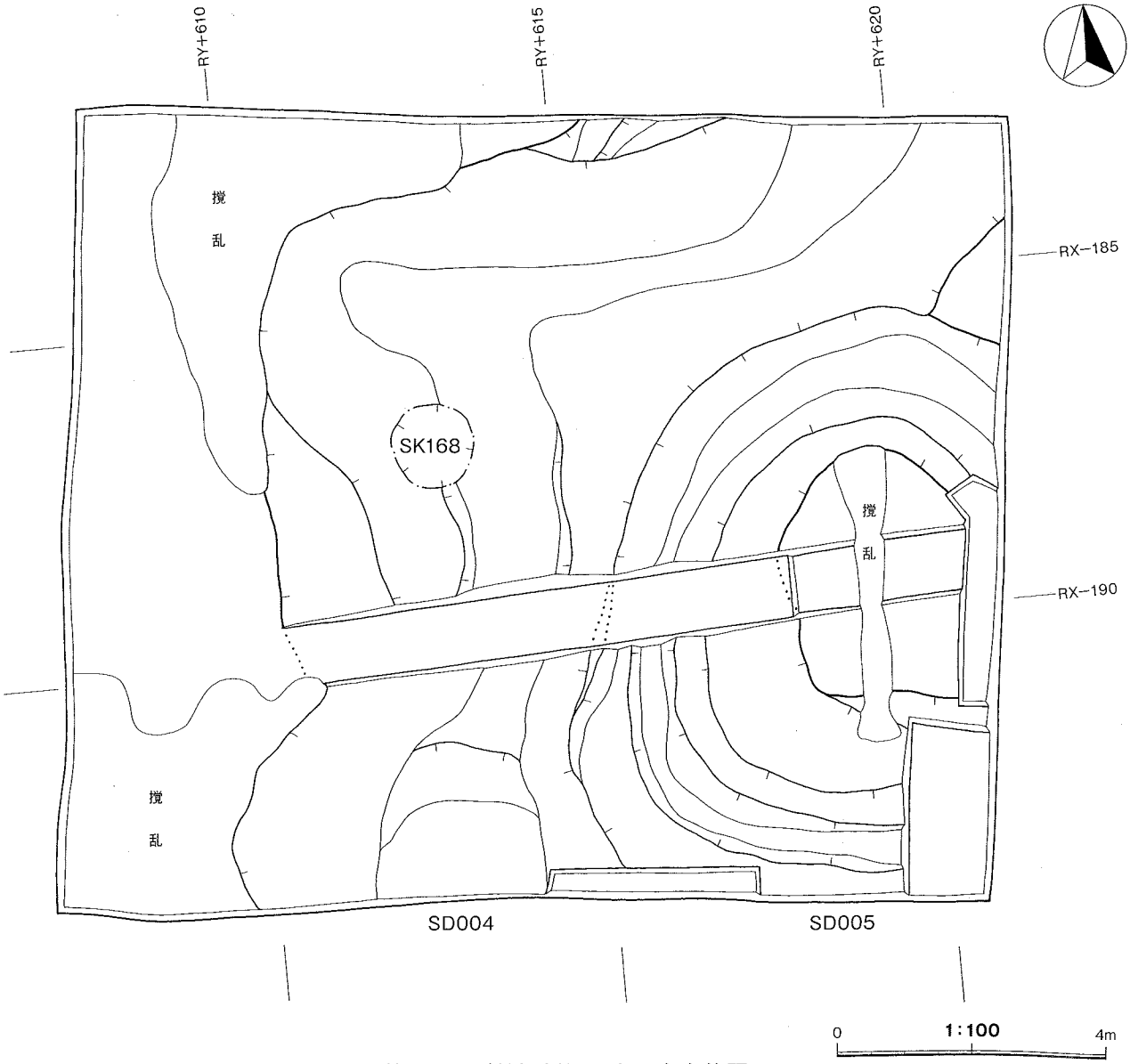
| 次数 | 所在地 | 調査原因 | 面積(㎡) | 期間 | 検出遺構・遺物 |
|---|---|---|---|---|---|
| 館 1 | 上太田67 | 墓地造成 | 1,600 | 79.04.13<br>79.06.28 | 平安時代の竪穴住居9棟，竪穴1棟，<br>土坑1基，中世以降の竪穴3棟他 |
| 館 2 | 上太田56- 3 | 墓地造成 | 564 | 82.04.20<br>82.07.19 | 平安時代の竪穴住居13棟，竪穴1棟，<br>土坑5基，中世以降の堀・溝跡2条，<br>土塁1条，土坑11基，ほか柱穴多数 |
| 館 3 | 上太田58 | 住宅増築 | 35 | 82.07.19<br>82.07.29 | 中世以降堀跡4条，土坑2基 |
| 館 4 | 上太田67 | 土塁調査 | 23 | 82.08.04 | 近世土坑墓1基 |
| 館 5 | 上太田66 | 物置新築 | 120 | 84.06.25<br>84.06.28 | 中世以降堀跡1条，柱穴1口 |
| 松ノ木 6 | 上太田松ノ木53- 1 | 小屋新築 | 600 | 86.04.24<br>86.05.31 | 平安時代竪穴住居5棟，土坑1基，<br>中世以降堀跡1条，溝跡4条，土坑1基 |
| 松ノ木 7 | 上太田松ノ木54- 1 | 物置新築 | 104 | 88.10.24<br>88.11.06 | 平安時代竪穴住居4棟 |
| 松ノ木 8 | 上太田松ノ木69- 1 | 住宅新築 | 187 | 90.04.26<br>90.05.14 | 平安時代竪穴住居1棟，<br>中世以降堀跡1条，溝跡2条 |
| 松ノ木 9 | 上太田松ノ木地内市道 | 農家排水 | 235 | 90.10.15<br>90.10.29 | 中世以降堀跡1条，溝跡3条 |
| 館 10 | 上太田松ノ木地内市道 | 農家排水 | 40 | 90.10.15<br>90.10.29 | 中世以降堀跡1条 |
| 館 11 | 上太田松ノ木地内市道 | 農家排水 | 70 | 90.10.15<br>90.10.29 | 平安時代竪穴住居3棟，溝跡2条，<br>中世以降溝跡2条， |
| 松ノ木 12 | 上太田松ノ木52- 7 | 住宅新築 | 308 | 91.04.08<br>91.04.09 | 中世以降溝跡1条，土坑1基 |
| 館 13 | 上太田舘61 | 住宅新築 | 221 | 92.04.13<br>92.05.29 | 平安時代竪穴住居11棟，<br>平安時代以降の竪穴1棟，溝跡7条他 |
| 館 14 | 上太田舘66 | 墓地造成 | 200 | 92.05.18<br>92.05.20 | 竪穴住居1棟，柱穴4口 |
| 館 15 | 上太田舘57- 1 | 墓地造成 | 621 | 93.04.26<br>93.07.16 | 平安時代の竪穴住居22棟，土坑24基，<br>溝跡2条，円形周溝以降1基他 |
| 松ノ木 16 | 上太田舘67 | 位牌堂、<br>開山堂建設 | 595 | 94.09.01<br>94.10.26 | 近世土坑墓113基，近世以降竪穴2棟，<br>土坑3基，近世溝跡2条 |
| 松ノ木 17 | 上太田松ノ木52- 10 | 倉庫新築 | 230 | 95.08.07<br>95.09.04 | 平安時代竪穴住居2棟，溝跡1条，<br>中世以降の竪穴2棟，堀跡1条，溝跡3条 |
| 館 18 | 上太田舘66 | 寺院会館の<br>建設 | 550 | 04.04.26<br>04.06.11 | 中世掘立柱建物跡2棟，土塁1条，<br>溝跡1条，中世～近世の土坑8基他 |
| 館 19 | 上太田舘57- 1 | 擁壁設置 | 170 | 04.06.07<br>04.06.29 | 中世の堀跡1条 |
| 館 20 | 上太田舘58 | 住宅改築 | 107 | 07.06.14<br>07.07.24 | 中世の堀跡2条，近世以降の溝跡1条，<br>近世土坑墓6基，近世土坑4基 |

第6表　館・松ノ木遺跡調査成果

## （２）平成 19 年度の調査

**位　　置**　今年度は個人住宅建築にともなう調査を行った。調査区は、遺跡のほぼ中央南西寄りに位置する。本調査区内は昭和 57 年に住宅増築にともなう調査（第３次調査）が実施されており、中世以降の堀・溝跡が４条、土坑が２基確認されている。今回の調査ではそれらに連続する堀・溝跡の検出が予想された。遺構検出作業は地表面から約 40～60 ㎝下の褐色シルト層にて行った。住宅基礎や下水配管による撹乱が認められたが、調査区の南域から北東に渡って堀跡が確認された。また、調査期間中の地震・長雨の影響で、調査区北壁及び南壁が崩壊した。その為、近世の土坑墓（ＳＫ167）が平面的に調査不可能となった。

**遺構・遺物**　検出した遺構は、中世以降の堀跡が２条、近世以降の溝跡が１条、近世の土坑墓が 10 基である。出土遺物は堀跡底面付近から瀬戸灰釉平碗片、近世の土坑墓から寛永通寶約 30 枚、及び銅製の手鏡である。その他、土師器・須恵器片が堀跡・溝跡の埋土中から多数出土しているが、これらは周辺の竪穴住居跡から流入したものと考えられる。




第38図　館遺跡第20次調査全体図

## 3 遺構・遺物

**検出状況**　調査の結果、中世の堀跡２条（ＳＤ004 堀跡、ＳＤ005 堀跡）、近世の土坑墓 10 基（ＳＫ159～ＳＫ168）、溝１条（ＳＤ003 溝跡）が検出された。ＳＤ004 堀跡はＳＤ005 堀跡より古く、ＳＤ004 堀跡埋土Ｂ層上面で近世土坑を検出した。このことから、近世までは堀の窪みが残り、そこに土坑墓が構築されたと考えられる。

### （１）中世の堀跡

**ＳＤ００４堀跡（第 39 図）**

**位　置**　調査区南壁ほぼ中央から調査区北東隅にのびる

**平 面 形**　調査区南壁ほぼ中央から北へ伸び、北壁手前で調査区北東隅へ屈曲する。また、調査区中央付近でやや幅が狭くなる。　**断 面 形**　逆台形

**規　模**　検出された長さは 15.75ｍをはかり、幅は上端最大 7.7ｍ、下端 2.5ｍをはかる。

**重複関係**　ＳＫ159～ＳＫ168、ＳＤ003 に切られＳＤ005 を切る。

**掘 込 面**　削平　**検 出 面**　表土直下褐色シルト層上面

**埋　土**　埋土は自然堆積でＡ～Ｅ層に大別され、各層はさらに細分される。

Ａ層－黒～黒褐色シルトを主体とし、粉状に暗褐色土、粉～粒状に褐色土を含む。

Ｂ層－褐色シルトを主体とし、粉状に黒褐色～暗褐色、粉～粒状に黒色土、グライ化土を含む。

Ｃ層－黒褐色～暗褐色を主体とし、粉～粒状に褐色土を含む。

Ｄ層－黒褐色土を主体とし、粉～粒状に褐色土を多量に含む。

Ｅ層－グライ化粘土層を主体とし、鉄分を多く含む。粒状の焼土、粒～小塊状の炭化物を含む。

**壁の状態**　全体的に緩やかに外傾して立ち上がる　**底面の状態**　ほぼ平坦

**出土遺物（第 44 図１）**Ｅ層より、瀬戸灰釉平碗の口縁部片が出土した。全体的に薄く灰釉が施されている。表面には二次焼成が認められる。その他図示していないが、検出面や埋土中層から平安時代の土師器・須恵器片の小破片が出土している。

**ＳＤ００５堀跡　（第 40 図）**

**位　置**　調査区東側　**平 面 形**　コ字状に屈曲する。　**断 面 形**　薬研～皿状を呈する。

**規　模**　上端 3.0ｍ、下端 0.9ｍをはかる。　**重複関係**　ＳＤ003、ＳＤ004 に切られる。

**掘 込 面**　削平　**検 出 面**　ＳＤ003 溝跡Ｃ３層上面

**埋　土**　埋土は自然堆積でＡ～Ｄ層に大別し、各層はさらに細分される。

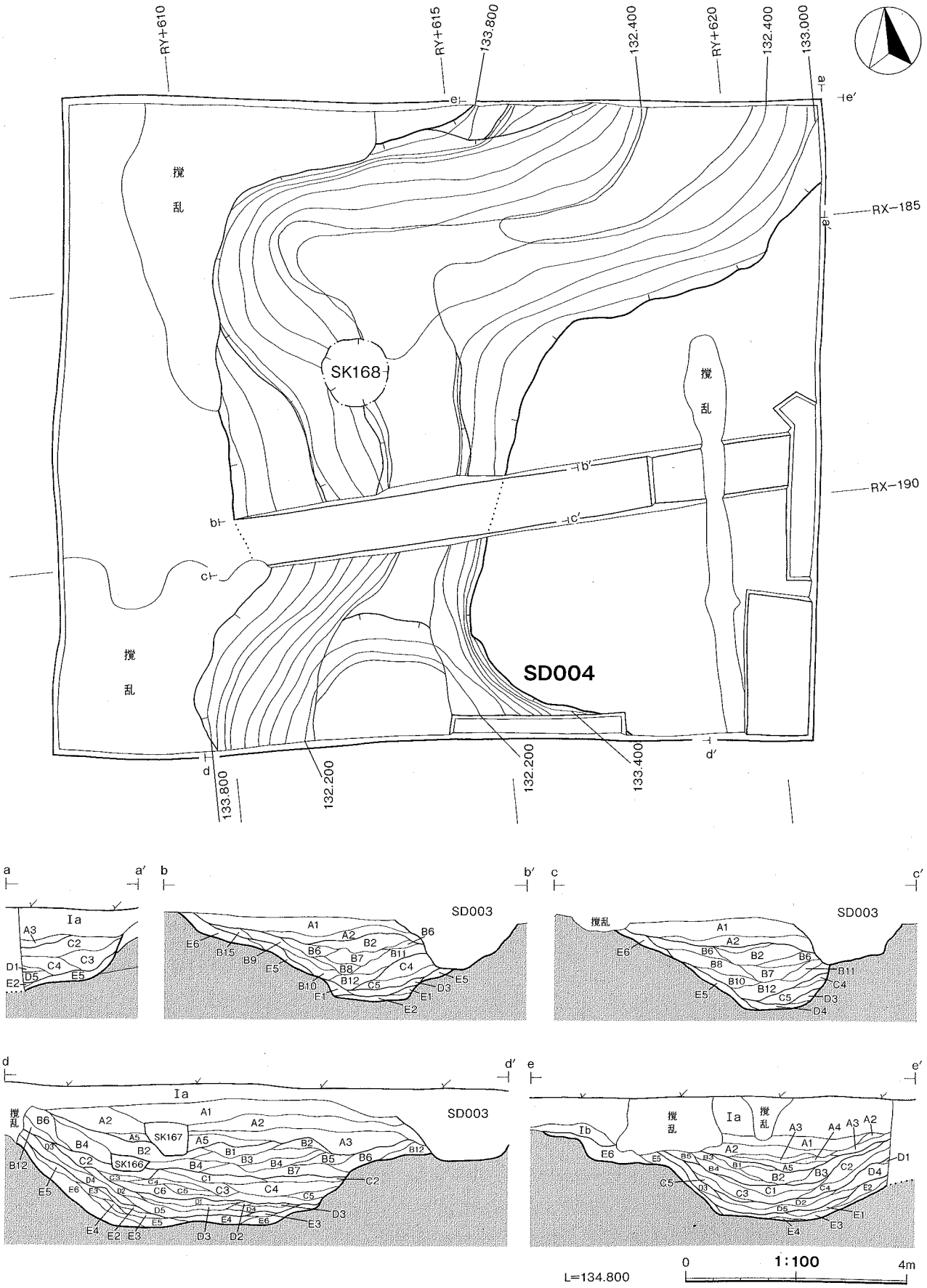
Ａ層－黒褐色～褐色を主体とし、粒状の黒褐色土、または褐色土、砂礫、グライ化した粘土を含む。

Ｂ層－褐色～黒褐色土を主体とし、粒状の暗褐色土、砂礫、鉄分、グライ化した粘土を含む。

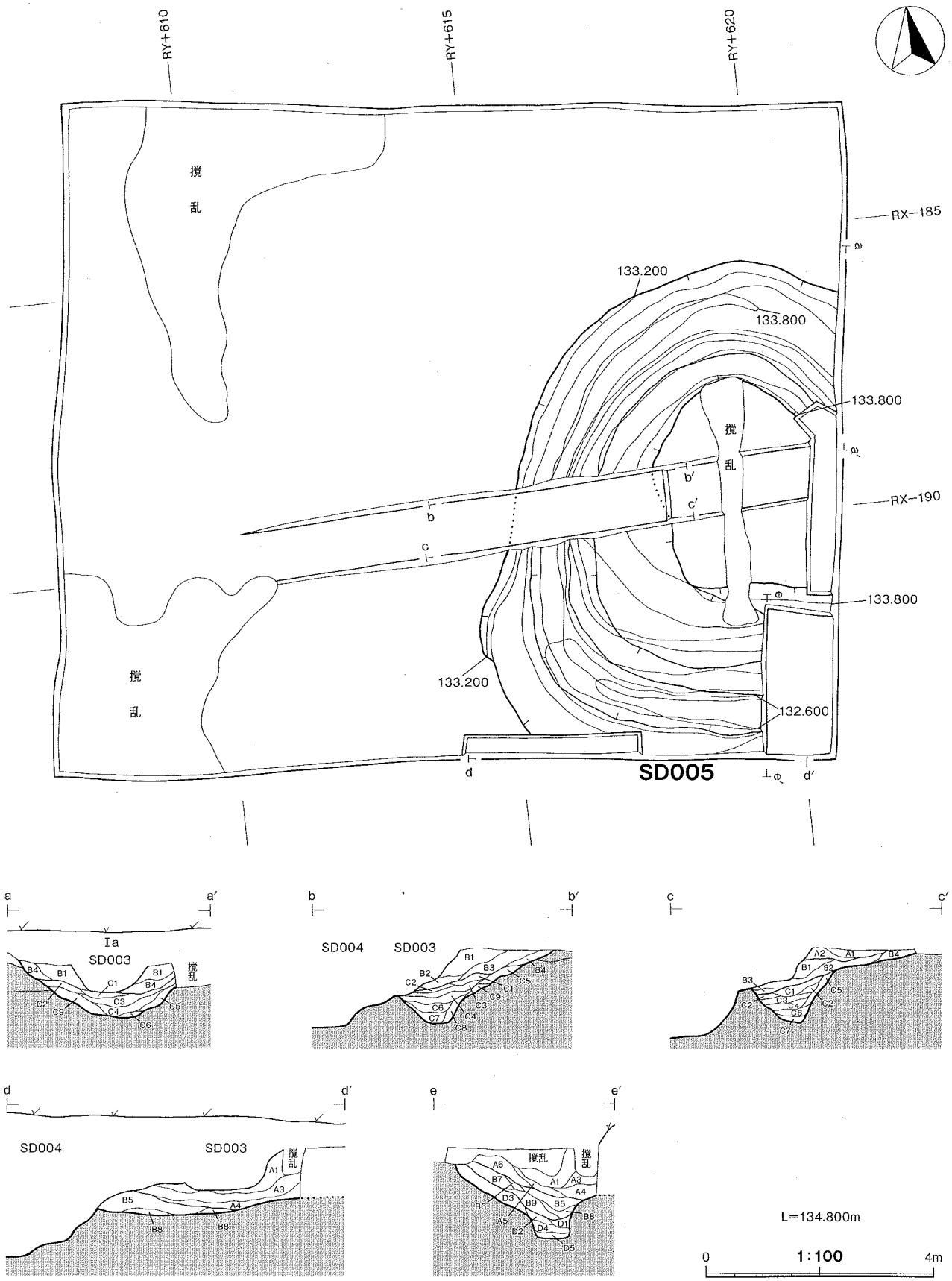
Ｃ層－黒褐色を主体とし、褐色土、砂礫、グライ化した粘土を含む。

**壁の状態**　全体的に緩やかではあるが、中央ベルト付近でやや急になる。　**底面の状態**　ほぼ平坦

**出土遺物**　図示していないが、Ａ～Ｃ層から平安時代の土師器・須恵器の小破片が出土している。




第39図　SD004溝跡




第40図　SD005溝跡

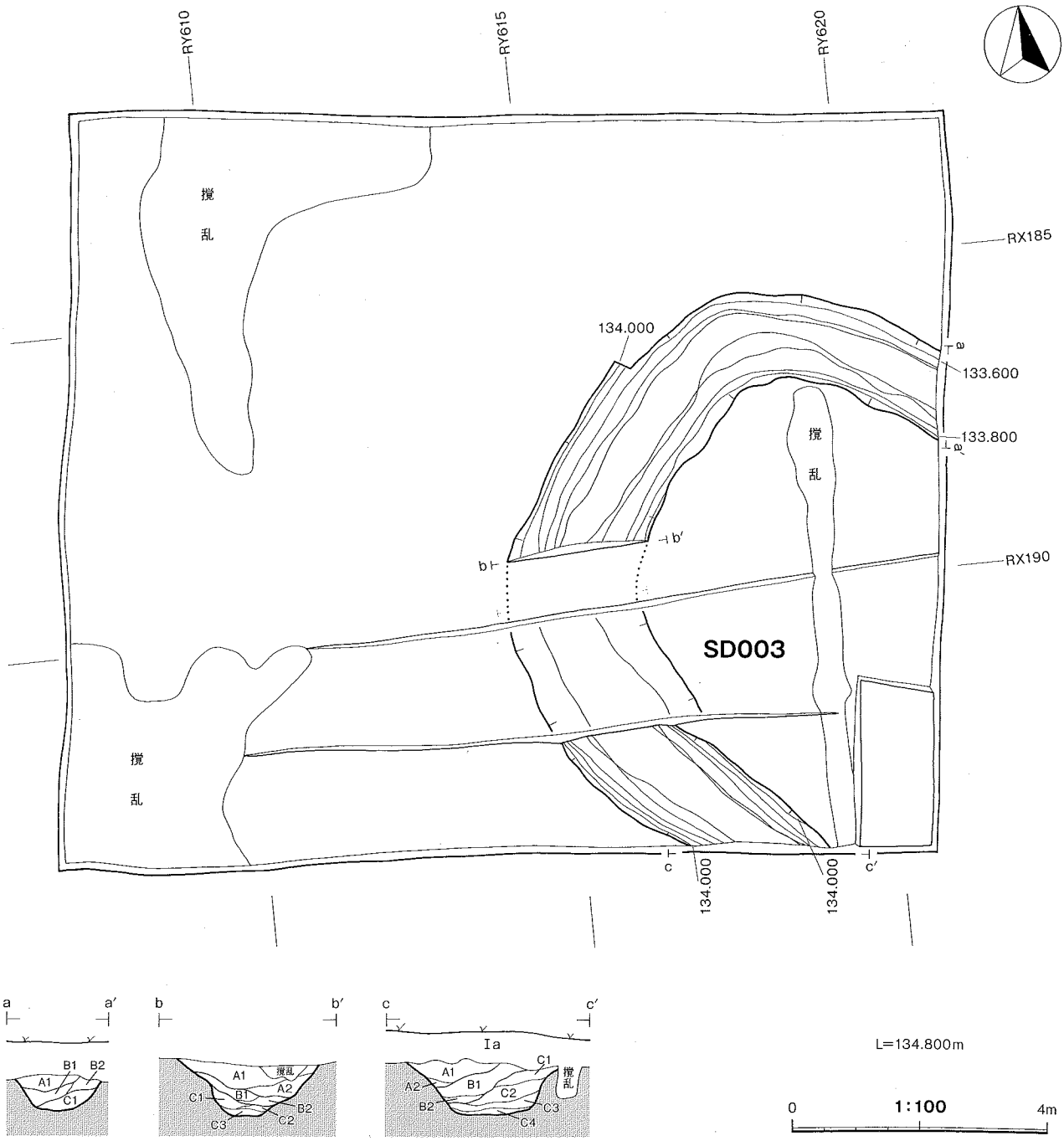
## （2） 近世以降の溝跡

### ＳＤ００３溝跡（第41図）

**位　　置**　調査区南東　**平 面 形**　コ字状に屈曲する。　**断 面 形**　逆台形

**規　　模**　検出された長さは13.41mをはかり、幅は上端1.28～2.38m、下端0.44～1.14mをはかる。

**重複関係**　ＳＤ004、ＳＤ005を切る　**掘 込 面**　削平　**検 出 面**　表土直下褐色シルト層上面




第41図　SD003溝跡

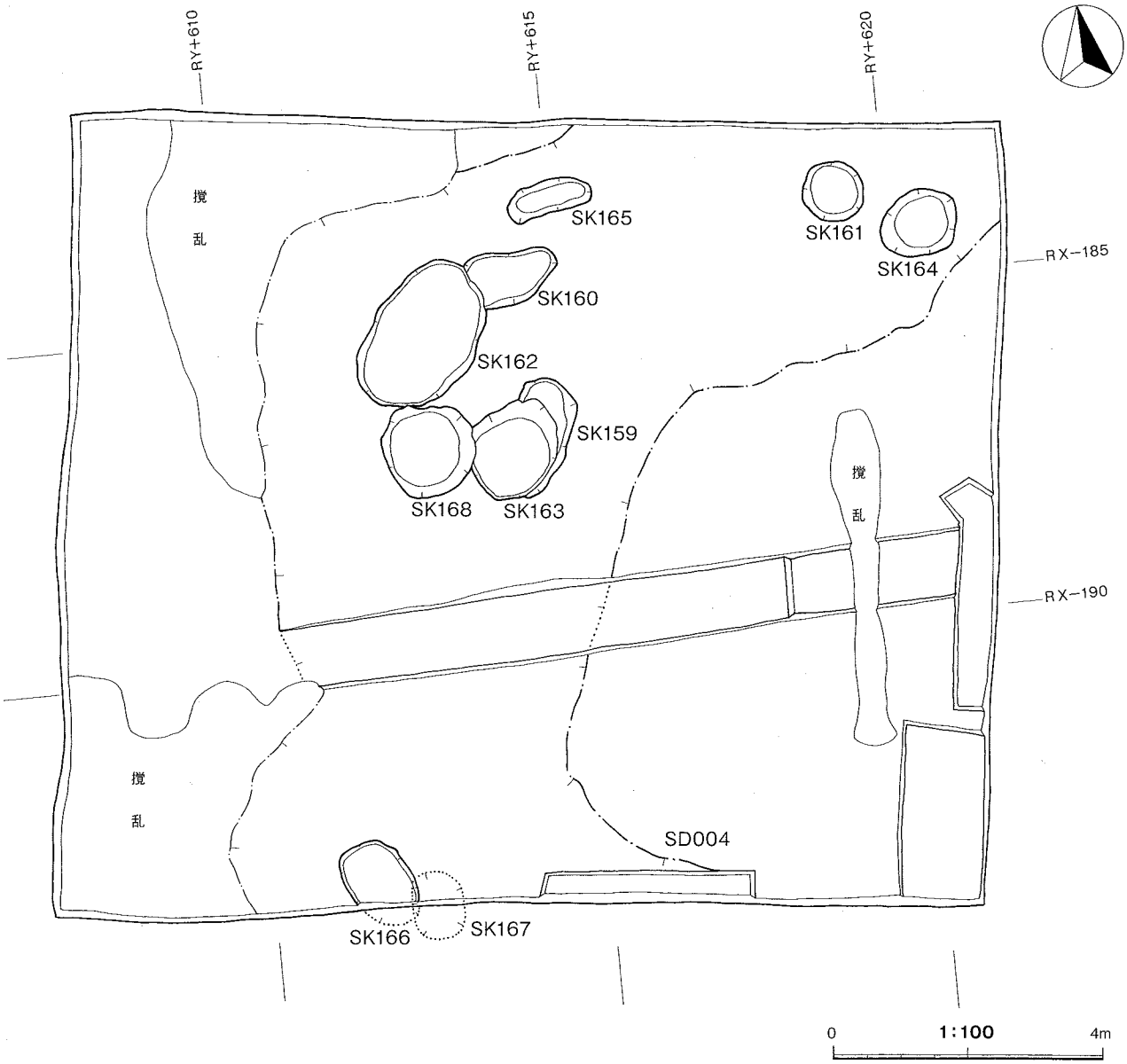
**埋　　土**　埋土は自然堆積で、大きくＡ～Ｃ層に大別され、各層はさらに細分される。Ａ層は褐色シルトを主体とし、粒状の黒褐色土、３～５cmの礫や砂を含む。Ｂ層はにぶい黄褐色～褐色土を主体とし、粒状に暗褐色～黒褐色土、砂礫を含む。Ｃ層は黒褐色土を主体とした層で、粒状の褐色土や３～10cmの礫を含む。

**壁の状態**　東側が西側に比べてやや急に外傾して立ち上がる。　**底面の状態**　ほぼ平坦

**出土遺物**　図示していないが、平安時代の土師器・須恵器片が出土している。

## （３）近世以降の土坑墓

ＳＤ004埋土Ａ２層上面から検出された。ＳＫ159・160・162・168は馬の骨、ＳＫ161・163・164・165・166・167からは人骨が出土している。また、ＳＫ161・163・164土坑墓からは寛永通寶、ＳＫ166土坑墓からは寛永通寶と手鏡が出土している。




第42図　土坑墓全体図

**ＳＫ１５９土坑（第43図）**

**位　　置**　調査区中央北寄　**平 面 形**　不整楕円形

**規　　模**　長軸上端1.79m、長軸下端1.69m、短軸上端0.9m、短軸下端0.74m

**掘 込 面**　削平　**検 出 面**　ＳＤ004埋土　**重複関係**　ＳＤ004を切る

**埋　　土**　埋土は人為堆積で、Ａ１層は褐色～にぶい黄褐色土を主体とし、黒褐色土を多量に含む。Ａ２層は黒～暗褐色土を主体とし、褐色～にぶい黄褐色土、砂を含む。

**壁の状態**　外傾して立ち上がる　**底の状態**　ほぼ平坦

**出土遺物**　馬の骨の上半部を検出した。

**ＳＫ１６０土坑（第43図）**

**位　　置**　調査区中央北寄　**平 面 形**　不整楕円形

**規　　模**　長軸上端1.45m、長軸下端1.28m、短軸上端0.89m、短軸下端0.6m

**掘 込 面**　削平　**検 出 面**　ＳＤ004埋土　**重複関係**　ＳＤ004を切る

**埋　　土**　埋土は人為堆積で、Ａ１層は黒褐色土を主体とし、粉状の暗褐色シルトを含む。Ａ２層は暗褐色を主体とし、粉状の黒褐色シルトを含む。

**壁の状態**　外傾して立ち上がる　**底の状態**　ほぼ平坦　**出土遺物**　馬の骨（部位不明）

**ＳＫ１６１土坑墓（第43図）**

**位　　置**　調査区北東隅　**平 面 形**　不整円形　**規　　模**　径0.9m

**掘 込 面**　削平　**検 出 面**　ＳＤ004埋土　**重複関係**　ＳＤ004を切る

**埋　　土**　埋土は人為堆積で暗褐色土を主体とし、黒褐色土シルト、及び褐色～黄褐色土を含む層からなり、２層に細分できる。A1層はA2層に比べて黒褐色土の含有量が少なく、水分を多く含んでいる。

**壁の状態**　外傾して立ち上がる　**底の状態**　ほぼ平坦

**出土遺物（第44図２～５）**寛永通寶が３枚出土している。また、人骨のほぼ全身が検出された。

**ＳＫ１６２土坑墓（第43図）**

**位　　置**　調査区中央やや北西寄り　**平 面 形**　不整楕円形

**規　　模**　長軸上端2.38m、長軸下端2.28m、短軸上端1.62m、短軸下端1.4m

**掘 込 面**　削平　**検 出 面**　ＳＤ004埋土　**重複関係**　ＳＤ004を切る

**埋　　土**　埋土は人為堆積で、2層に細分できる。A1層は黒褐色を主体とし、粒～小塊状の黒～黒褐色土、及び暗褐色～にぶい黄褐色土を含む層である。Ａ２層は黒～黒褐色土を主体とし、粒状の暗褐色土、粒～小塊状の黒色土を含む層である。

**壁の状態**　外傾して立ち上がる　**底の状態**　ほぼ平坦

**出土遺物**　馬の骨の上半部が検出された。

**ＳＫ１６３土坑墓（第43図）**

**位　　置**　調査区中央　**平 面 形**　不整円形　**規　　模**　径1.4～1.6m

**掘 込 面**　削平　**検 出 面**　ＳＤ004埋土　**重複関係**　ＳＤ004を切る

**埋　　土**　暗褐色～褐色土を主体とし、粒～小塊状の黒褐色土を含む。　**壁の状態**　外傾して立ち上がる
**底の状態**　ほぼ平坦
**出土遺物（第44図６～11）**　寛永通寶が５枚出土している。また、人骨のほぼ全身が検出された。

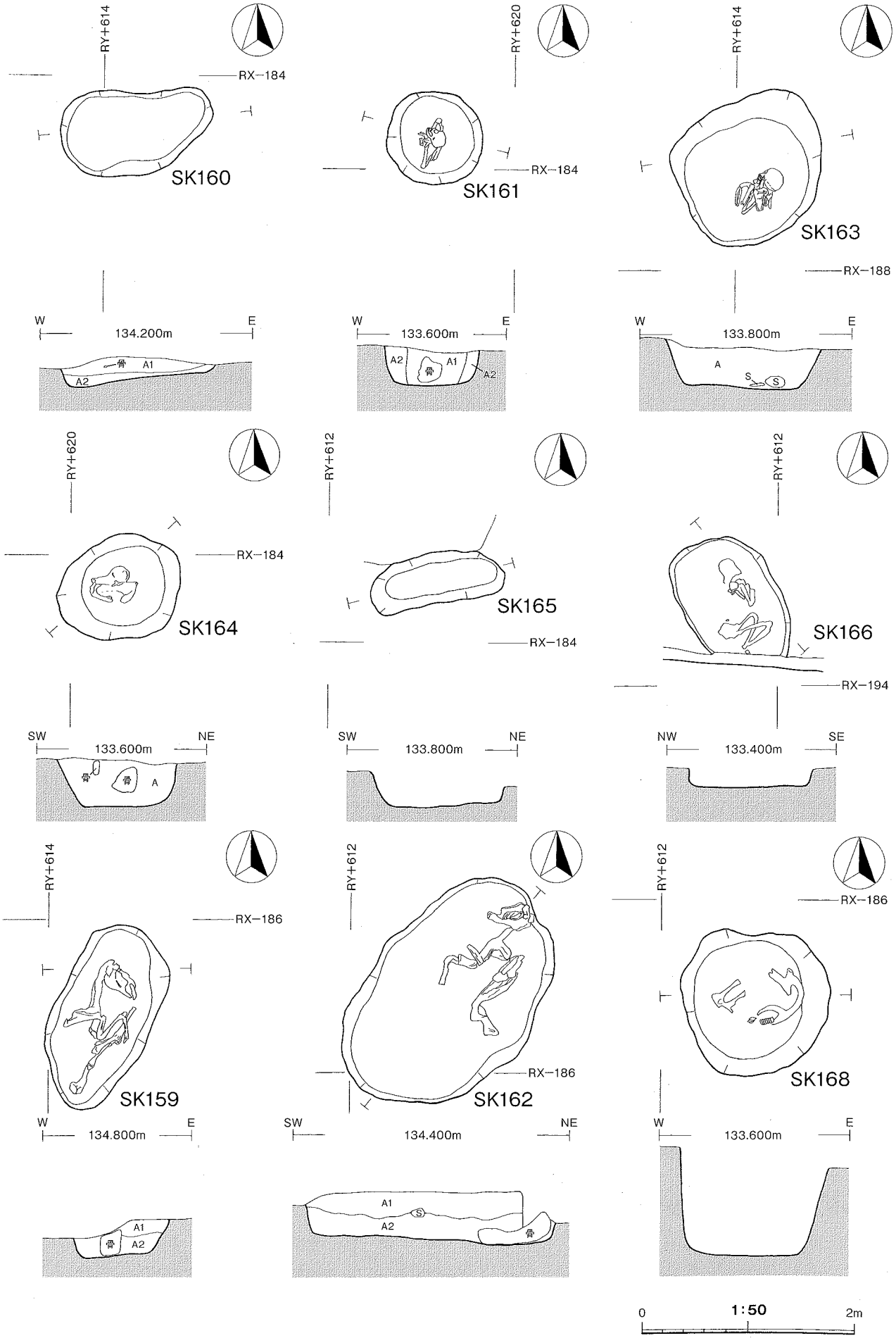
**ＳＫ１６４土坑墓（第43図）**
**位　　置**　調査区北東隅　**平 面 形**　不整円形　**規　　模**　径1.0～1.2m
**掘 込 面**　削平　**検 出 面**　ＳＤ004埋土　**重複関係**　ＳＤ004を切る
**埋　　土**　人為堆積で黒褐色土を主体とし、褐色～黄褐色土を粒状に含む。
**壁の状態**　外傾して立ち上がる　**底の状態**　ほぼ平坦
**出土遺物（第44図12～15）**　寛永通寶４枚出土している。また、人骨の頭部、大腿部が検出された。

**ＳＫ１６５土坑墓（第43図）**
**位　　置**　調査区北壁より　**平 面 形**　不整楕円形
**規　　模**　長軸上端1.28m、長軸下端1.08m、短軸上端0.48m、短軸下端0.28m
**掘 込 面**　削平　**検 出 面**　ＳＤ004埋土　**重複関係**　ＳＤ004を切る　**埋　　土**　不明
**壁の状態**　外傾して立ち上がる　**底の状態**　ほぼ平坦
**出土遺物**　人の頭骨のみ残存

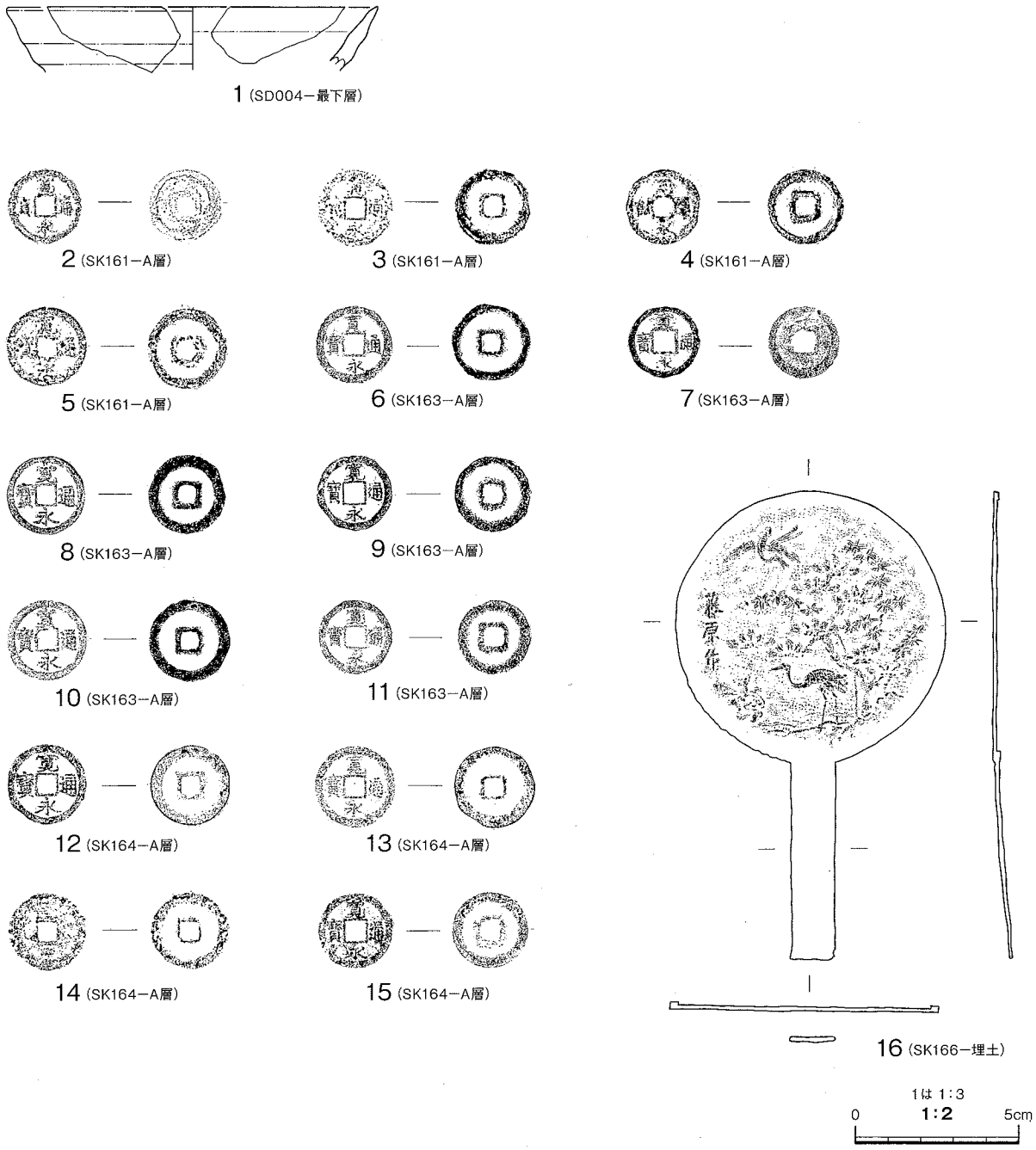
**ＳＫ１６６土坑墓（第43図）**
**位　　置**　調査区南壁中央　**平 面 形**　不整楕円形
**規　　模**　長軸上端1.2m以上、短軸上端0.92m、短軸下端0.82m
**掘 込 面**　削平　**検 出 面**　ＳＤ004埋土　**重複関係**　ＳＤ004を切る
**埋　　土**　地震で崩壊のため不明　**壁の状態**　やや外傾して立ち上がる　**底の状態**　ほぼ平坦
**出土遺物（第44図16）**　銅製の手鏡が出土した。大きさは縦14.4cmをはかる。鏡は径8.3cmで柄の幅は1.4cmをはかる。鏡の裏面には作者名「藤原作」と鶴の文様が描かれている。その他図示していないが、寛永通宝６枚が重なって出土した。また、人の頭・腕・下半身の骨が残存。

**ＳＫ１６７土坑墓**
**位　　置**　調査区南壁　**平 面 形・規　　模**　地震で崩壊したため、確認不可。
**掘 込 面**　ＳＤ004Ａ２層　**検 出 面**　調査区南壁　**重複関係**　ＳＤ004を切る
**埋　　土**　黒～黒褐色を主体とし、粒～砂粒状の褐色土、及び砂礫を含むＡ層からなる。
**壁の状態**　外傾して立ち上がる　**底の状態**　平坦
**出土遺物**　図示していないが、人骨の一部（部位不明）を検出している。

**ＳＫ１６８土坑（第43図）**
**位　　置**　調査区中央　**平 面 形**　不整円形　**規　　模**　上端1.46m、下端1.1m
**掘 込 面**　削平　**検 出 面**　ＳＤ004埋土　**重複関係**　ＳＤ004を切る　**埋　　土**　不明
**壁の状態**　外傾して立ち上がる　**底の状態**　平坦　**出土遺物**　馬の顎の骨を検出した。




第43図　SK159・160・161・162・163・164・165・166・168土坑墓




第44図　SD004溝跡、SK161・163・164・166土坑墓出土遺物

## 4 調査のまとめ

これまでの20次におよぶ調査と、それにともなう補足調査によって、遺跡の範囲が明らかになりつつある。本遺跡は水路を境として約0.7mの段差をもち微高地となる南側の館遺跡と北側の松ノ木遺跡にわかれ、両遺跡には古代の集落がまたがって営まれる。

**太田館**　館遺跡は戦国時代後期に、この地に居を構えた太田氏の城館「太田館」があったところと伝えられ、大松院を中心とする小字名「舘」の一帯が考えられている。これまでの調査によって堀・溝跡などの曲輪を区画する遺構が確認され、館跡がおよそ東西200～220m、南北110～150mの範囲であった事が徐々に判明しつつある。しかしながら館跡にともなう建物跡は未検出で、今次調査まで出土遺物も中世まで遡るものは確認されていなかった。

今回の調査では、中世以降の堀跡２条、近世以降の溝跡１条、近世の土坑墓10基を検出した。平安時代の土師器や須恵器の小破片が出土しているが、周辺の竪穴住居跡の遺構から流入したものと考えられる。

**３次調査**　昭和57年度に実施された第３次調査では、ＳＤ003～006の４条の堀跡を検出している。今年度検出した中世以降の堀跡は、形状等から第３次調査で検出された堀跡（ＳＤ004・005堀跡）と連続するものであることを確認した。ＳＤ003堀跡は最も新しい北西～南東へのびる小規模な堀跡であり、ＳＤ004堀跡はＳＤ003堀跡の西側の北東～南西方向でＳＤ003堀跡に切られ、ＳＤ005堀跡を切る堀跡と報告されている。また、ＳＤ005堀跡は西～南西へのび、ＳＤ003堀跡・ＳＤ004堀跡に切られる。ＳＤ006堀跡は大半を撹乱されるが、北東～南西へのびる堀跡で、埋土はＳＤ004堀跡に似ることから、ＳＤ004堀跡と同一の可能性が高かった。今次調査によって、ＳＤ006はＳＤ004と同一であることが明らかになった。

**中　世**　ＳＤ004堀跡は長さ15.75m、上端7.7m、下端2.5mをはかり、今回検出された溝・堀跡の中で長さ幅共に最大の遺構である。ＳＤ004堀跡はＳＤ005堀跡と重複しており、ＳＤ005堀跡を造り替えたものと考えられる。平面形は、ＳＤ005堀跡がコ字状に曲線を描くのに対し、ＳＤ004堀跡は調査区南壁ほぼ中央から北へ伸び、北壁手前で調査区北東隅へ屈曲する「横矢掛け」の形を呈していることから、16世紀後半の構築と推定される。また、ＳＤ004堀跡埋土Ｅ層から出土した瀬戸灰釉平碗片は15～16世紀代のものと考えられる。口縁部のみであったが、全体的に薄く灰釉が施されていた。表面には二次焼成を確認した。

『岩手県史』３は「奥南盛風記」を引いて、天正元年（1573）に、九戸政実と結んだ滴石斯波氏が、太田、大釜の両館を焼き払い、不来方城まで押し寄せたことを伝えている。ＳＤ004堀跡を16世紀後半の構築と推定すると、文献に記された年代との矛盾はなく、その関連性が考えられる。また、灰釉平碗片の出土したＳＤ004堀跡埋土Ｅ層は焼土や炭化物が混入しており、やはり焼き払い等との関連性が考えられる。

**近　世**　近世以降のＳＤ003溝跡は形状等から、第３次調査で検出されたＳＤ003溝跡に連続する遺構であることを確認した。ＳＤ003溝跡はＳＤ005堀跡と同様、コ字状に曲線を描く。

また、土坑墓10基のうち４基は馬の墓であった。土坑墓のなかには、調査期間中の地震・長雨の影響で平面的に調査不能となった遺構もあった。土坑墓からは、寛永通寶、銅製の手鏡が出土した。

（浅沼のぞみ）

【引用・参考文献】

岩手県　1961　『岩手県史　第３巻　中世編下』

盛岡市教育委員会　1980　『館遺跡　ダイジェスト版』

盛岡市教育委員会　1992　『館・松ノ木遺跡－古代の遺構編』

盛岡市教育委員会　1999　『館・松ノ木遺跡－古代の遺物編－』

千田嘉博・小島道裕・前川要　1993　『城館調査ハンドブック』　新人物往来社

室野秀文　2004　「盛岡藩成立期の城郭」『第 21 回全国城郭研究セミナー資料』　中世城郭研究会

# Ⅶ. 西鹿渡遺跡（第20・21次調査）

## 1　遺跡の環境

**位　　置**　西鹿渡遺跡は、盛岡市街地から南東約3.5kmの三本柳２地割内に位置する。遺跡の東側には北上川が流れ、四方は旧河道によって画されている。遺跡範囲は約300m四方と推定される。以前は畑や果樹園などが多く見られたが、現在は宅地化が著しい地域である。

**地形・地質**　本遺跡の東を南流する北上川と本遺跡の北約3.6kmを西流し北上川と合流する雫石川は流路の転換が著しく、北上川西岸と雫石川南岸には細かい旧河道が網状に確認されている。本遺跡はその旧河道によって画された低位沖積段丘上に立地する。

**周辺の遺跡**　本遺跡をはじめとして、市内太田から盛南地区（市内本宮・飯岡周辺）、さらに南に隣接する矢巾町域まで広がる低位沖積段丘上には、古代から中世にかけての遺跡が多く分布している。本遺跡の北には碇堰遺跡、南には百目木遺跡・下永林遺跡・三本柳幅遺跡・高櫓Ａ遺跡などが立地する。各遺跡では、８世紀後半から９世紀後半を中心とした集落が確認されている。百目木遺跡では、８世紀後半および９世紀後半を中心とした竪穴住居跡が80棟あまり検出され、墨書土器や鉄製農耕具、籾痕のついた土器などが出土している。下永林遺跡からは蕨手刀（市指定文化財）が耕作中に出土しており、古墳群の存在がうかがわれるが、詳細は不明である。また、高櫓Ａ遺跡では８世紀後半から末頃を主体とした竪穴住居跡が調査され、土製紡錘車が多数出土している。上記のような古代集落のほか古代城柵志波城跡（市内下太田）や徳丹城跡（矢巾町西徳田）も分布し、河川に隣接する平野部に農耕を基盤とした集落が営まれた地域であったことが分かっている。

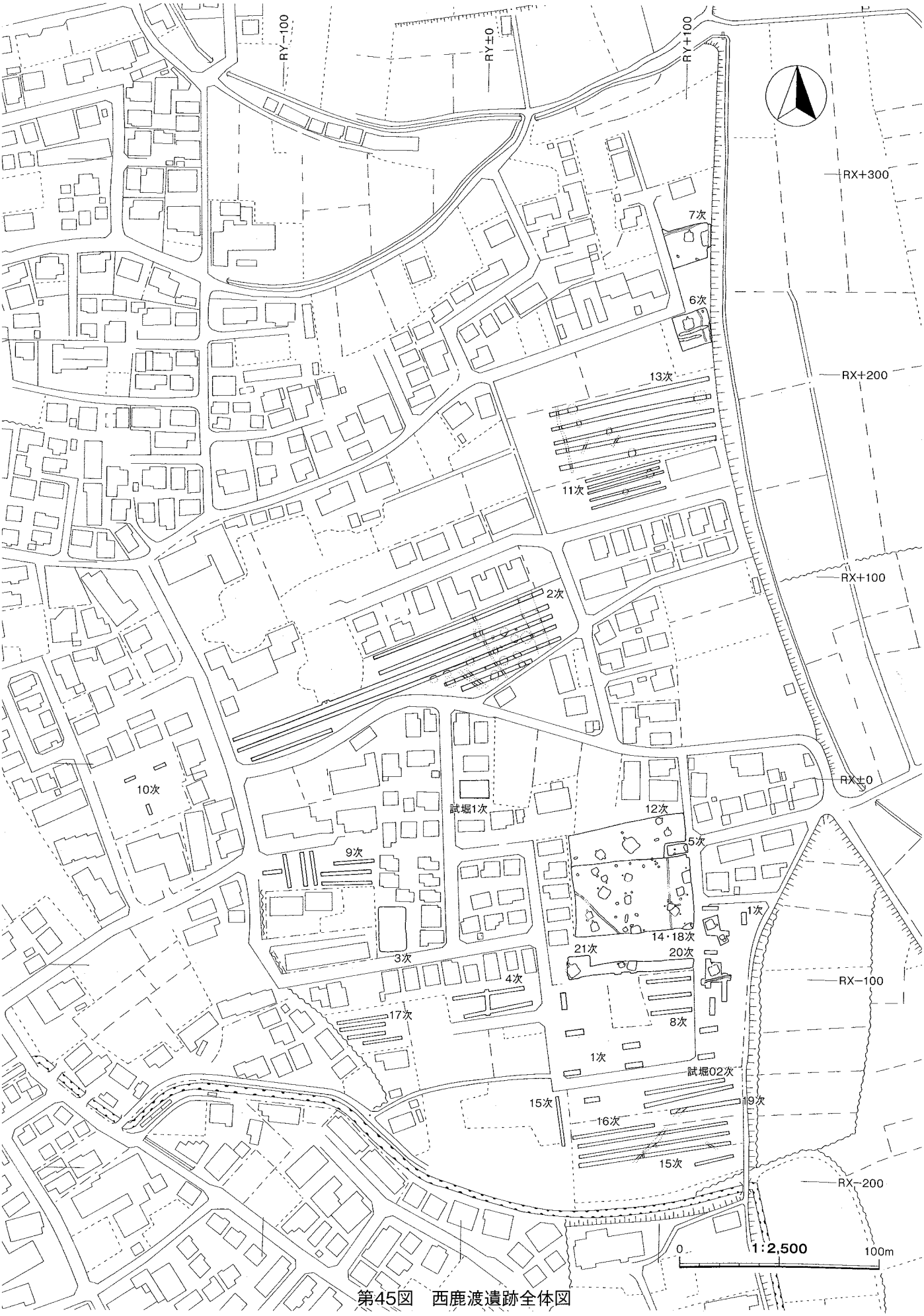
## 2　調査の概要

### （１）これまでの調査

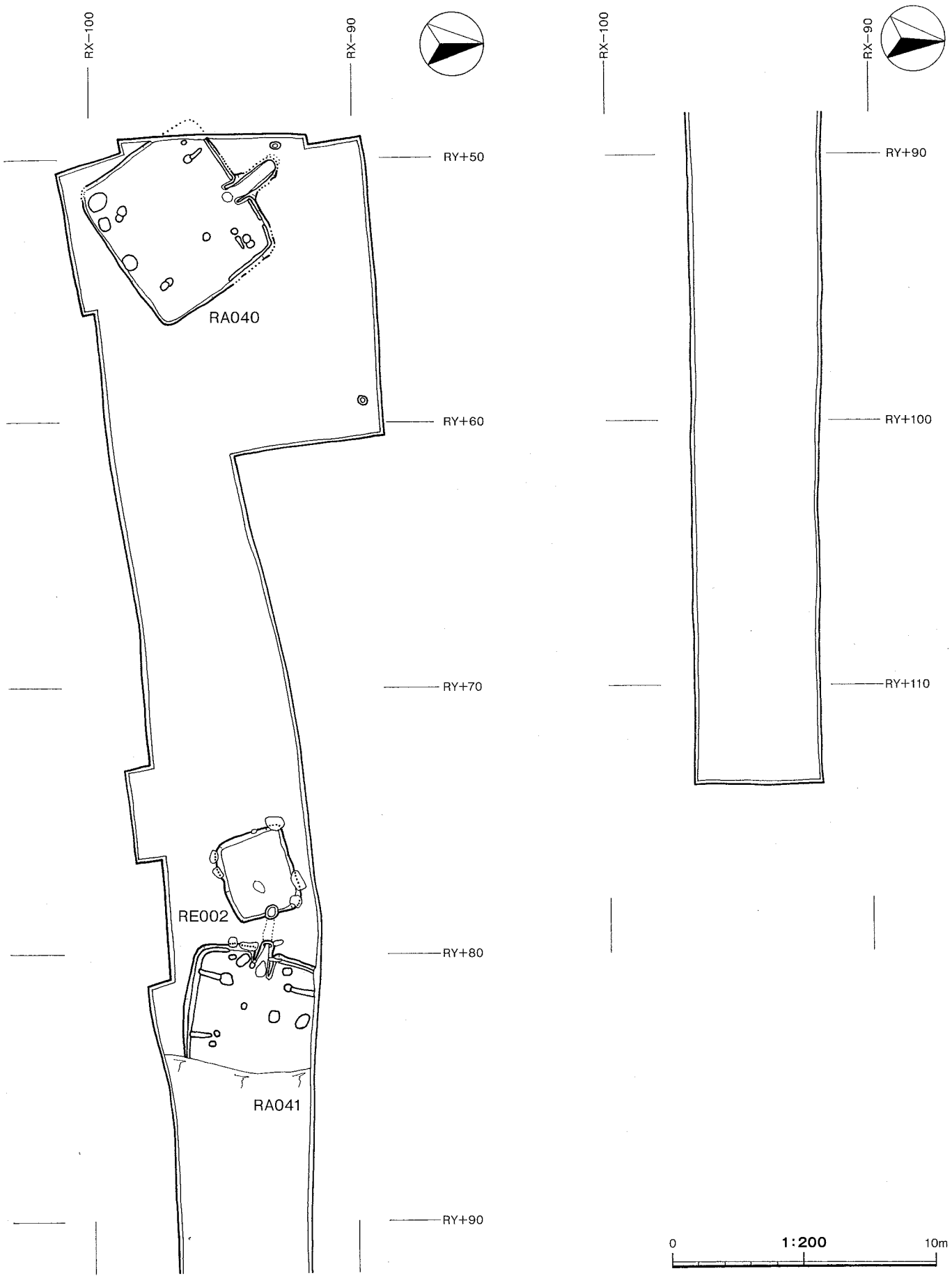
本遺跡は、昭和55年の旧都南村教育委員会が実施した宅地造成にともなう調査（第１次調査）以降、宅地造成、個人住宅の新築、建替え、アパート建設などにともない、今年度まで21次にわたる調査が実施されている。畑の天地返しによって大きく撹乱され遺構や遺物が残存しない地点もあるが、奈良・平安時代の竪穴住居跡、溝跡、土坑、およびそれ以降の溝跡や土坑が確認されている。遺物は８世紀半ばから９世紀後半と考えられる奈良・平安時代の土師器・あかやき土器・須恵器、鉄製品、近世以降の陶磁器片などが出土している。

| 次数 | 所在地 | 調査原因 | 面積 | 期間 | 検出遺構・遺物 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 盛岡市三本柳2割地 | 宅地造成 | 1,000㎡ | 80.07.20<br>80.08.14 | 奈良・平安時代竪穴住居跡各1棟、時期不明の溝跡1条。 |
| 試掘2 | 盛岡市三本柳2割地28－1.2 | 宅地造成 | 652㎡ | 93.08.18<br>93.08.19 | 平安時代の竪穴住居跡12棟、土坑4基、古代以降の溝跡4条。 |
| 試掘3 | 盛岡市三本柳2割地 | 宅地造成 | 100㎡ | 93.06.16 | なし(地山)。 |
| 試掘4 | 盛岡市三本柳2割地内 | 宅地造成 | 172㎡ | 93.12.20 | なし。 |
| 5 | 盛岡市三本柳2割地36－2 | 防火水槽建設 | 62㎡ | 94.09.01<br>94.09.03 | 奈良時代の竪穴住跡1棟・土坑2基。 |
| 6 | 盛岡市三本柳2割地22－7 | 個人住宅新築 | 291㎡ | 95.07.04<br>95.07.11 | 奈良時代の竪穴住居跡1棟・土坑1基、時期不明の溝跡1条。 |
| 7 | 盛岡市三本柳2割地16－6 | 個人住宅新築 | 393㎡ | 95.08.18<br>95.09.05 | 縄文時代の土坑1基、奈良時代の竪穴住居跡2棟・土坑。 |
| 試掘8 | 盛岡市三本柳2割地39－1 | 共同住宅新築 | 54㎡ | 97.11.11 | なし。 |
| 試掘9 | 盛岡市三本柳2割地47－5 | 共同住宅新築 | 268㎡ | 97.11.28 | なし。 |
| 試掘10 | 盛岡市三本柳2割地47－6 | 共同住宅新築 | 269㎡ | 98.02.12 | なし。 |
| 試掘11 | 盛岡市三本柳2割地内 | 共同住宅新築 | 196㎡ | 98.08.17 | 平安時代の竪穴住居跡2棟。 |
| 12 | 盛岡市三本柳2割地 | 宅地造成 | 970㎡ | 02.10.01<br>02.12.02 | 奈良時代の竪穴住居跡5棟・土坑3基、近代の溝跡・土坑。 |
| 試掘13 | 盛岡市三本柳2割地25－1 | 共同住宅新築 | 820㎡ | 02.07.23<br>02.07.25 | 奈良時代の竪穴住居跡5棟、時期不明の溝跡3条。 |
| 試掘14 | 盛岡市三本柳2割地内 | 宅地造成 | 555㎡ | 02.07.29<br>03.07.31 | 奈良時代の竪穴住居跡13棟、時期不明の溝跡1条。 |
| 試掘15 | 盛岡市三本柳2割地内 | 宅地造成・共同住宅新築 | 501㎡ | 02.11.25<br>02.11.28 | 平安時代の土坑2基・溝跡4条。 |
| 試掘16 | 盛岡市三本柳2割地39－43 | 共同住宅に伴う擁壁設置 | 68㎡ | 03.04.16 | なし。 |
| 試掘17 | 盛岡市三本柳2割地42－1 | 共同住宅新築 | 146㎡ | 03.04.16 | なし。 |
| 18 | 盛岡市三本柳2割地36－1～4 | 宅地造成 | 2,226㎡ | 03.06.02<br>03.08.02 | 奈良時代の竪穴住居跡13棟、平安時代の住居跡4棟、奈良・平安時代の土坑17基、古代以降の溝跡5条。時期不明の溝跡3条 |
| 19 | 盛岡市三本柳2割地内 | 擁壁設置 | 102㎡ | 06.04.13<br>06.04.15 | 時期不明の溝跡2条。 |
| 20 | 盛岡市三本柳2割地49－50～66 | 下水道・進入路 | 320㎡ | 06.07.31<br>06.08.11 | 奈良時代の竪穴住居跡2棟・竪穴状跡1棟。 |
| 21 | 盛岡市三本柳2割地49－50～66 | 個人住宅改築 | 62㎡ | 07.04.16<br>07.04.27 | 奈良時代の竪穴住居跡1棟。 |

第7表　西鹿渡遺跡調査成果




第45図　西鹿渡遺跡全体図




第46図　西鹿渡遺跡第20・21次調査区全体図

## （2）平成１８・１９年度の調査

**位　　置**　平成18・19年度の調査は、第18次調査区の南約10mに位置する地点を、第20・21次調査として実施した。第20次調査は個人住宅新築にともなう下水道管敷設・進入路建設、第21次調査は個人住宅新築にともなう調査として20次調査区の北西隣接地を調査した。遺構の検出は、表土下約0.5mの褐色シルト層で実施した。20次調査区の東半は、耕作による撹乱により遺構は検出できなかった。調査区内の標高値は、114.800m前後である。

**検出遺構**　第20次調査の検出遺構は、竪穴住居跡２棟（ＲＡ０４０・０４１）・竪穴跡１棟（ＲＥ００２）である。第21次調査では、20次調査で未検出だった竪穴住居跡北半分（ＲＡ０４０）を検出した。

**出土遺物**　出土遺物は奈良時代（８世紀後半）の土師器坏・高坏・甕・長頸瓶、手づくねのミニチュア土器、土製紡錘車などである。

### ＲＡ０４０竪穴住居跡（第47・48図）

**位　　置**　調査区西端側　**平 面 形**　方形　**主軸方向**　N44°W　**重複関係**　なし

**規　　模**　6.23m×5.68m　**掘 込 面**　削平　**検 出 面**　黄褐色シルト層上面

**埋　　土**　自然堆積で層相の違いにより、A層～C層に大別される。

A層―３層に細分される。黒褐色土～黒色土を主体とし、粉状の白色火山灰と粒状の褐色土を含む。

B層―３層に細分される。暗褐色土を主体とし、褐色土を粒状に多く含む。

C層―２層に細分される。黒褐色土を主体とし、粒状の褐色土と炭化物を含む。

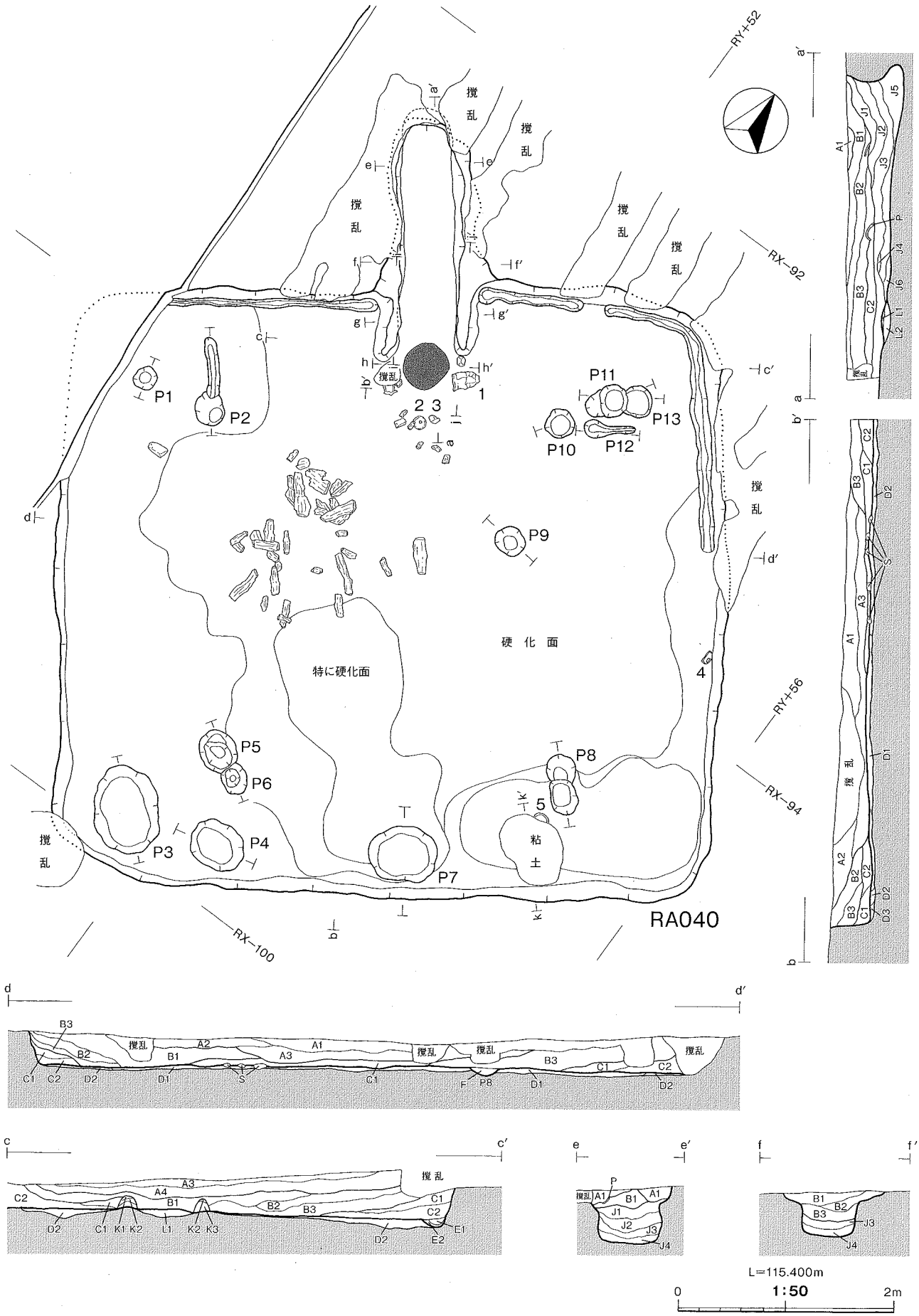
**壁の状態**　検出面から床面までの深さは0.33～0.40mで、外傾して立ち上がる。

**床の状態**　床面はほぼ平坦である。壁際には幅0.05～0.18m、深さ0.07～0.13mの周溝が壁北辺側と壁東側一部にめぐる。構築土（D層）は褐色土を主体に、粉～粒状の暗褐色土を含み、厚さは0.02～0.08mをはかる。床面中央付近に硬化面が見られる。床面の中央付近には炭化材を検出した。

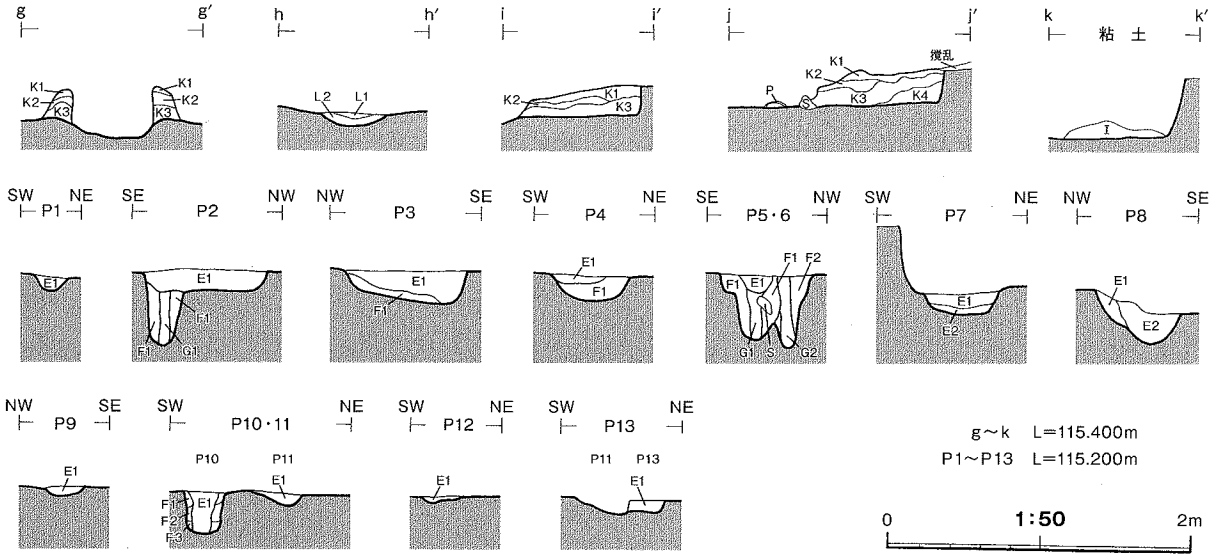
**カ マ ド**　カマドは北西辺中央付近に構築されている。煙道の平面形は溝状で、底面は燃焼面から煙出しに向かって緩やかに深くなり、煙出し底面が最も深くなる。規模は、煙出し先端までの長さ2.16m、幅0.49～0.63m、検出面からの底面までの深さは0.32～0.42mである。

**燃 焼 部**　カマドの基底部は褐色土を主体として構築されており、残存状況は比較的良好である。火床面は基底部に囲まれた内側に0.48m×0.41mの範囲で検出され、0.09mの熱浸透層を確認した。カマド崩壊土（J層）は黒褐色土を主体とし、粒状～塊状の褐色土と焼土を多く含む。

**柱　　穴**　床面から12口（P1～12）のピットを検出した。柱穴と考えられるピットはＰ２・５・６・10で、柱間は１間×１間である。各ピットの床面からの深さは、Ｐ１-0.11m・Ｐ２-0.50m・Ｐ３-0.23m・Ｐ４-0.17m・Ｐ５-0.44m・Ｐ６-0.49m・Ｐ７-0.15m・Ｐ８-0.21m・Ｐ９-0.08m・P10-0.28m・P11-0.09m・Pn 12-0.05m・P13-0.09mをはかる。

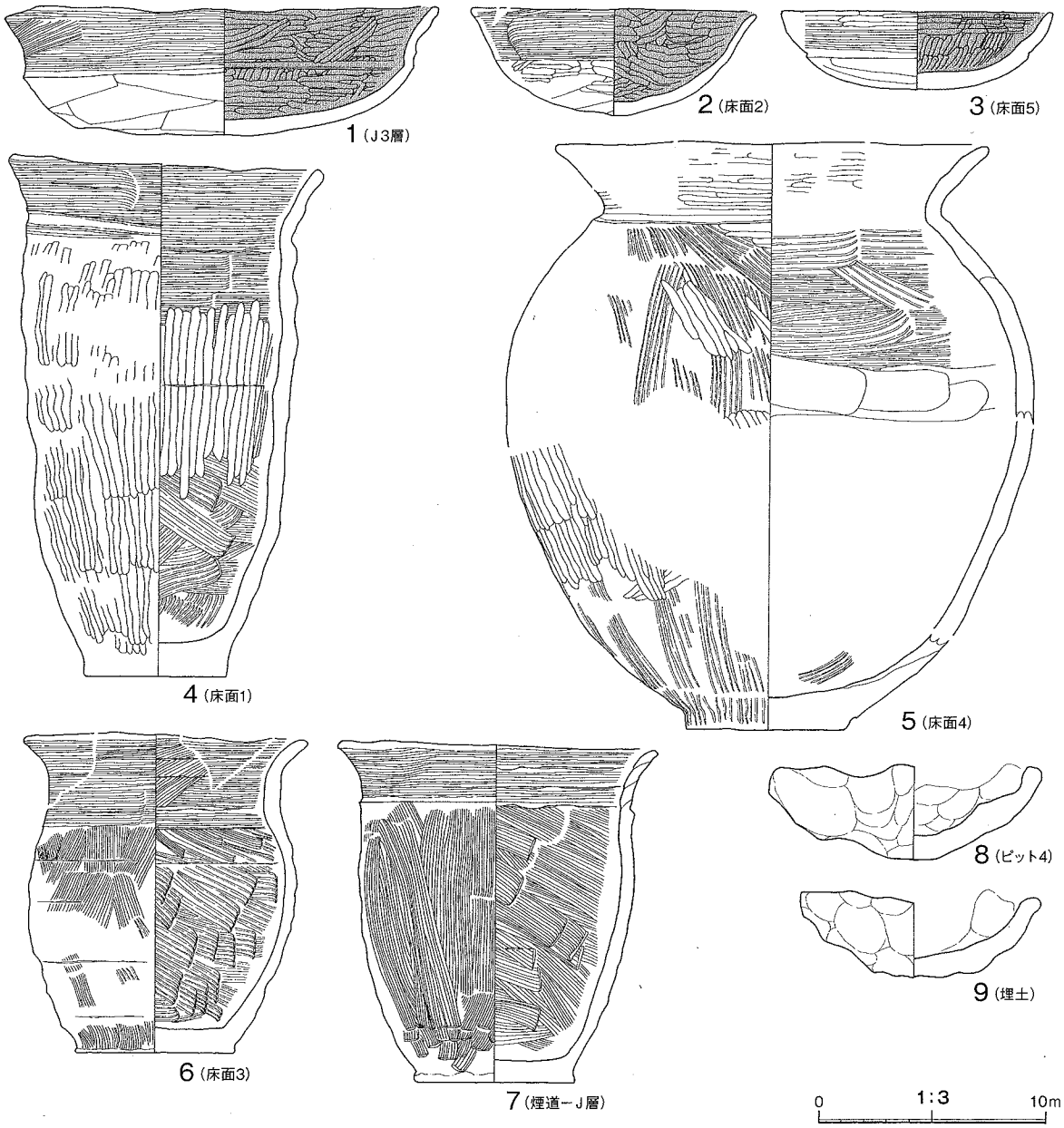



第47図　RA040竪穴住居跡（1）




第48図　RA040竪穴住居跡（2）

**出土遺物（第49図）**　1は口縁部～低部が1/2程残存し、丸底を呈し、体部内外面に段が確認される。2は口縁部～低部が2/3程残存し、丸底を呈する。内外面へラミガキ調整がされ底部付近にヘラケズリを施す。3はほぼ完形残存し、丸底で段を持つ。内外面ともにヘラミガキ調整され、内面には黒色処理が施される。4～6は土師器の甕である。4はほぼ完形で、口縁部は内外面ともにヨコナデ、外面はヘラミガキが施される。5は口縁部の内外面にヨコナデ調整、外面は底部付近にハケメ調整の後に体部にヘラナデ調整が施される。6は、口縁部の内外面にヨコナデ、体部は内外面にヘラナデが施される。7は球胴甕である。口縁部～底部にかけて1/4程が残存する。口縁部の内外面にヨコナデ、外面はハケメ調整の後にヘラミガキ、内面はハケメ調整の後にヘラケズリ調整が施される。また、底面に木葉痕が認められる。8・9は、手づくね整形のミニチュア土器である。内外面に指頭圧痕が認められる。




第49図　RA040竪穴住居跡出土遺物

## ＲＡ０４１竪穴住居跡（第50・51図）

**位　置**　調査区中央　**平面形**　方形　**主軸方向**　N10°W　**重複関係**　ＲＥ０２竪穴跡を切る

**規　模**　4.95m以上×南東4.48m以上　**掘込面**　削平　**検出面**　黄褐色シルト層上面

**埋　土**　自然堆積で層相の違いにより、Ａ層～Ｃ層に大別される。

Ａ層―３層に細分される。黒褐色土～黒色土を主体とし、褐色土を粒状に含む。

Ｂ層―３層に細分される。暗褐色土を主体とし、黒色土、褐色土を粒状に含む。

Ｃ層―７層に細分される。黒褐色土を主体とし、粒状の黒色土・褐色土と炭化物を含む。

**壁の状態**　検出面から床面までの深さは0.28～0.41mで、外傾して立ち上がる。

**床の状態**　床面はほぼ平坦である。壁際に幅0.09m～0.25m、深さ0.06～0.11mの周溝がめぐる。

**カマド**　カマドは西辺のほぼ中央に構築されている。煙道は掘り貫きで、煙出し部分はＲＥ０２竪穴跡を切る。規模は、煙出し先端までの長さ2.19m、幅0.26～0.39m、検出面からの底面までの深さは0.19～0.32m、検出面から煙出し底面までの深さは0.79mをはかる。

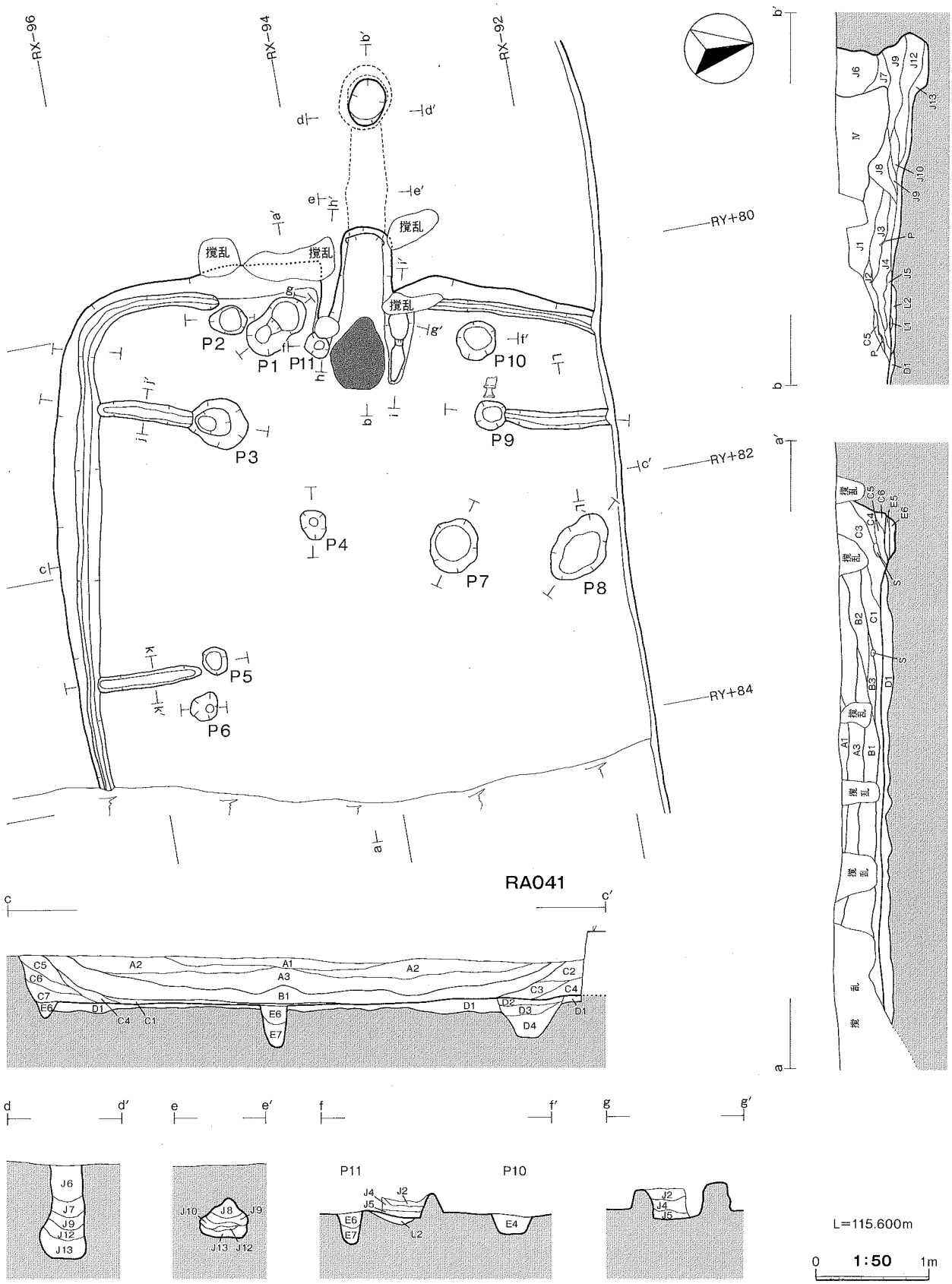
**燃焼部**　カマド基底部の構築土（Ｋ層）は褐色土を主体とし粒状の暗褐色土を含む。火床面は基底部に囲まれた内側に長軸0.62m・短軸0.45mの不整円形に検出し、浸透層の厚さは0.07mである。カマド崩壊土（Ｊ層）は黒褐色土を主体とし、粒状～塊状の褐色土～黄褐色土と焼土を含む。

**柱　穴**　床面より11口（Ｐ１～11）検出されて、柱穴と考えられるピットはＰ３・Ｐ４・Ｐ５・Ｐ６・Ｐ９で、柱間は１間×１間である。また、貯蔵穴と考えられるピットはＰ７・Ｐ８・Ｐ10で不整円形ある。各ピットの深さは、Ｐ１-0.13m・Ｐ２-0.14m・Ｐ３-0.31m・Ｐ４-0.35m・Ｐ５-0.16m・Ｐ６-0.35m・Ｐ７-0.26m・Ｐ８-0.23m・Ｐ９-0.55m・Ｐ10-0.18m・Ｐ11-0.29mをはかる。

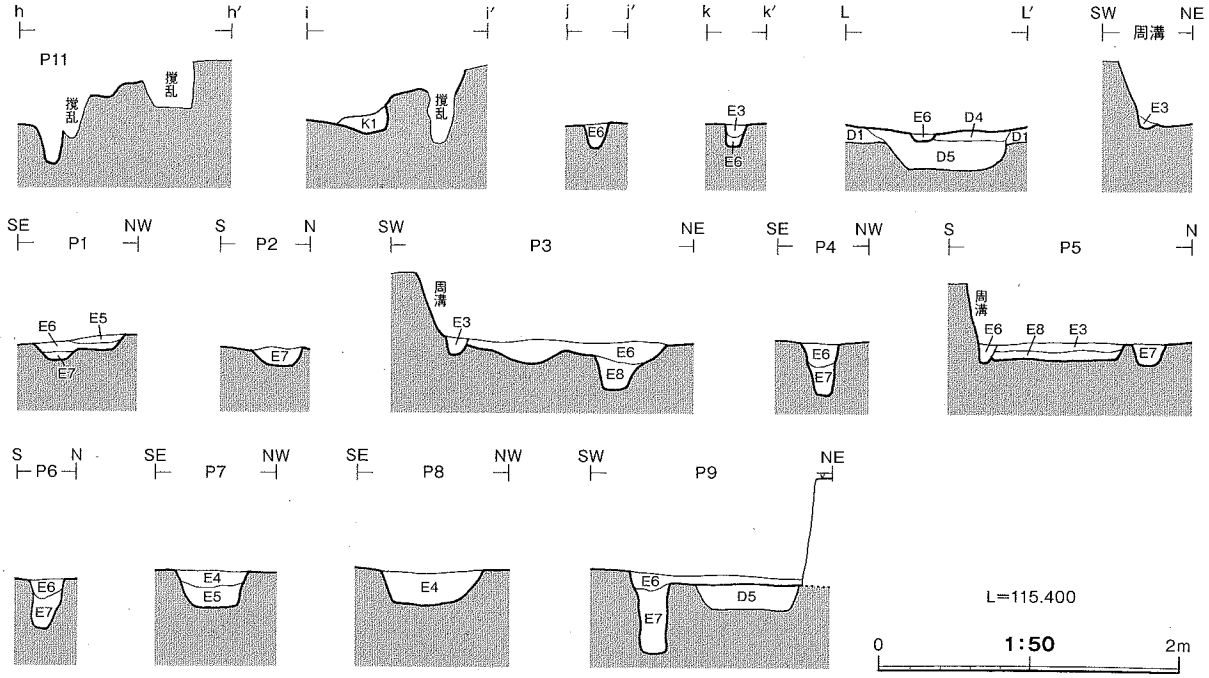
**出土遺物（第52・53図）**　１～４はロクロ非使用の土師器の坏である。１は口縁部～底部の1/4程度が残存し、

**坏**　平丸底で体部に段を持つ。口縁部の外面はヨコナデ調整の後にヘラミガキ、底部にはヘラミガキが施される。内面はヘラミガキおよび黒色処理が施される。２は口縁部～底部の1/3程が残存し平丸底で体部に段を持つ。外面には、口縁部～体部にヨコナデの後にヘラミガキ、底部にはヘラケズリ調整が施される。内面には、ヘラミガキおよび黒色処理が施されている。３は、口縁部～底部の1/5程が残存し、平丸底で段を持つ。外面は口縁部から体部にヨコナデ後にヘラミガキ、底部にヘラケズリが施される。内面は、ヘラミガキおよび黒色処理が施される。４は口縁部～底部の1/5程が残存し、外面はヨコナデ後に口縁部にヘラミガキ、底部にヘラケズリが施される。内面はヘラミガキ、黒色処理が施される。５は土師器の埦である。口縁部～底部の1/5程が残存する。口縁部の外面に３本の沈線を有する。内外面にヘラミガキ調整が施される。６は高台付坏の脚部で1/6程残存する。外面にハケメ調整が施されている。７はロクロ成形の坏で、内面にヘラミガキ調整および黒色処理が施されている。８～13は、土師器の甕である。８は、体部下半～底部を欠損している。口縁部の内外面ともにヨコナデ、体部は内外面ともにハケメ調整が施される。９はほぼ完形残存。内外面ともに口縁部にヨコナデ、外面はハケメ後に一部にユビナデ、内面にはハケメの調整が施される。10は口縁部～底部の1/2程が欠損している。口縁部は内外面ともにヨコナデ、体部は内外面ともにハケメ調整が施される。11は体部下半～底部を欠損している。口縁部は内外面ともにヨコナデ、体部は内外面ともにハケメ調整が施される。12は体部半～底部を欠損している。口縁部は内外面ともにヨコナデ、体部外面にはハケメ調整の後にヘラミガキ調整、体部内面にはハケメ調整が施される。13は、口縁部～底部の1/3ほどが欠損している。口縁部は内外面ともにヨコナデ、外面は体部にハケメ調整、内面はハケメ調整の

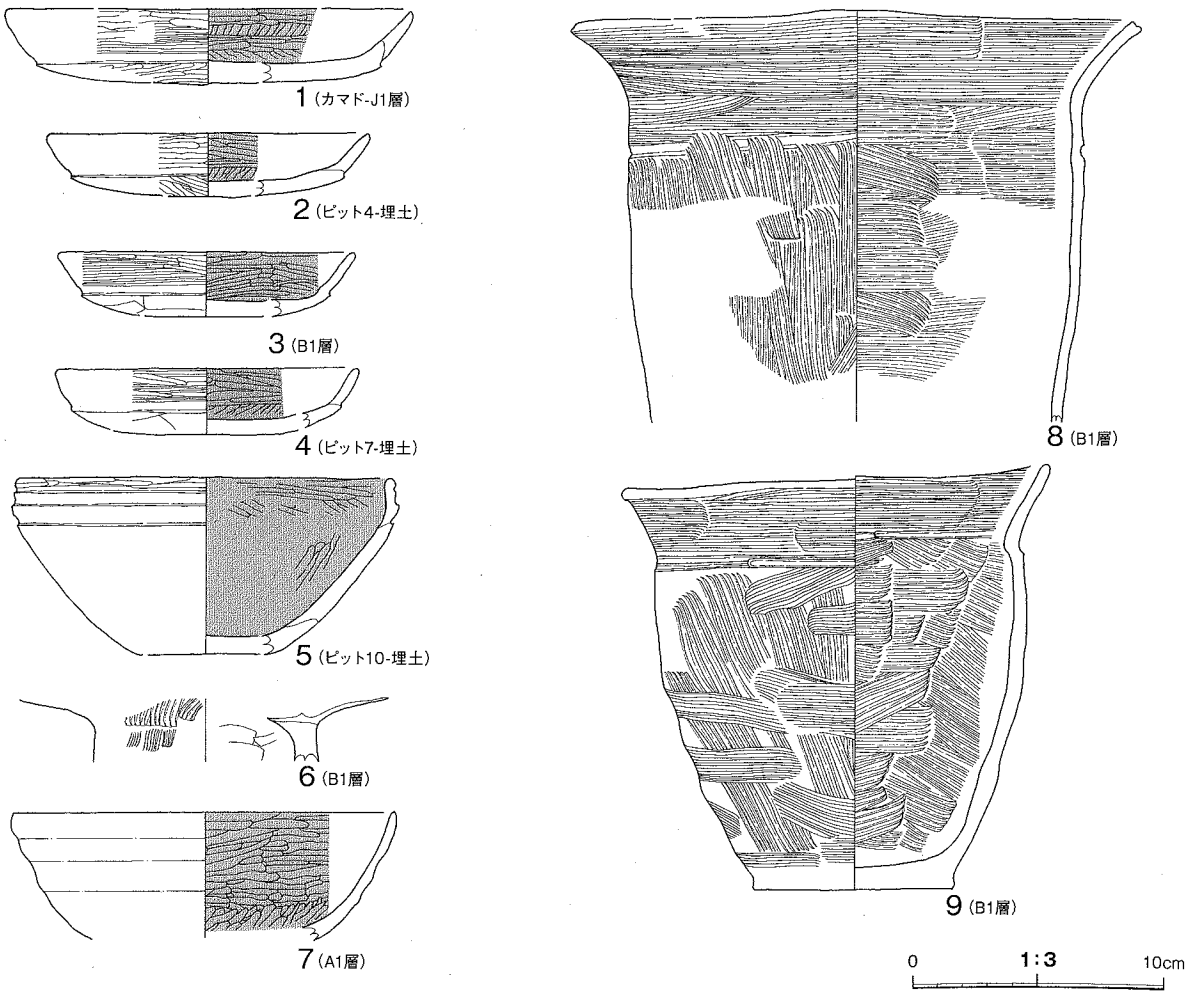
**甕**



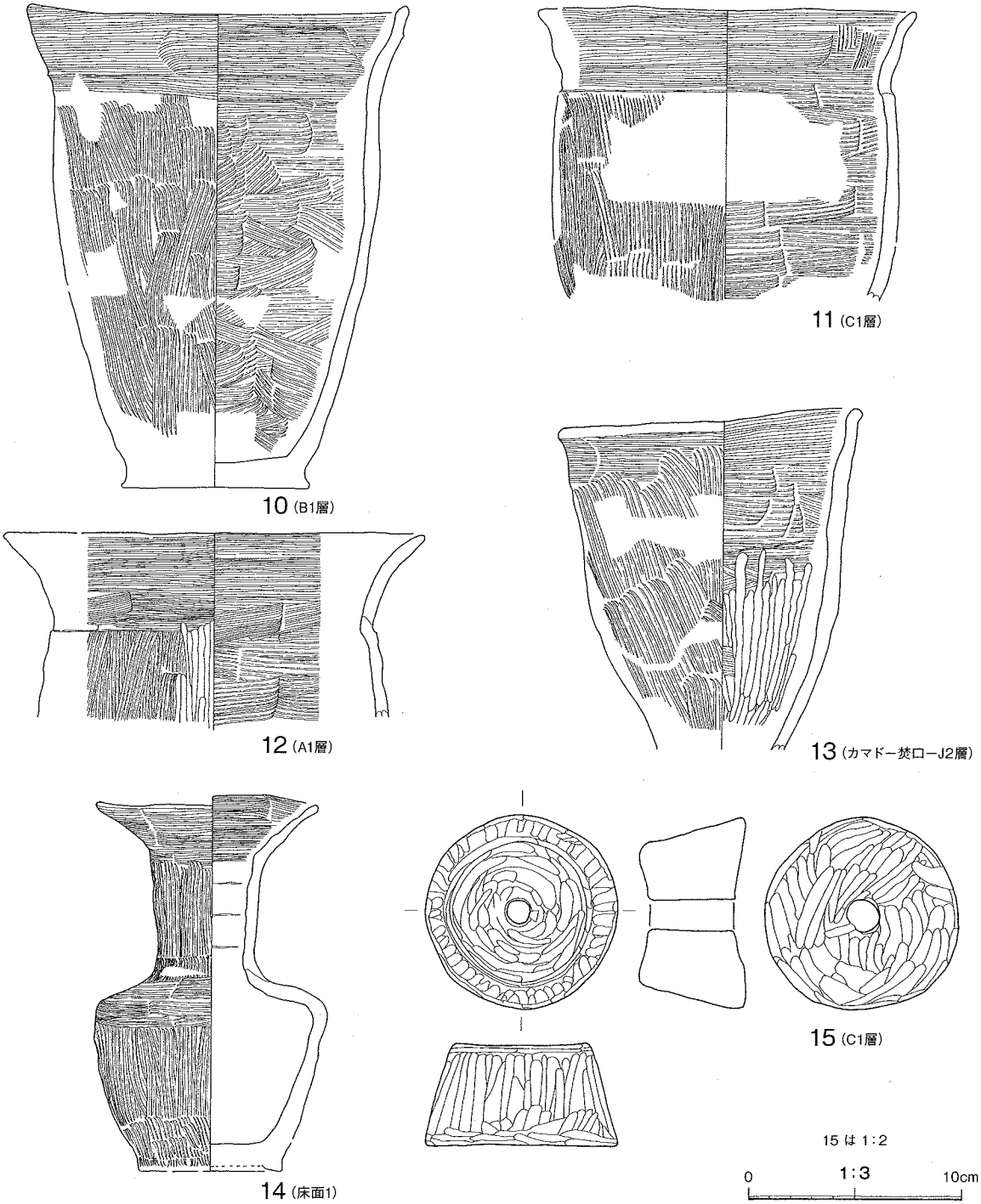

第50図　RA041竪穴住居跡（1）




第51図　RA041竪穴住居跡（2）




第52図　RA041竪穴住居跡出土遺物（1）




第53図　RA041竪穴住居跡出土遺物（2）

**長頸瓶**　後に体部下半～底部にかけてヘラミガキ調整が施される。14 は土師器の長頸瓶である。高台部を欠損しているがほぼ完形である。内外面ともに口縁部にヨコナデ、外面はハケメの調整が施される。

**土製品**　内面は頚部から体部にハケメ調整の後にヘラミガキ調整が施される。15 は土製の紡錘車である。各面に黒色処理およびヘラミガキ調整が施される。

## ＲＥ００２竪穴跡（第 54 図）

**位　　置**　調査区中央　**平 面 形**　方形　**主軸方向**　N18° W

**重複関係**　ＲＡ０４１竪穴住居跡と重複しそれより古い。　**規　　模**　3.18m×2.62m

**掘 込 面**　削平　**検 出 面**　黄褐色シルト層上面

**埋　　土**　自然堆積で層相の違いにより、A層～C層に大別される。

A層－２層に細分される。黒褐色土～暗褐色土を主体とし、褐色土を粉～粒状に含む。

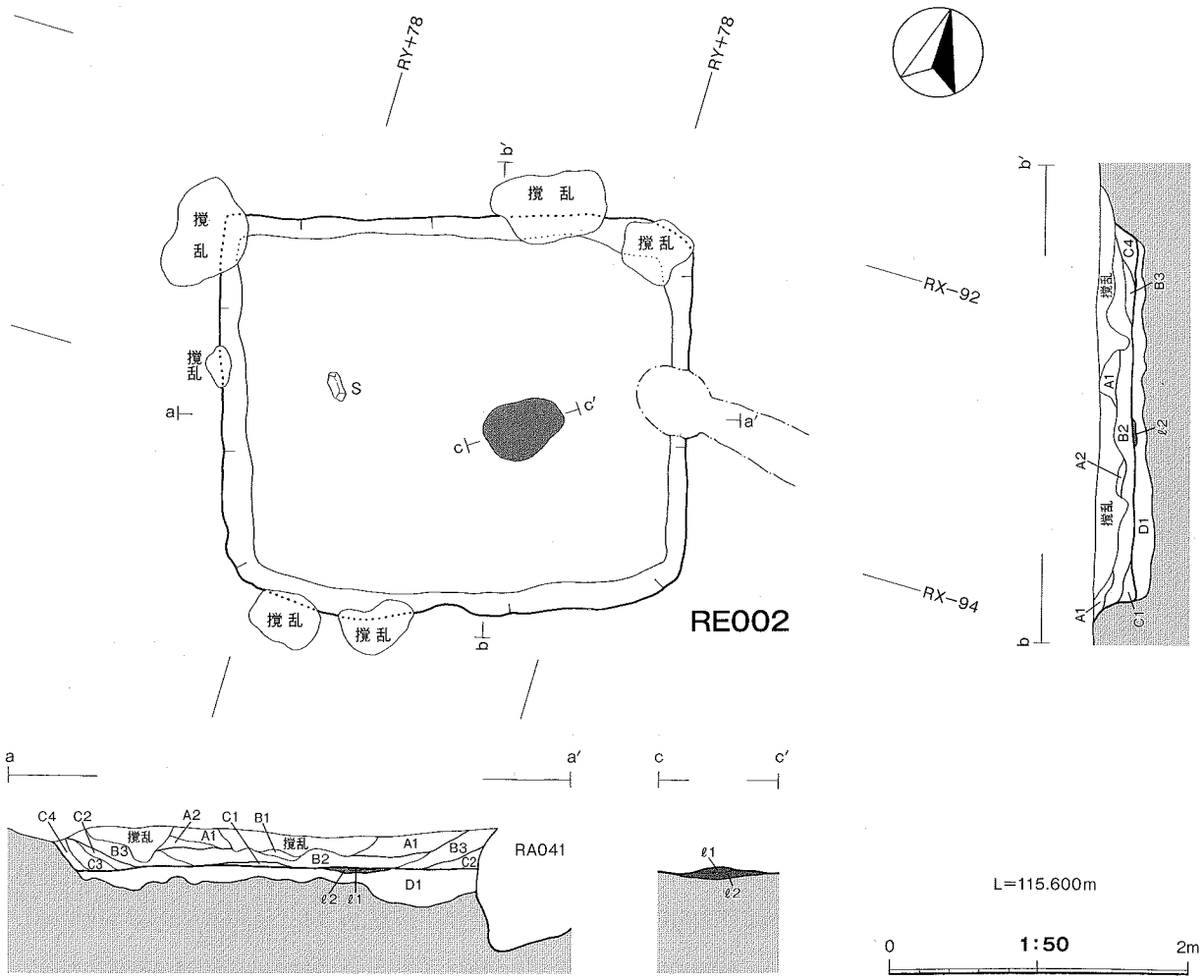
B層－３層に細分される。黒褐色土を主体とし、粒状の褐色土を多く含み焼土と少量の炭化物を含む。

C層－３層に細分される。黒褐色土～暗褐色土を主体とし、粒状の褐色土と炭化物を含む。

**壁の状況**　検出面から床面までの深さは0.23～0.28mで、外傾して立ち上がる。

**床の状態**　床面はほぼ平坦である。床面中央付近からやや東寄りに地床炉を検出した。規模は0.55m×0.41mで、焼土浸透層の深さは0.09mをはかる。構築土（D層）は褐色土を主体に、粒状の暗褐色土を含み、層の厚さは0.06～0.25mをはかる。

**出土遺物**　図示してないが、土師器の坏・甕類の摩滅した小破片が数十点出土した。




第54図　RE002竪穴跡

## （3）調査のまとめ

今回の調査では、奈良時代の竪穴住居跡２棟、奈良時代以降の竪穴跡１棟を検出した。20 次調査区のＲＡ041 東壁付近から調査区東端までは、畑作に伴う天地返しがおこなわれており遺構・遺物ともに検出できなかった。以下、調査成果ならびに本遺跡内の集落の様子について概観する。

**竪穴住居跡**　竪穴住居跡は２棟（ＲＡ040・041）を検出している。規模は一辺約５ｍ以上をはかる大形のものである。カマドの方向が北から西の方向に構築されている点が共通するが、方向は 34 度異なる。柱穴は１間×１間であり、床面からの深さはＲＡ040 竪穴住居跡が約 0.32～0.34m、ＲＡ041 竪穴住居跡が約 0.25～0.20m をはかる。煙道は地山をトンネル状に刳り貫いたものである。

**竪 穴 跡**　ＲＥ002 竪穴跡は一辺 2.6～3.2ｍのものである。カマドをもたず、柱穴を検出できなかった。時期的には重複関係から、ＲＡ041 竪穴住居跡の廃棄以前に構築されたと考えられる。このような竪穴跡は近隣の各集落跡においても散見されている。おおむね床面積が竪穴住居跡と比べ小さく、倉庫的な収容目的の施設の可能性が指摘されているが、本遺跡で確認されているものは、床面中央部付近に焼土が確認されており、地床炉を持っていたものと想定できる。

**出土遺物**　出土遺物は、非ロクロ整形の土師器坏や甕が主体を占める。土師器の坏は、器形は丸底から平丸底を呈し、体部に段もしくは稜をもつ。内面は黒色処理とヘラミガキ調整が施される。ＲＡ041 からは、ロクロ整形の土師器も出土している（第 52 図７）。土師器の甕は、口縁部が外反し頸部に段の入るものと、口縁部が直立するもの（第 53 図 13）が確認されている。底部外面は若干張出し、内面はほぼ平底である。また、ＲＡ041 竪穴住居跡の床面から土師器の長頸瓶が出土した。この時期の土師器の長頸瓶は、類例がほとんど見られないものだが、須恵器の模倣品の可能性が高い。

**時　　期**　これまでの調査成果から、盛岡周辺においてカマドが北～西の方向に構築される竪穴住居跡は、おおむね８世紀代までのものである。また、今回出土した非ロクロ整形の土師器坏は、平丸底を呈するものを主体とし、この土器群に関しては、８世紀後半の年代が考えられている。

このことから、今回調査したＲＡ040・041 竪穴住居跡も８世紀後半に収まるものと考えられる。しかし、ＲＡ040 竪穴住居跡とＲＡ041 竪穴住居跡の出土遺物を比較すると、坏の器形がＲＡ041 出土のもののほうが、より平底化していること、埋土Ａ層からの出土であり周辺からの流れ込みの可能性もあるが、ロクロ整形の土師器坏が出土していることなどから、ＲＡ041 竪穴住居跡のほうが、若干年代が下る可能性がある。

**集落様相**　これまで本遺跡の発掘調査は、遺跡の南東側を中心に進められてきており、そのほかの地域は試掘調査がほとんどである。竪穴住居跡を中心とした古代の集落は、北上川の段丘沿いに展開しているが、特に遺跡の中央部から南部にかけての遺構密度が高い。今回報告した 20･21 次調査区の周辺では、これまで第１・５・12・18 次の本調査を実施しており、特にこの周辺の集落様相がわかりつつあるので、竪穴住居跡から見える集落像の若干の検討をしてみる（第 55 図）。

まず、竪穴住居跡全体を検出している 18 棟に関して、竪穴住居跡の規模をもとに分類してみた。分類にあたっては、西野氏の「８世紀代の集落は大型住居跡（一辺６ｍ以上）を核とし、中型（一辺５～６ｍ前後）が１～２軒、小型（一辺４ｍ前後以下）が５～６軒程度でひとつの単位を形成し、９世紀前半には小型化・均一化し、中型住居が残り、大型住居は姿を消す」という研究成果によることとする（西野 1998）。

今次調査区およびその周辺（第１・５・12・18 次調査区）で検出した竪穴住居跡の一辺の長さをもとに、規模の散布図（第 56 図）を作成したところ、大型が４棟、中型が８棟（８世紀代５棟・９世紀代３棟）、小型が６棟に分類できた。今次調査区周辺の竪穴住居跡のあり方は、小型のものは軒数が少なく、中型のものが主体的であり、西野氏の分類に比較して全体的に規模が小さく、かつ規模の差もあまり大きくないことが指摘できよう。

西野氏は、この集落のあり方を「血縁関係で結びつき、成立している蝦夷集落の基本形」と理解している。以上のことから、今次調査区およびその周辺の竪穴住居跡の分布は、これまでの８世紀代の集落の研究成果からはずれるものではなく、その集落の社会体制の一端をあらわすものと考えられる。しかし、本遺跡では前述のとおり、竪穴住居跡規模の差があまり大きくないこと、出土遺物の差異もあまり明確に見られないことから、この集落の社会は、突出した首長層もしくはそれに相当するものは存在しなかった、もしくはその差が大きくない社会体制だったことが想定される。これが、律令体制の浸透による社会体制の変化にともなうものなのかは、検討の余地が大いにあるが、８世紀後半代の竪穴住居跡を主体とする本遺跡においては、９世紀初頭の城柵造営と時間差があまりないことから、関係性がある可能性も考えられる。延暦 22（803）年の志波城跡の造営は、地域の蝦夷の反抗にあった延暦 21（802）年の胆沢城（奥州市）の造営直後になされたものであり、志波城の造営にあたっての地域の大規模な反抗の記録は見られない。このことから、志波城造営に影響のあった古代志波郡の蝦夷たちは親朝廷派だった可能性も指摘されている。志波城造営直前にあたる本遺跡の集落も、朝廷側と良好な関係性を保っていた可能性もあり、強力な首長に率いられる社会ではなく、朝廷の影響を受けた集落の様子を表していることも考えられる。

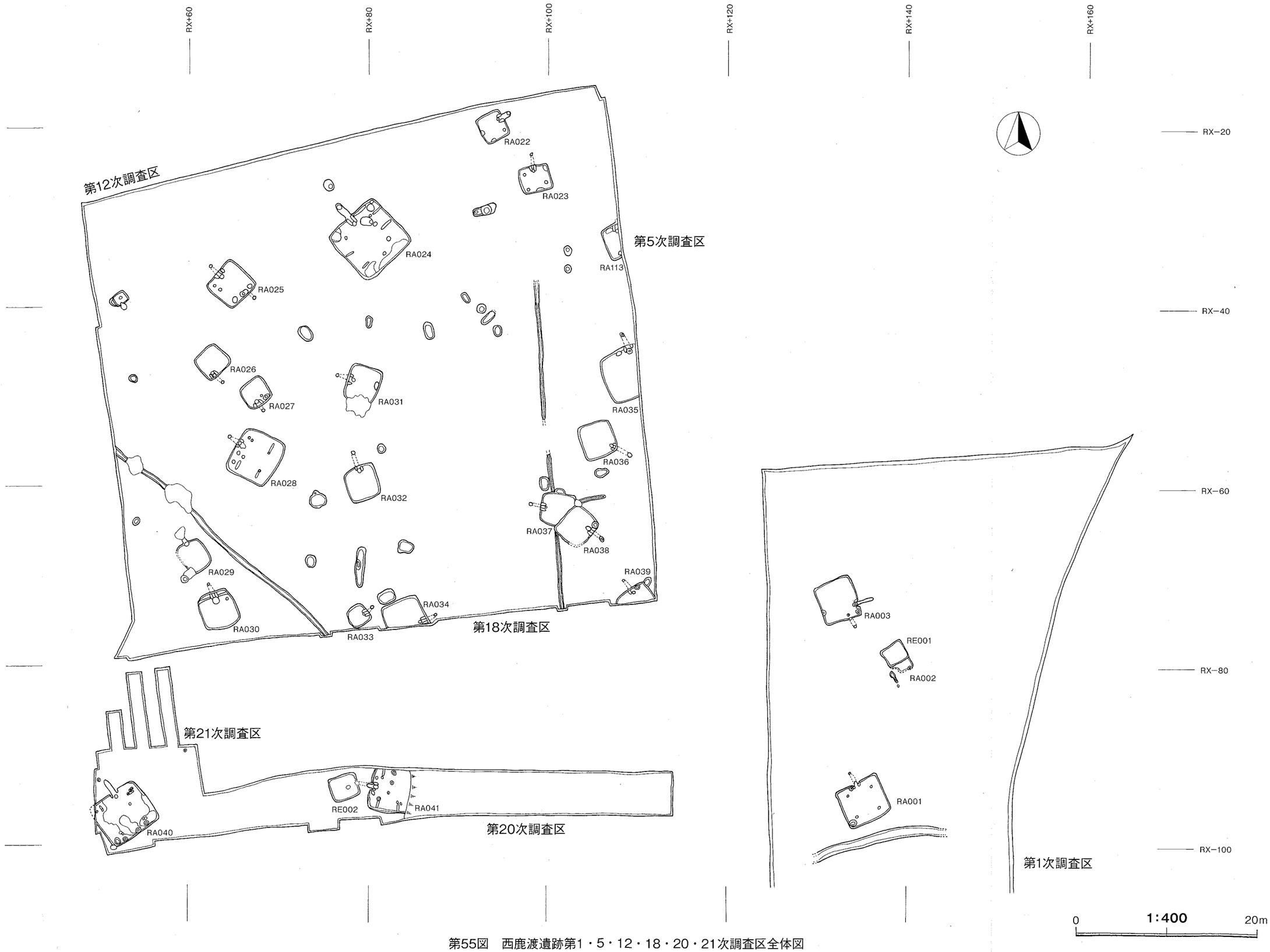
また、本遺跡の南に隣接する百目木遺跡では、昭和 53 年の大型ショッピグセンター建設にともなう発掘調査が都南村教育委員会により実施されており、奈良～平安時代の竪穴住居跡 80 棟を検出している。西鹿渡遺跡と百目木遺跡はほぼ同じ時期の集落跡といえるが、その関係性については、まだ研究が進められていない。

今報告では、時間と紙面の制約により、土器と遺構のあり方の詳細な検討を進めることはできなかったが、今後、出土土器の編年や遺構の検討が必要である。

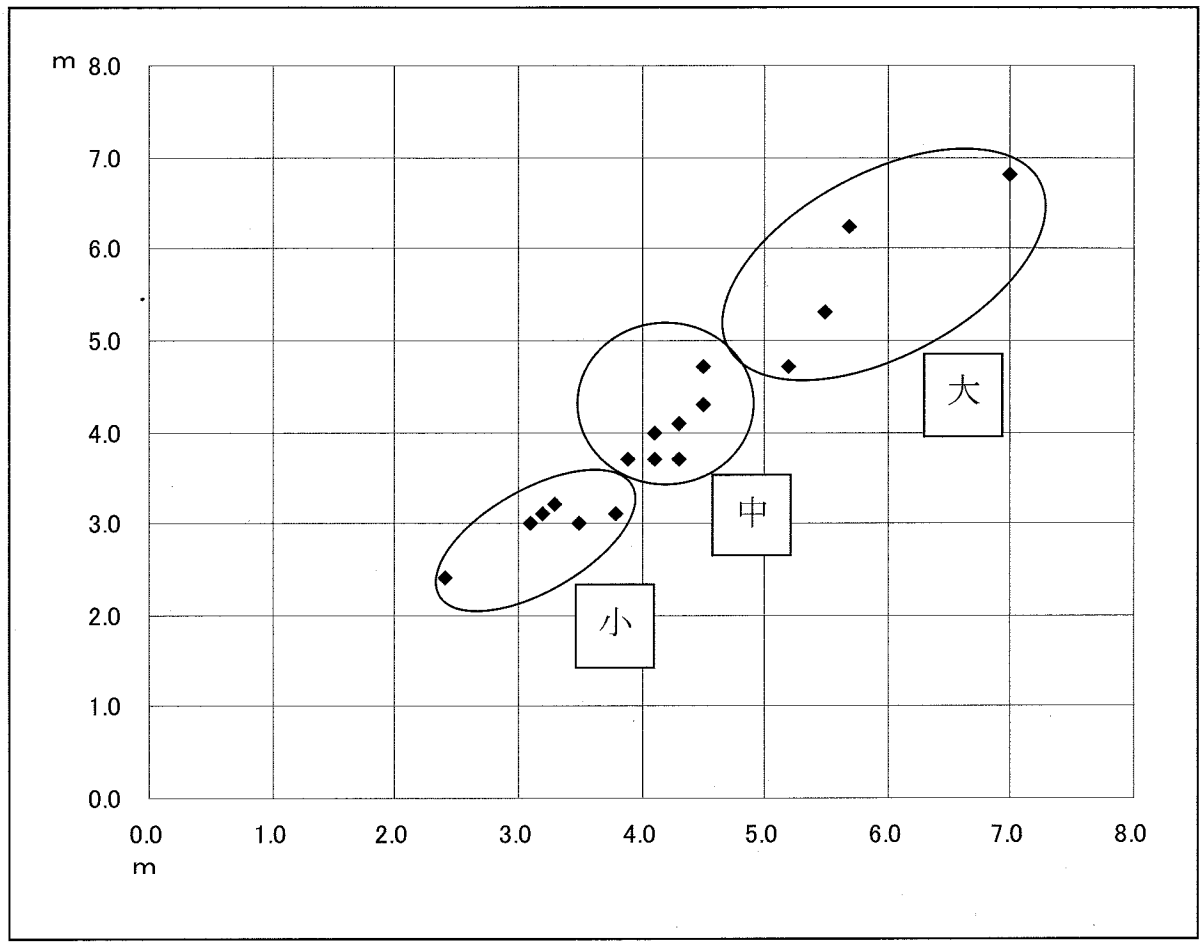
（鈴木賢治・今野公顕）

【参考文献】

都南村教育委員会　1981　『西鹿渡遺跡発掘調査報告書』
盛岡市教育委員会　1998　『盛岡市埋蔵文化財調査年報-平成 5･6 年度-』
西野　修　1998　「城柵と地域社会の変容　北上盆地北部の様相」『第 24 回古代城柵官衙遺跡検討会　資料』




第55図　西鹿渡遺跡第1・5・12・18・20・21次調査区全体図




第56図　西鹿渡遺跡　竪穴住居跡規模散布図

# Ⅷ. 町田遺跡(第15次調査)

## 1. 遺跡の環境

### (1) 遺跡の概要

**位　　置**　町田遺跡は盛岡市中心部より南に約 10km の乙部地内に所在する。現況は宅地、畑地を主体としている。

**地形・地質**　本遺跡の立地する南北約900mにおよぶ段丘面は、西側を南流する北上川の氾濫原によって画され、東側は乙部川によって開析された低地によって画される。また、北側は乙部川、南側は上流で乙部川と分流する大地田川によって画されている。

同段丘面上に乙部野・松長根・乙部方八丁遺跡が隣接して所在するが、いくつかの沢により画されている。北側の乙部館遺跡は東西に長い段丘上に立地し、これらの南・東側は小起伏山地や沢状地形に接している。

**周辺の遺跡**　北上川東岸に面する中位段丘縁辺や丘陵地には、数多くの縄文時代の遺跡が立地する。特に手代森遺跡は（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターと都南村教育委員会により、発掘調査が実施されており、縄文時代晩期の集落と多量の遺物が出土している。

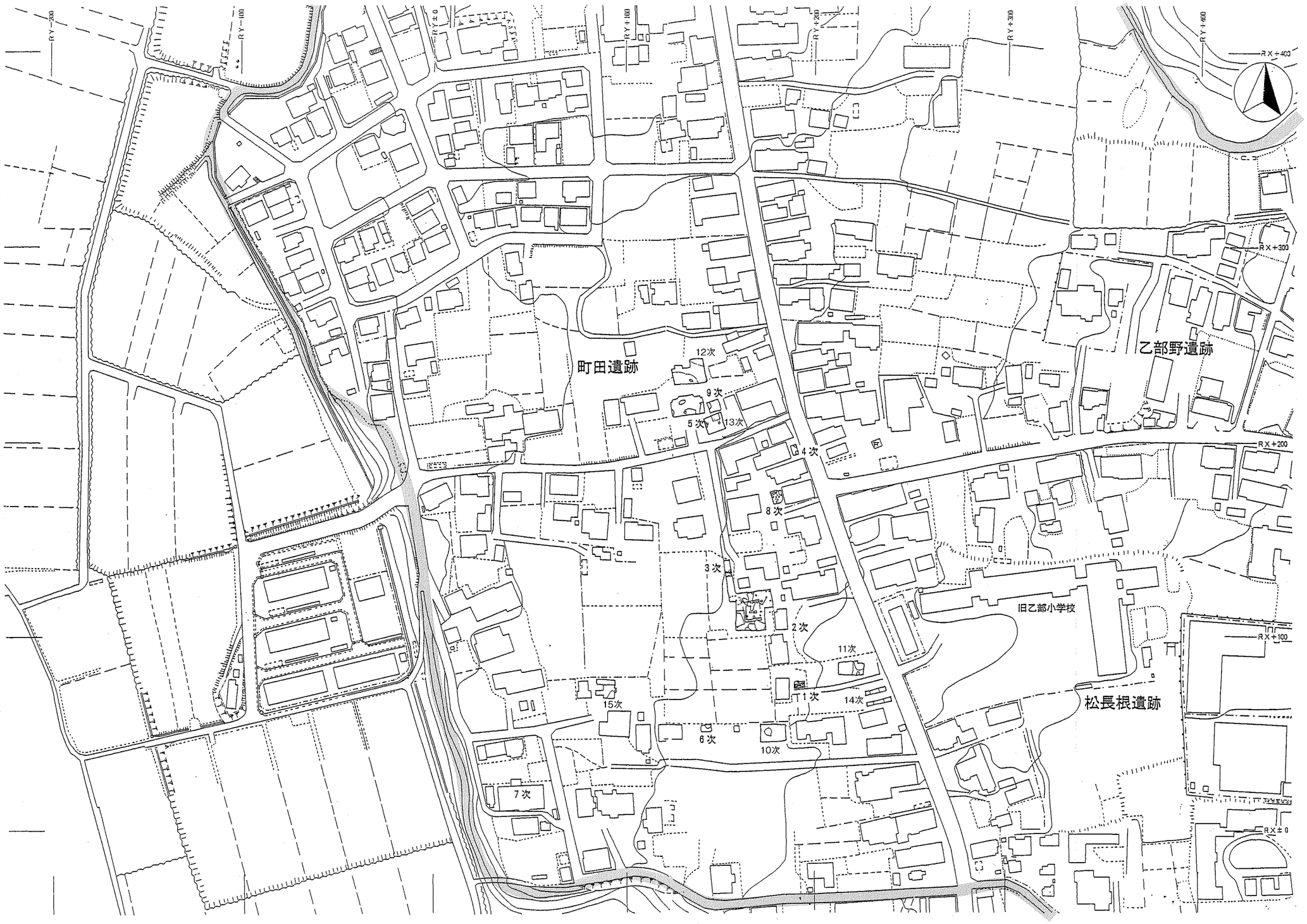
弥生時代の遺跡は、乙部遺跡群では山麗縁辺部や沢沿いの低平地などで発見されており、縄文時代の遺跡に比べるとかなり少なく、土器片が散見されるのみである。

奈良時代の遺跡は乙部遺跡群では確認されていないが、北上川を隔てた低位段丘面には終末期古墳群（太田蝦夷森古墳群・高館古墳）が所在し、西鹿渡遺跡や百目木遺跡、矢巾町の館畑遺跡などの奈良時代から平安時代にかけての遺跡が広がっている。

平安時代に入ると、奈良時代からの集落の上に志波城跡（803年）や徳丹城（813年頃）が造営される。これ以降、沖積面では急激に集落数が増加し、さらに上位の中位段丘や扇状地に集落が拡散するようになる。平安時代の集落のほとんどが9～10世紀代のものであり、この地域の大きな特徴のひとつで、乙部遺跡群に所在する遺跡もほとんど9世紀代のものである。

乙部野遺跡からは、9世紀後半と考えられる火葬骨を納めた骨蔵器専用の短頸壺と蓋が発見されている。被葬者は徳丹城廃絶後に、地域拠点集落として発達した乙部方八丁遺跡を治めた人物と考えられている。

中世の城館跡として北上川東岸沿いには、簗川の合流点付近から、新山館、蝶ヶ森館、手代森館、黒川館があり、乙部川流域に乙部館、江柄館、大萱生館が所在する。このほか北上川支流の河川の流域にも多くの中世城館が築かれる。このうち乙部館遺跡が昭和62年に都南村教育委員会により本調査が行われており、主郭西側と二の郭を仕切る空堀部分が確認されている。乙部館遺跡からはおよそ1km離れているが、乙部方八丁遺跡でも中世以降のものと想定される大溝を検出している。




第57図　乙部遺跡群全体図（1：2000）

## 2. 調査の概要

### （1）これまでの調査

以前から松長根遺跡や乙部野遺跡の立地する段丘上では、古代の土師器・須恵器のほか縄文時代の遺物も表採されており、遺跡として確認されていた。町田遺跡では平成６年度の第１次調査実施以降、これまで15次にわたって調査が実施されている。

**町田遺跡の調査成果**

| 次数 | 所在地 | 調査原因 | 面積 | 期間 | 検出遺構・遺物 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 乙部30地割町田36－2・3 | 車庫新築 | 20㎡ | 94.11.08<br>94.11.11 | 平安時代の竪穴住居1棟、<br>土坑1基 |
| 2試掘 | 乙部30地割町田51－8 | 住宅新築 | 132㎡ | 94.11.11<br>94.11.12 | 平安時代の竪穴住居6棟、<br>土坑5基、溝跡2条、<br>近世以降の土坑墓4基 |
| 2 | 乙部30地割町田51－8 | 住宅新築 | 132㎡ | 95.04.07<br>95.04.14 | 溝跡2条、近世以降土坑墓4基 |
| 3 | 乙部30地割町田28－4 | 住宅新築 | 100㎡ | 96.06.17 | 遺構・遺物なし |
| 4 | 乙部30地割町田59－4 | 住宅増築 | 36㎡ | 96.07.09<br>96.07.12 | 縄文時代の遺物包含層、<br>平安時代の竪穴住居跡2棟 |
| 5試掘 | 乙部30地割町田85－1 | 住宅改築 | 250㎡ | 96.09.24 | 平安時代の竪穴住居跡を検出 |
| 5 | 乙部30地割町田85－1 | 住宅改築 | 250㎡ | 96.11.05<br>96.11.13 | 平安時代の竪穴住居跡3棟 |
| 6 | 乙部30地割町田33－3 | 住宅増築 | 180㎡ | 97.04.15<br>97.04.16 | 平安時代の竪穴住居1棟 |
| 7 | 乙部30地割町田56 | 農作業<br>小屋新築 | 20㎡ | 97.05.10 | 遺構・遺物なし |
| 8 | 乙部30地割町田51－9 | 車庫新築 | 20㎡ | 97.09.04<br>97.09.12 | 平安時代の土坑1基、柱穴8口 |
| 9 | 乙部30地割町田<br>13－1、13－5 | 小屋新築 | 33㎡ | 98.07.01<br>98.07.06 | 縄文時代の遺物包含層、<br>平安時代の竪穴住居跡1棟 |
| 10 | 乙部30地割町田34－7 | 住宅新築 | 155㎡ | 99.04.07<br>99.04.19 | 平安時代の竪穴住居跡1棟 |
| 11 | 乙部30地割町田36－3 | 住宅新築 | 84㎡ | 99.04.07<br>99.04.19 | 平安時代の竪穴住居跡1棟 |
| 12 | 乙部30地割<br>63－2・84の一部 | 住宅新築 | 189㎡ | 99.08.23<br>99.08.30 | 土坑2基、ピット1口、<br>遺物包含層2ヶ所 |
| 13 | 乙部30地割61－1 | 住宅新築 | 84㎡ | 00.03.21<br>00.03.24 | 縄文時代後～晩期－遺物包含層<br>平安時代－竪穴住居跡1棟、<br>江戸時代－建物跡3棟、土坑3基 |
| 14 | 乙部30地割36－4 | 住宅造成 | 44㎡ | 07.09.20 | 遺構・遺物なし |
| 15 | 乙部30地割<br>39－1の一部外 | 住宅増築 | 67㎡ | 07.09.27<br>07.10.03 | 平安時代前期の竪穴住居跡1棟 |

第8表　町田遺跡調査成果

### （2）平成19年度の調査

今年度は個人住宅建築にともなう調査を行った。調査区は遺跡の中央南西よりに位置する。検出した遺構は、平安時代前期（9世紀）の竪穴住居1棟である。出土遺物は須恵器甕の破片、土師器坏及び甕の破片などである。

## 3 調査内容

### (1) 平安時代の遺構・遺物

**ＲＡ115 竪穴住居跡（第58図）**

**位　　置**　調査区東側　**平 面 形**　方形

**規　　模**　東西2.84m以上、南北3.6m以上　**掘 込 面**　削平

**検 出 面**　表土直下褐色シルト層上面　**重複関係**　なし

**埋　　土**　埋土は自然堆積でＡ層からなり、黒色～黒褐色シルトを主体とし、粉状の黒褐色土や褐色土、火山灰を含む。Ａ層はさらに４層に細分される。

**壁の状態**　緩やかに外傾して立ち上がる。

**床の状態**　床面はほぼ平坦で構築土は認められない。

**か ま ど**　調査区東壁中央付近に検出した。煙道底面は床面とほぼ同じ高さである。煙道内堆積土はＪ層からなる。Ｊ層は黒褐色を主体とし、粉～塊状の褐色土、暗褐色土、焼土を含む。

**出土遺物（第59図１～４）**　１は土師器の坏である。口縁部から底部まで１／５ほど残存している。内面はヘラミガキで外面はヘラケズリが施されている。２は土師器の坏で内黒ヘラミガキが施されている。いずれもＡ４層から出土した。３は土師器の甕で口縁部にヨコナデ、内面にハケメ、外面にヘラケズリが施されている。４は須恵器の甕でＪ４層から出土した。外面は平行タタキ、内面は蓮藕文が施されている。その他図示していないが、土師器坏、須恵器甕小片が出土した。

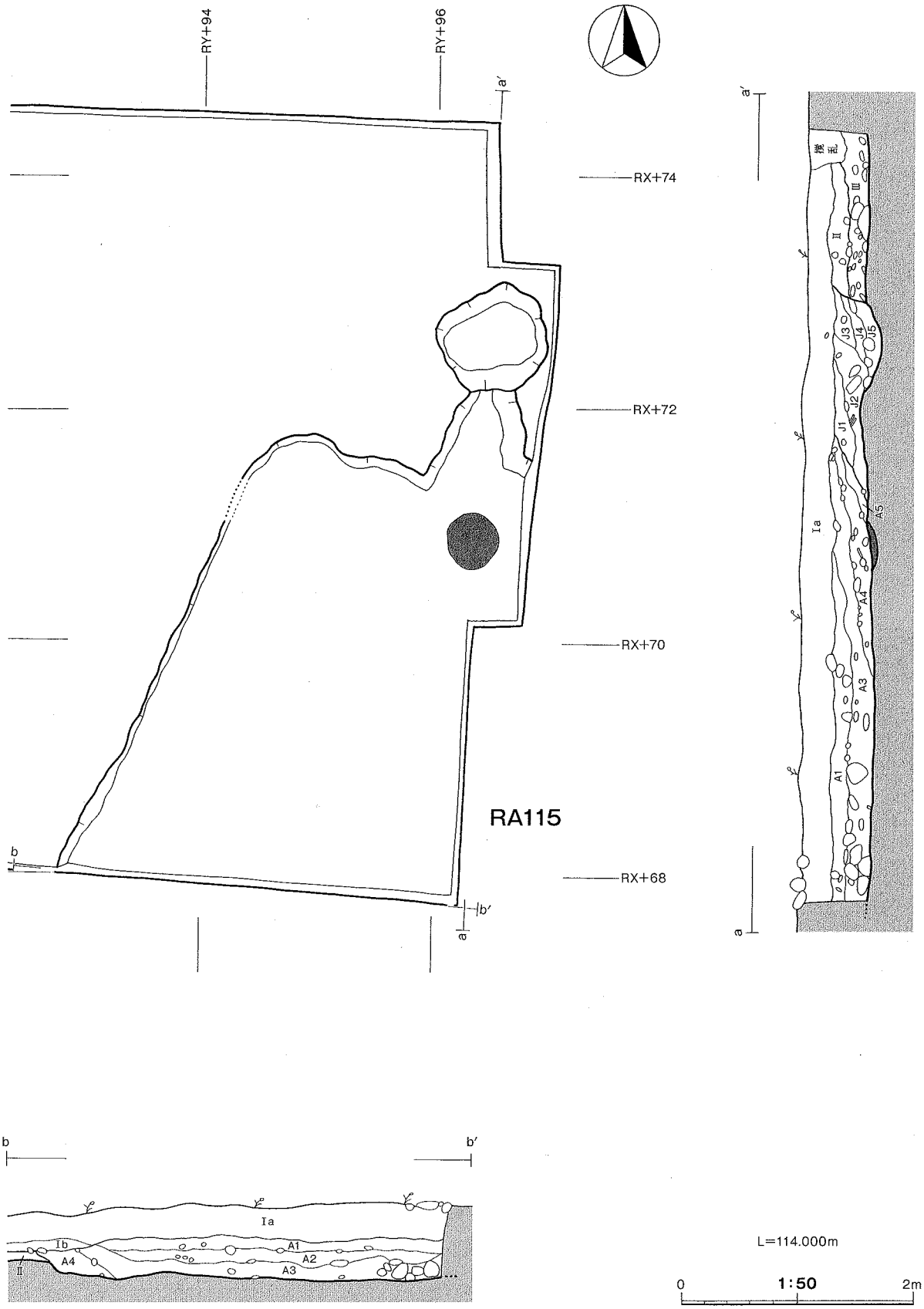
## 4 調査のまとめ

**竪穴住居跡**　ＲＡ115 竪穴住居跡の規模は東西2.84m以上、南北3.6m以上をはかるものである。かまどは確認できたものの、調査範囲が狭いため、ＲＡ115 竪穴住居跡の全容はまだ不明である。床面はほぼ平坦で構築土は認められなかった。ＲＡ115は出土遺物から平安時代、９世紀後半の年代が与えられる。

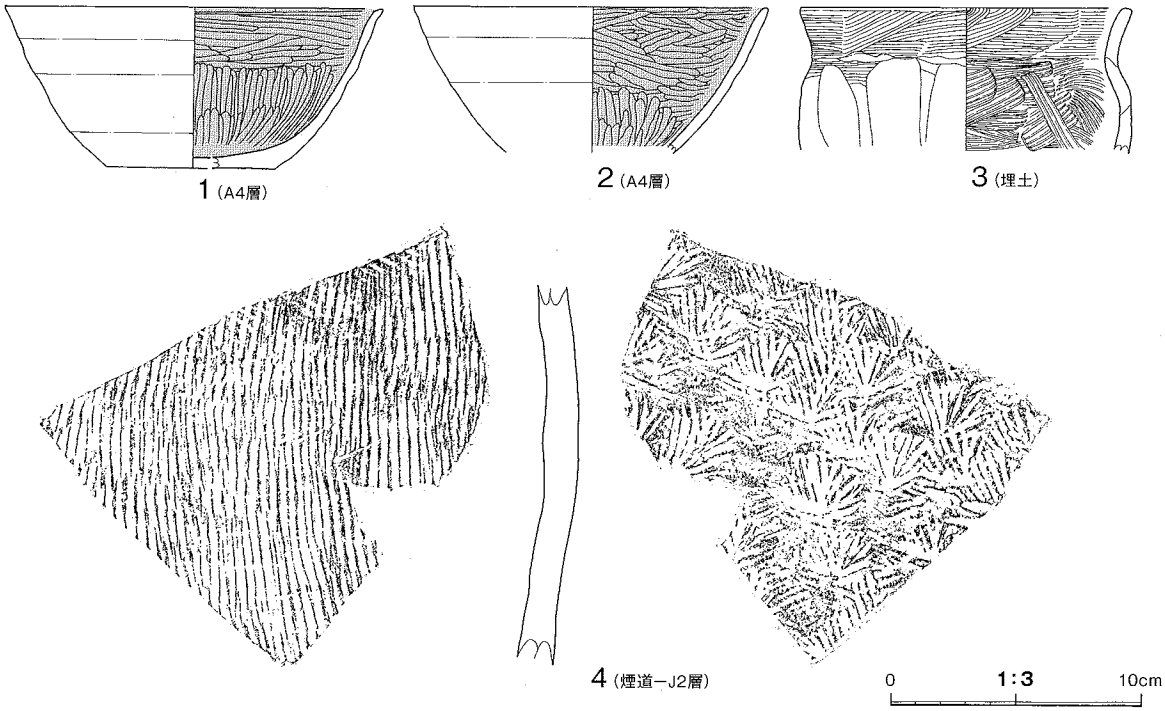
町田遺跡では、平安時代の遺構が最も多く確認されているが、各調査区が狭く、また散在しているため、集落全体の全体像には調査例の蓄積が必要である。今後の調査に期待したい。

【引用・参考文献】

盛岡市教育委員会　1998　『乙部遺跡群　乙部方八町遺跡－平成6.7.9年度発掘調査概報－』
盛岡市教育委員会　1999　『盛岡遺跡群　－平成10年度発掘調査概報－』
盛岡市教育委員会　2000　『盛岡市内遺跡群　－平成11年度発掘調査概報－』



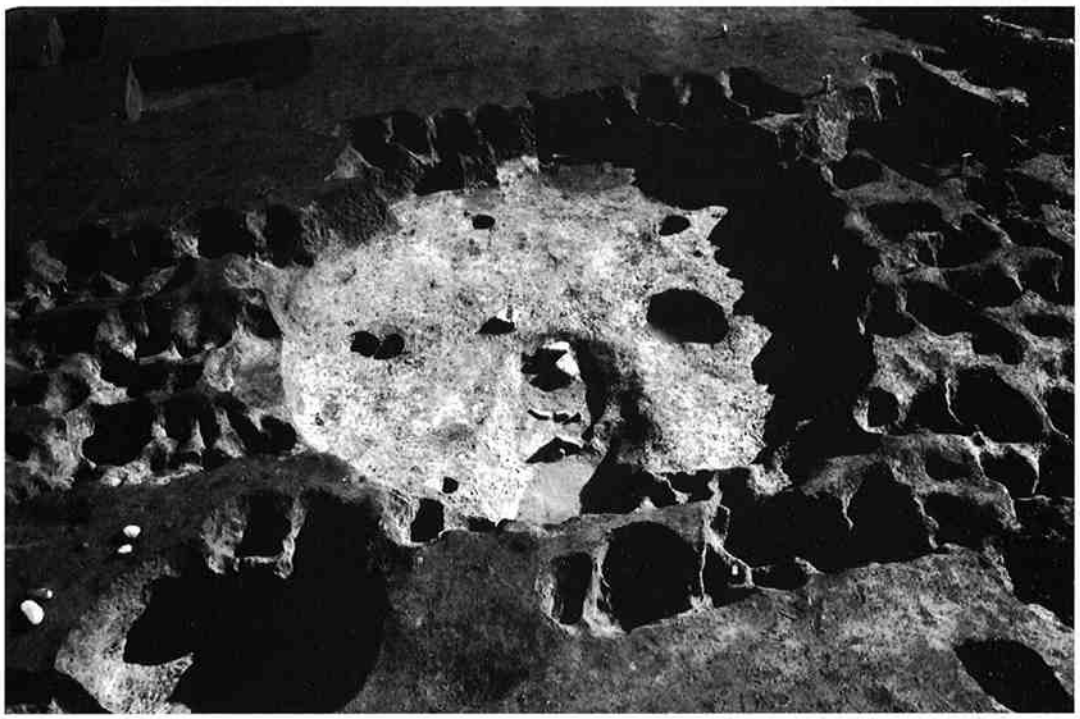

第58図　RA115竪穴住居跡




第59図　RA115竪穴住居跡出土遺物

# 写真図版

大館町遺跡第77次調査　全景（南東から）

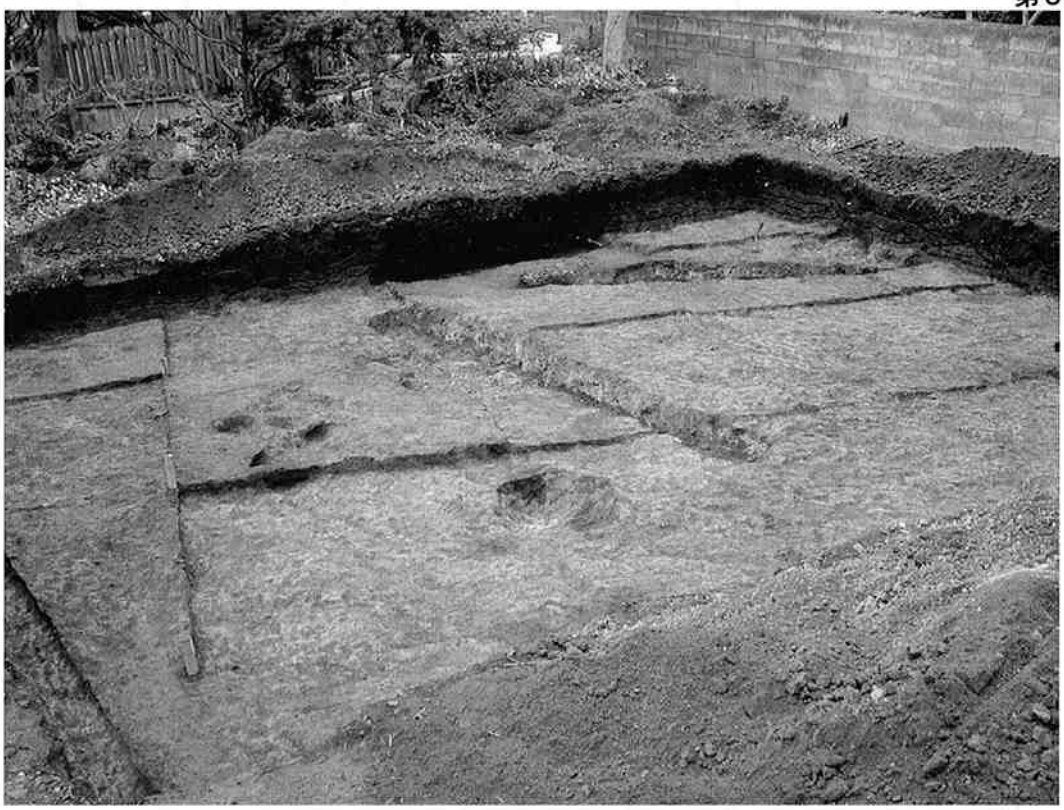


大館町遺跡第77次調査　RA2232竪穴住居跡

第２図版

大館町遺跡第78次調査　全景（東から）

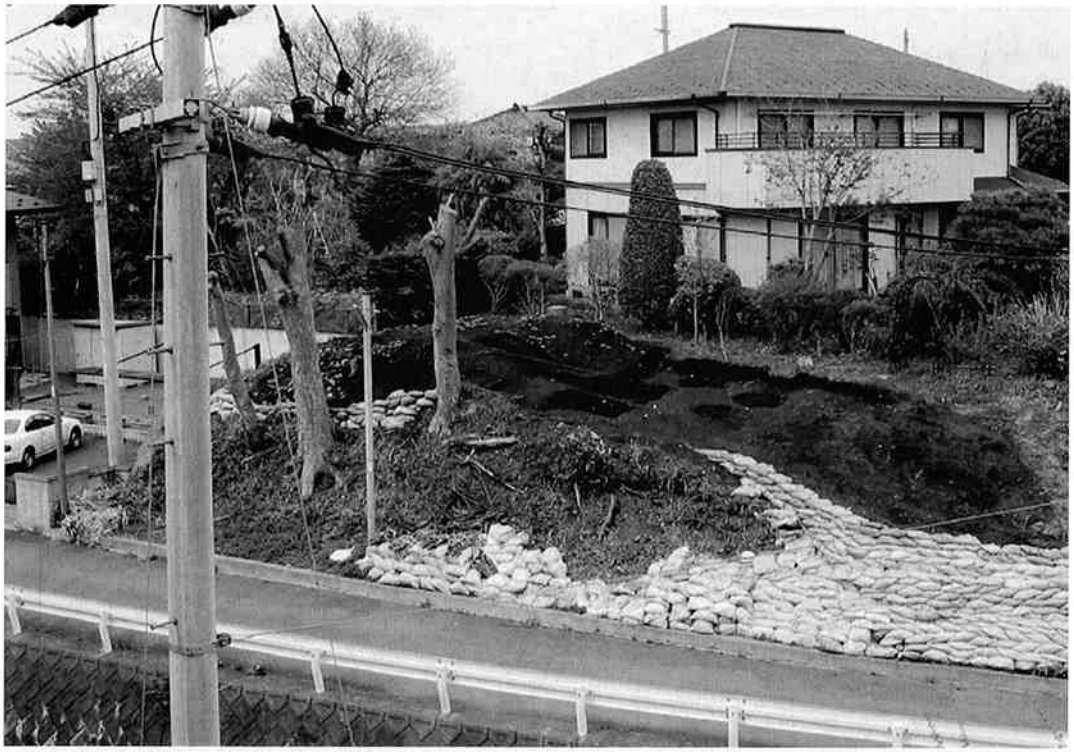
大館町遺跡第78次調査　RG505溝跡　埋土堆積状況



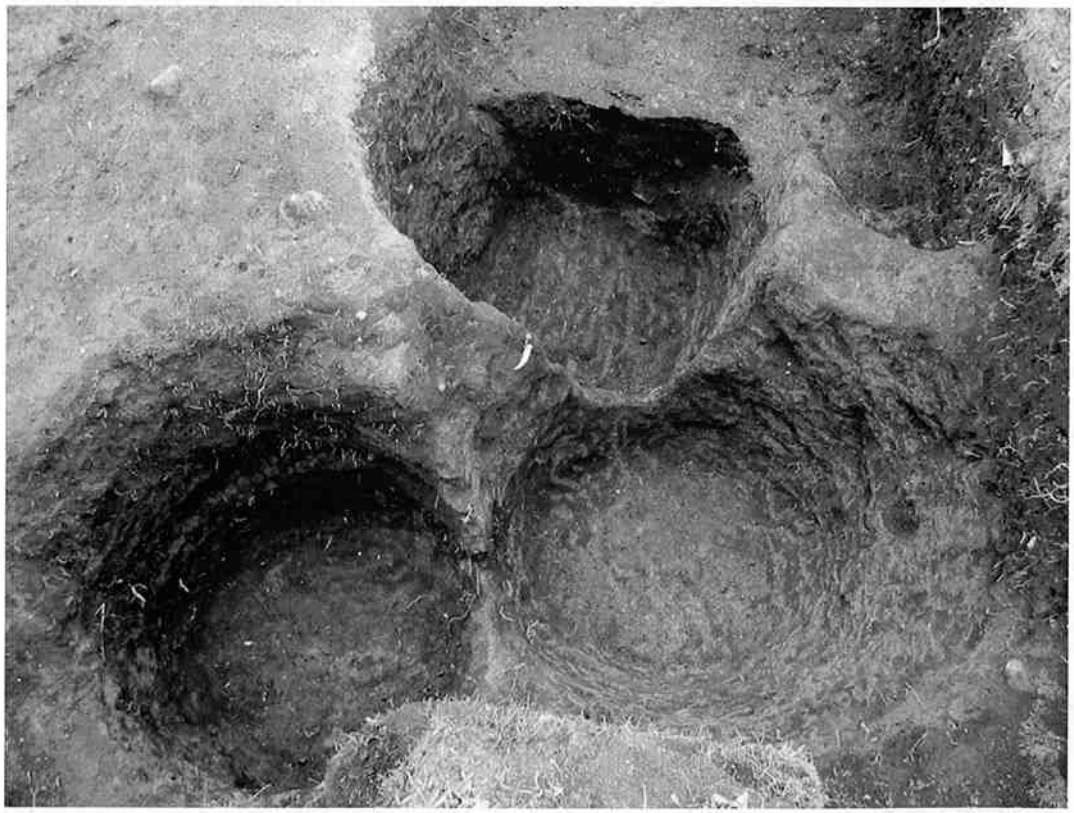
宿田遺跡第11次調査　全景（北西から）

宿田遺跡第11次調査　RD037・038・039土坑

第４図版

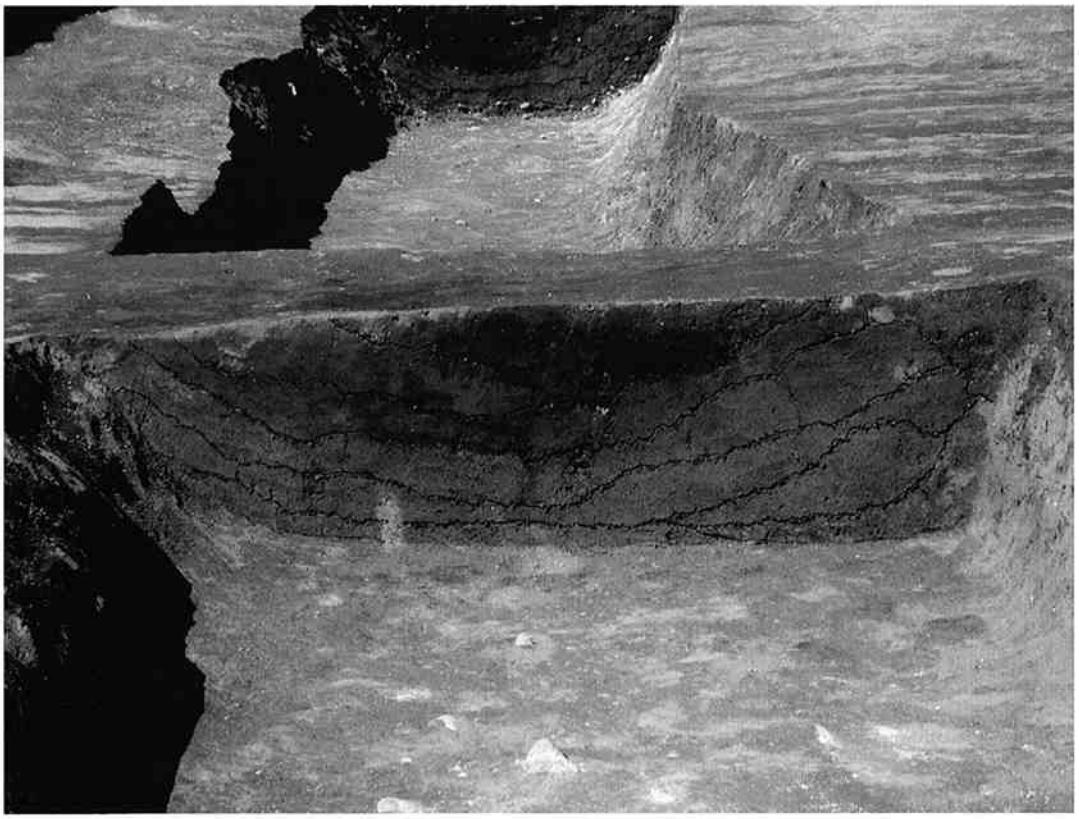


宿田南遺跡第9次調査　全景（南西から）



宿田南遺跡第9次調査　土坑墓群

大宮北遺跡第11次調査　全景（西から）



大宮北遺跡第11次調査　RG015溝跡　埋土堆積状況

第６図版

館遺跡第20次調査　全景（南から）

館遺跡第20次調査　SD004溝跡

西鹿渡遺跡第20次調査　RA041竪穴住居跡・RE002竪穴跡

西鹿渡遺跡第20次調査　RA041竪穴住居跡　遺物出土状況

第８図版

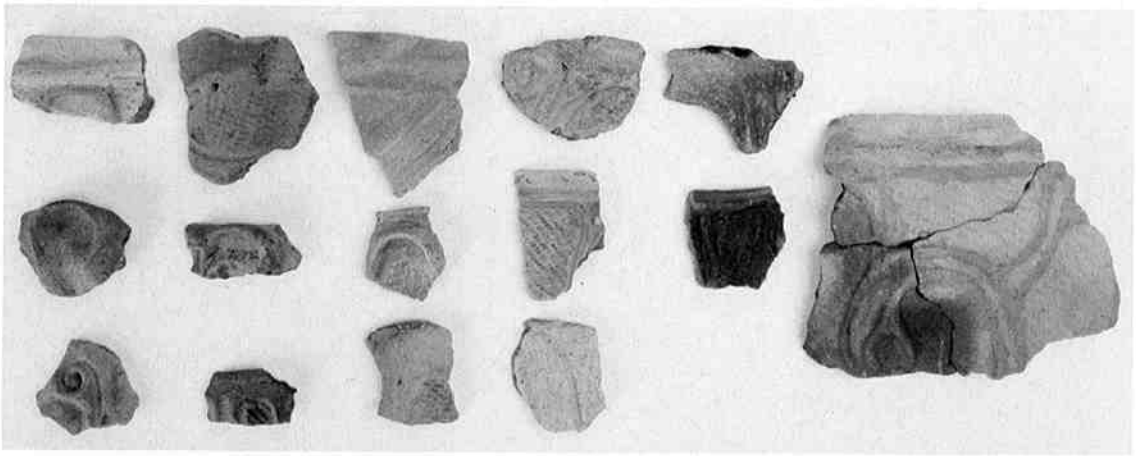
西鹿渡遺跡第21次調査　RA040竪穴住居跡

西鹿渡遺跡第21次調査　RA040竪穴住居跡　遺物出土状況

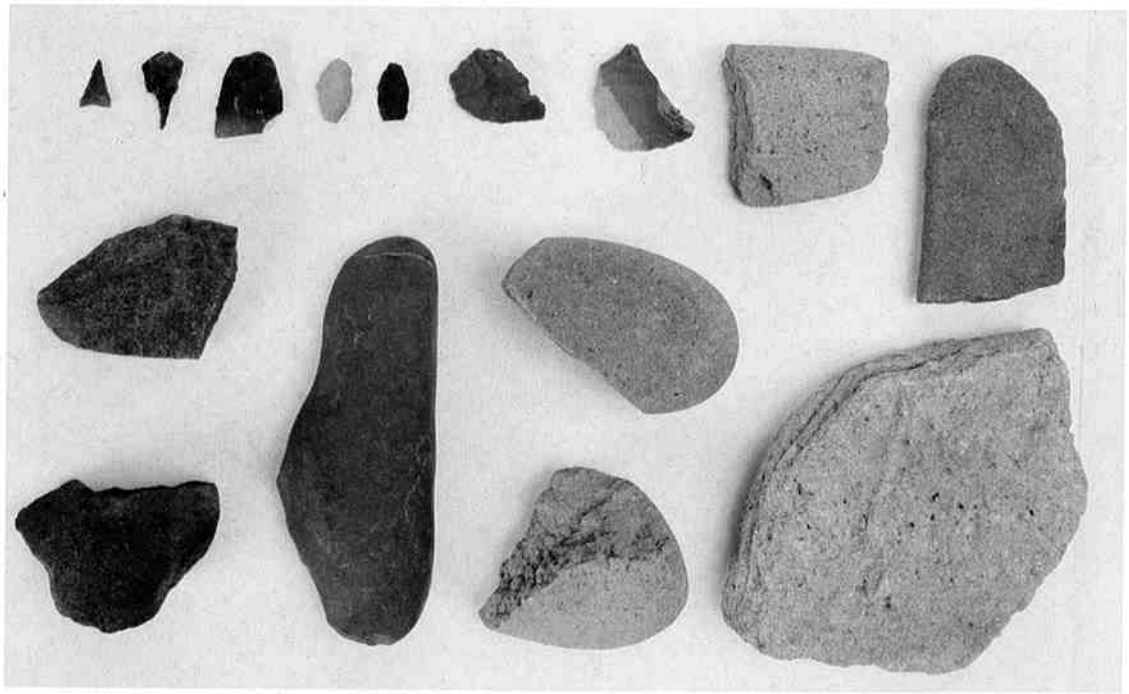
町田遺跡第15次調査区　全景

町田遺跡第15次調査区　RA115竪穴住居跡

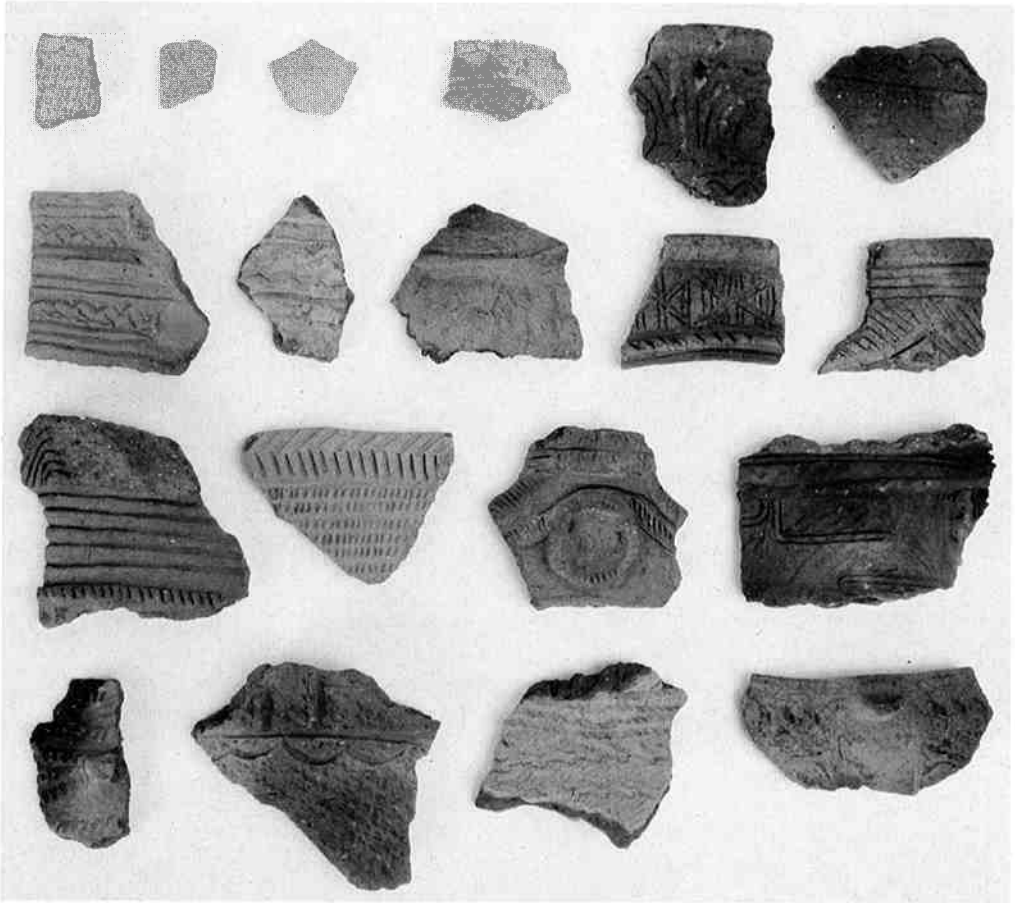
第 10 図版



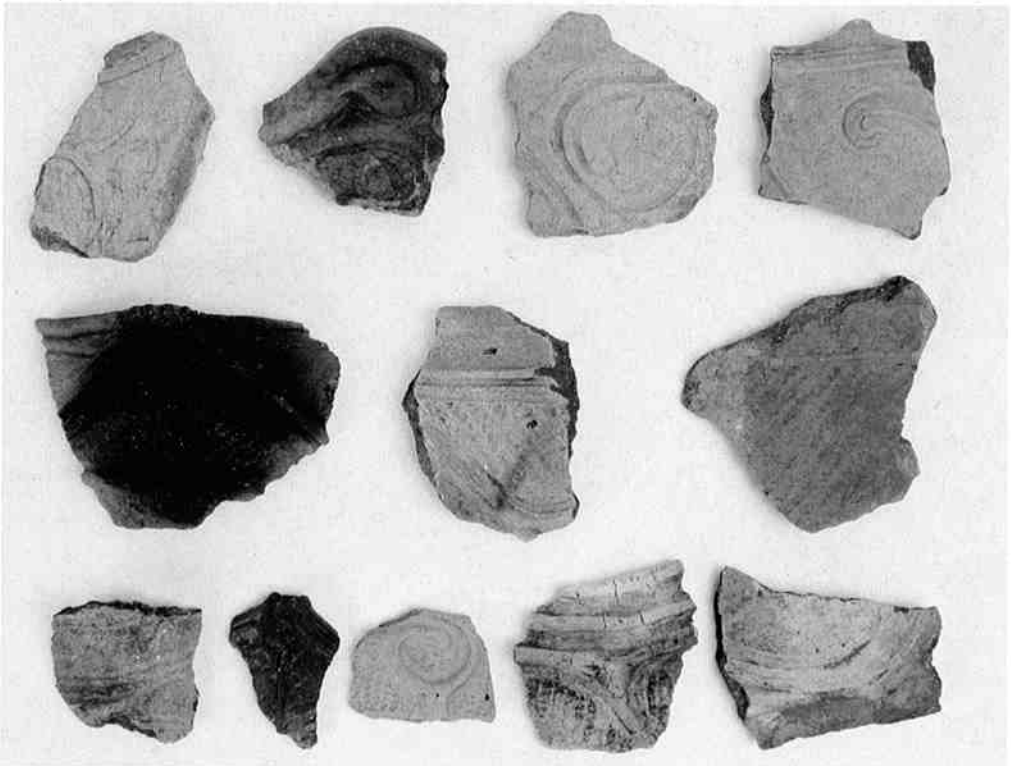
大館町遺跡第77次調査　RA2233　竪穴住居跡出土土器



大館町遺跡第77次調査　RA2233　竪穴住居跡出土石器

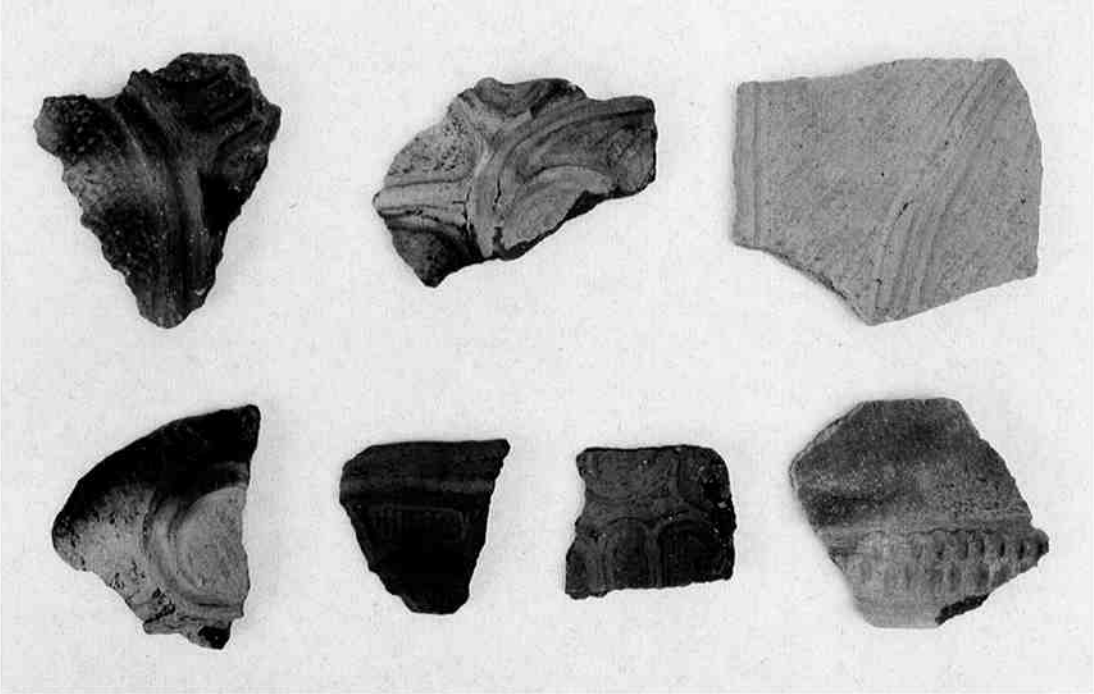


大館町遺跡第77・78次調査　遺物包含層出土遺物（1）

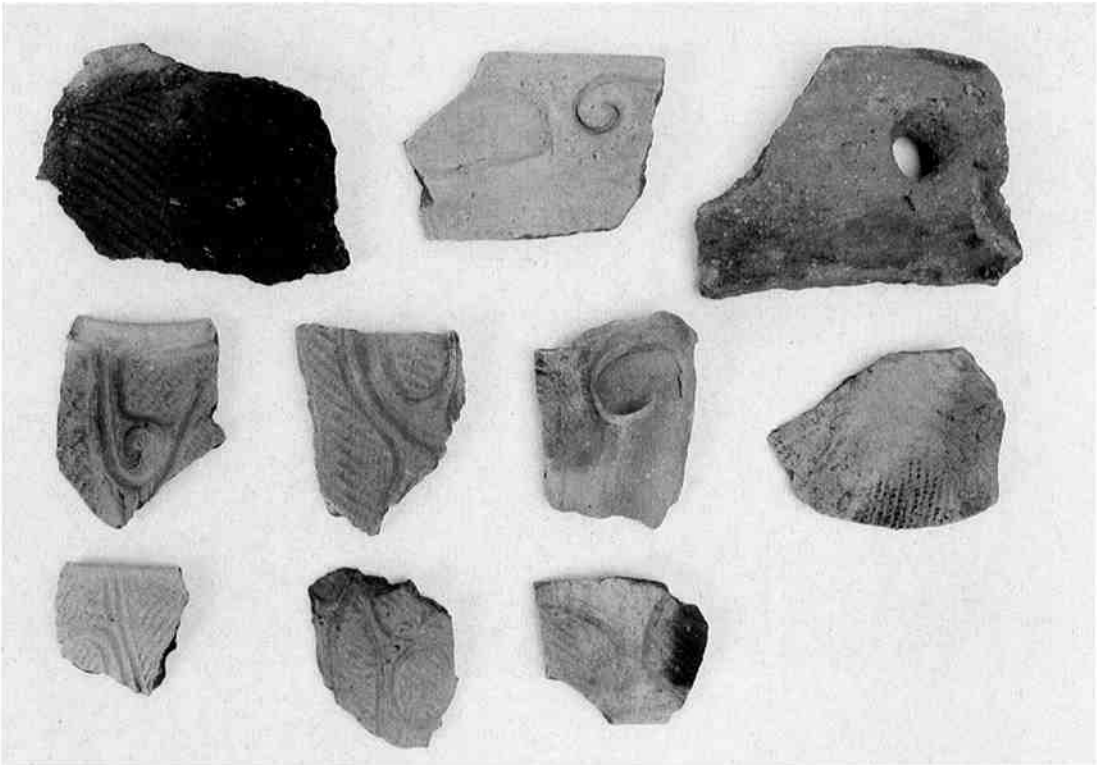


大館町遺跡第77・78次調査　遺物包含層出土遺物（2）

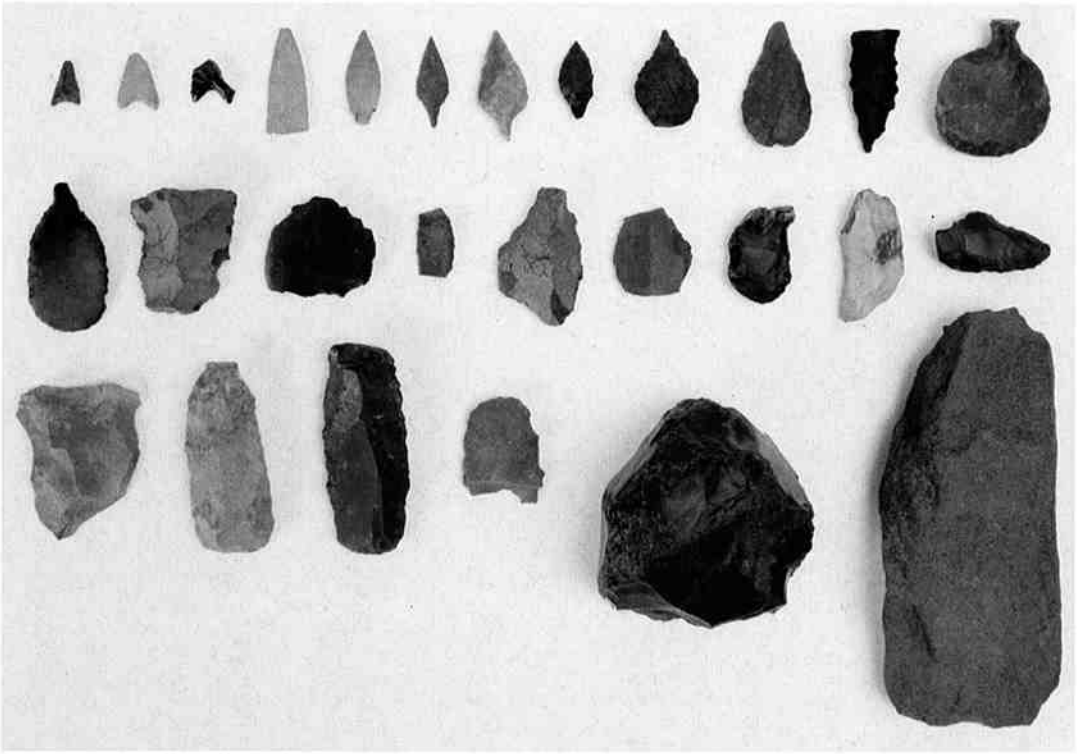
第 12 図版



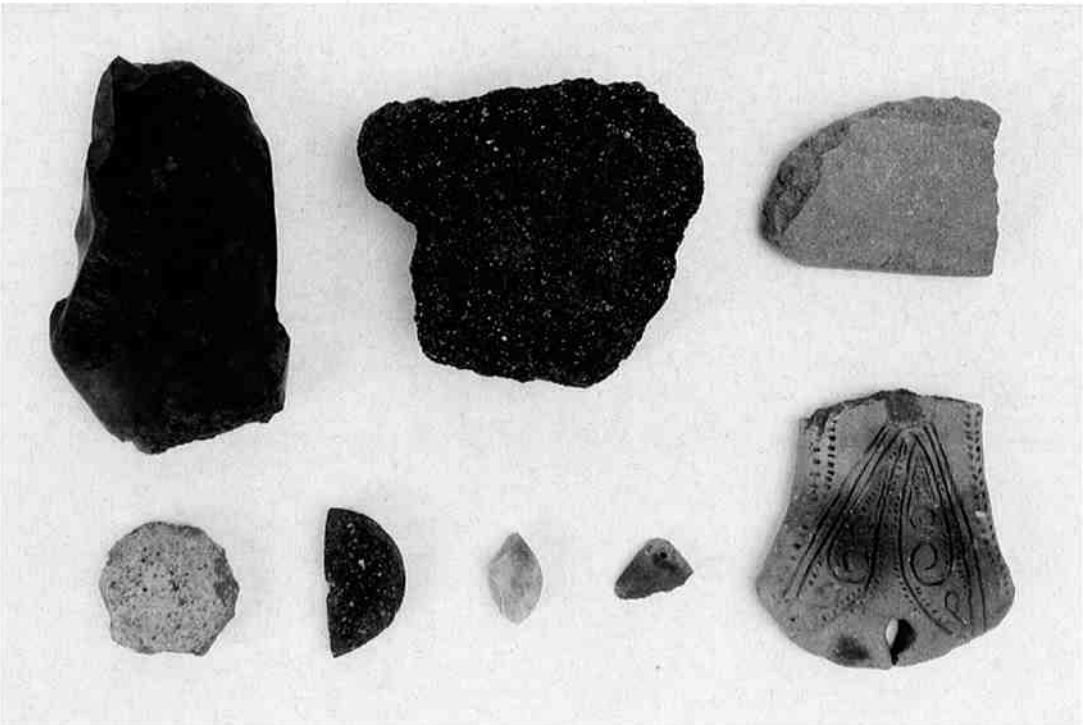
大館町遺跡第77・78次調査　遺物包含層出土遺物（3）



大館町遺跡第77・78次調査　遺物包含層出土遺物（4）

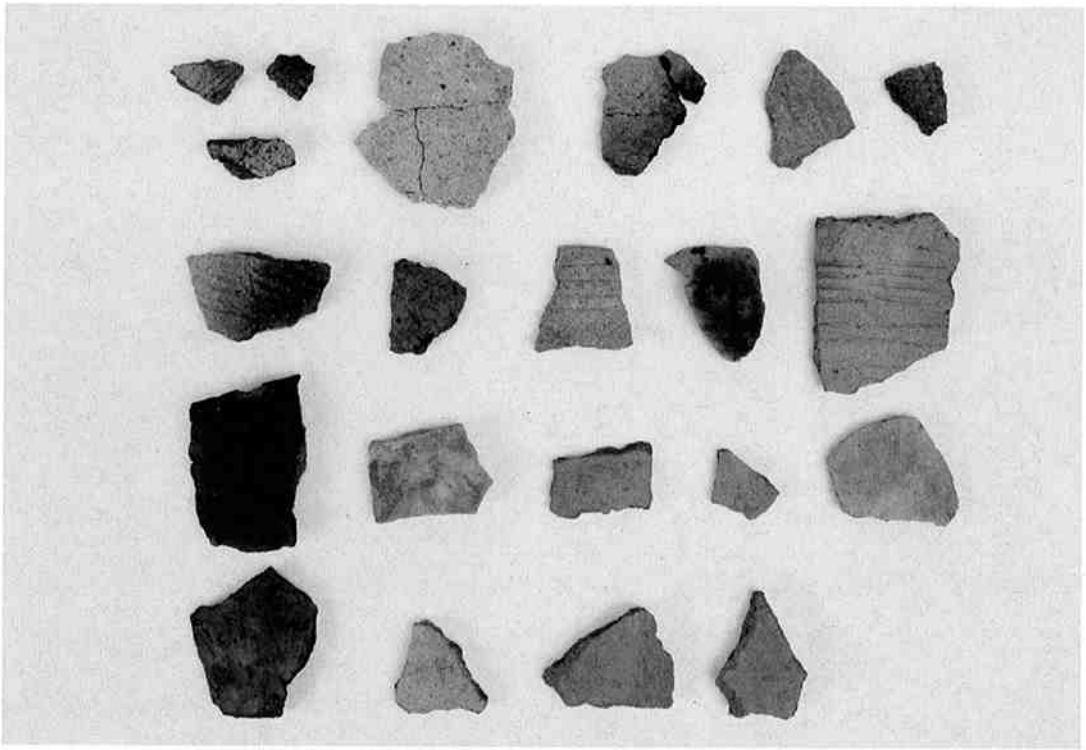


大館町遺跡第77・78次調査　遺物包含層出土遺物（5）

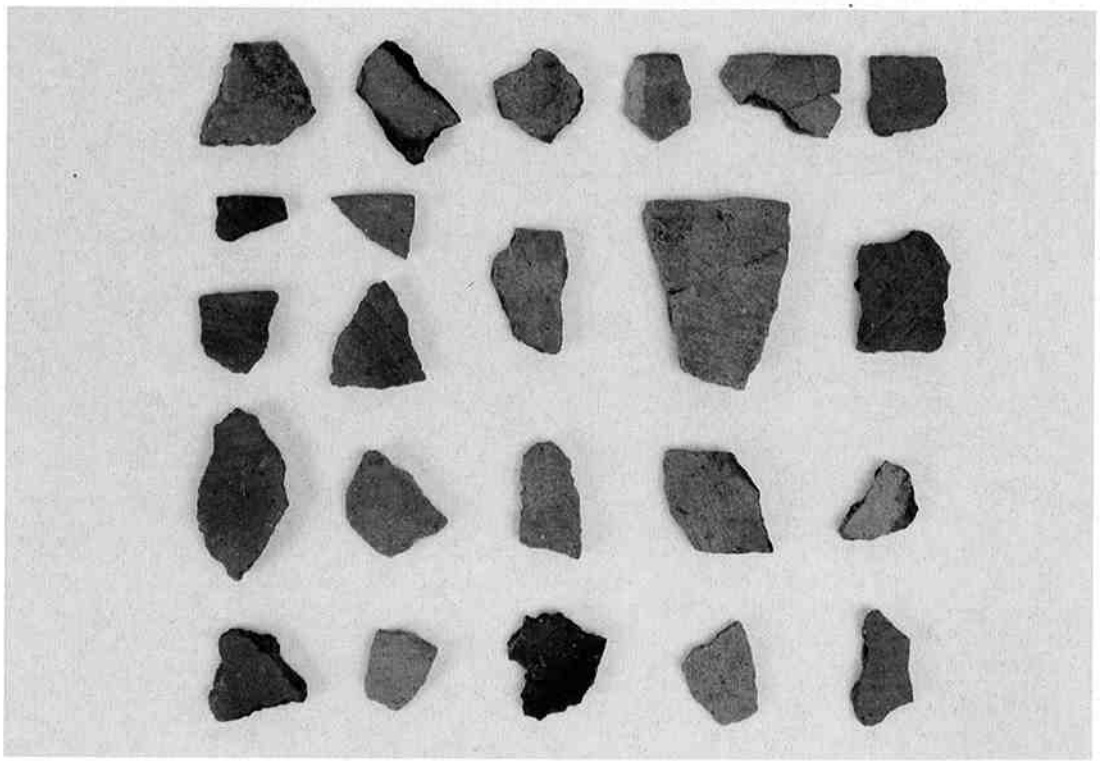


大館町遺跡第77・78次調査　遺物包含層出土遺物（6）

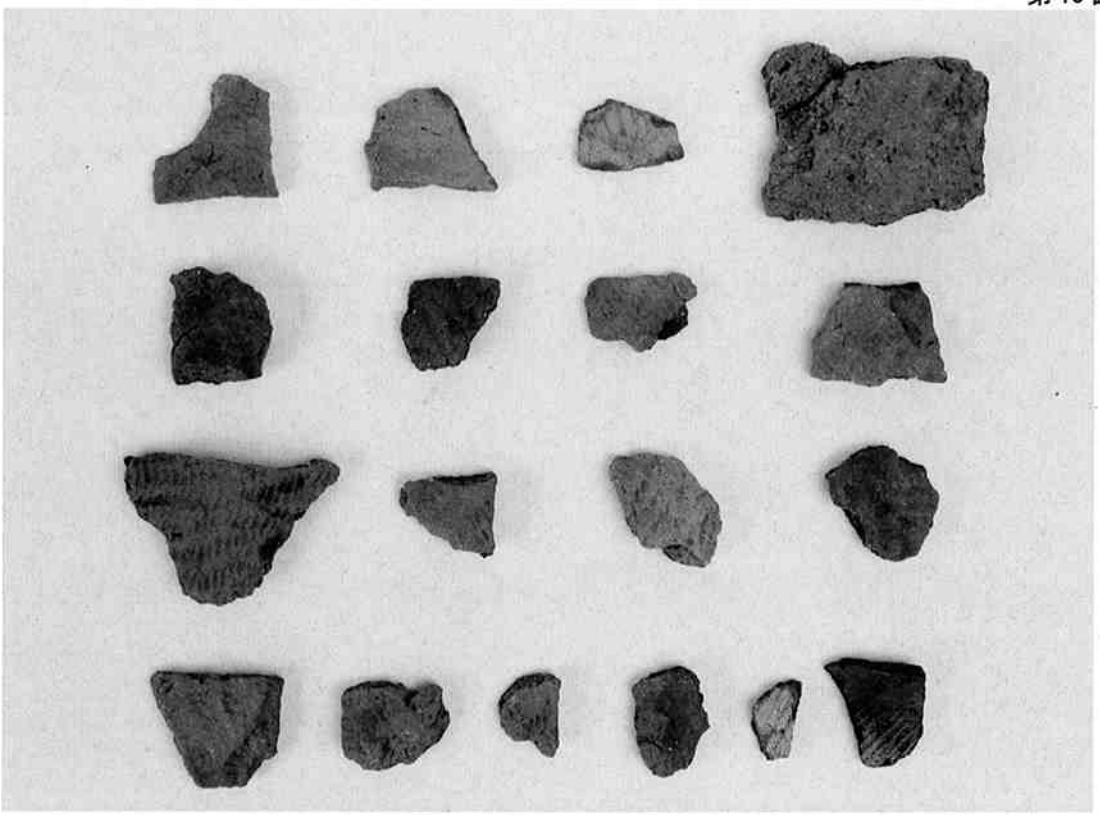
第 14 図版



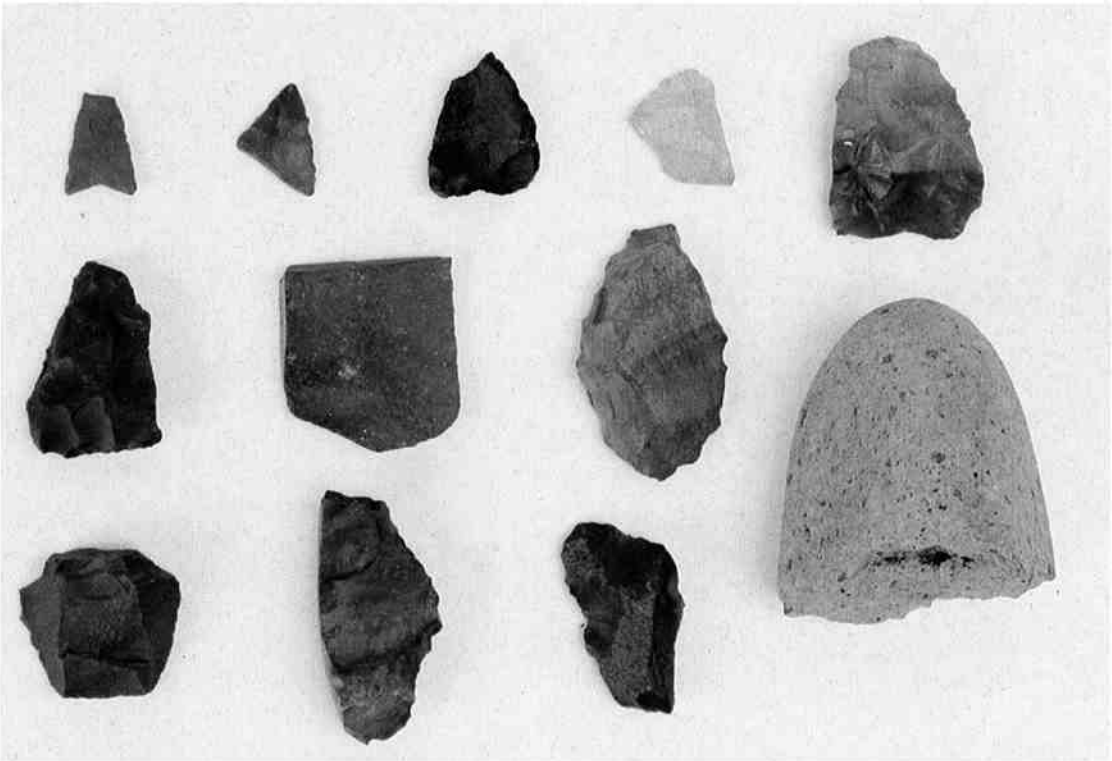
宿田遺跡第11次調査　包含層出土遺物（1）



宿田遺跡第11次調査　包含層出土遺物（2）

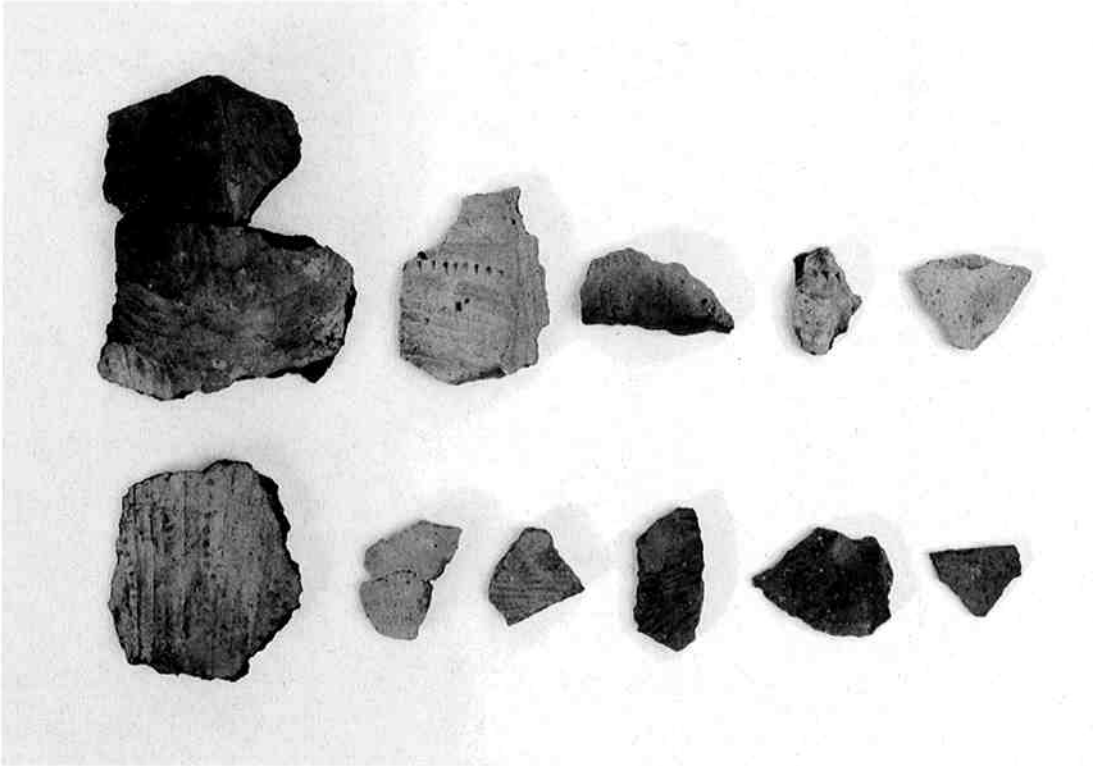


宿田遺跡第11次調査　包含層出土遺物（3）

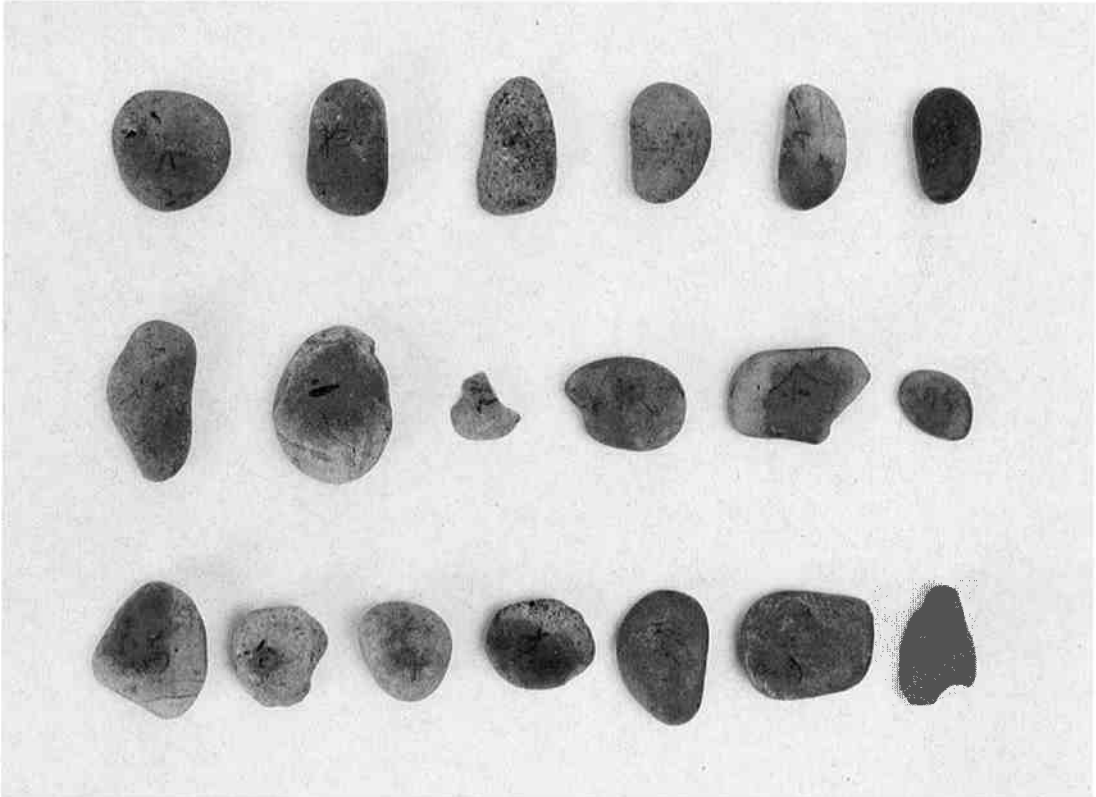


宿田遺跡第11次調査　包含層出土遺物（4）

第 16 図版

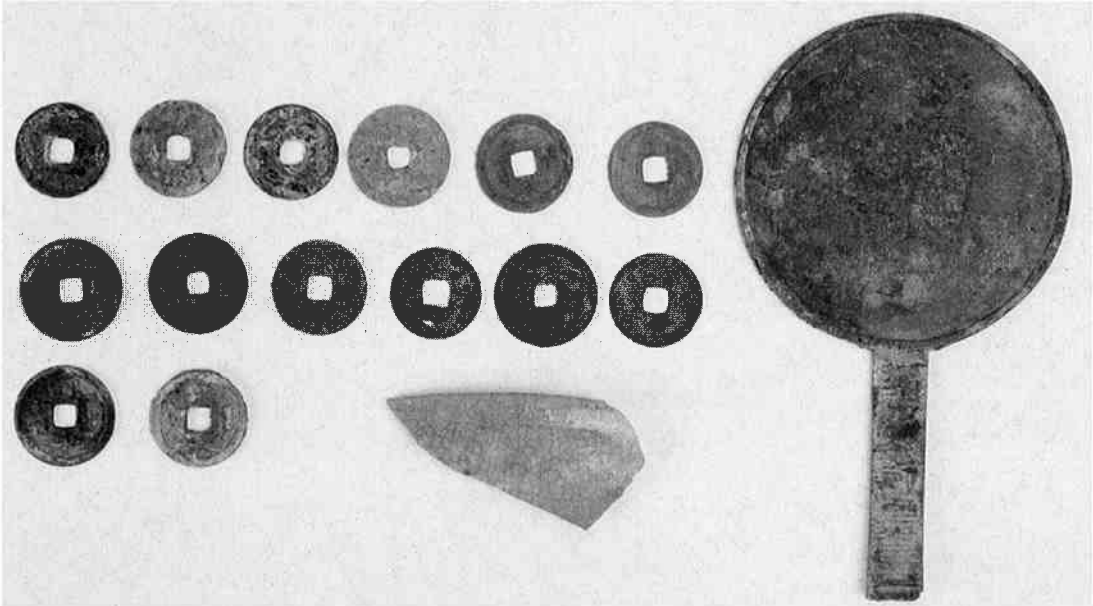


宿田南遺跡第9次調査　包含層出土遺物



宿田南遺跡第9次調査　一字一石経

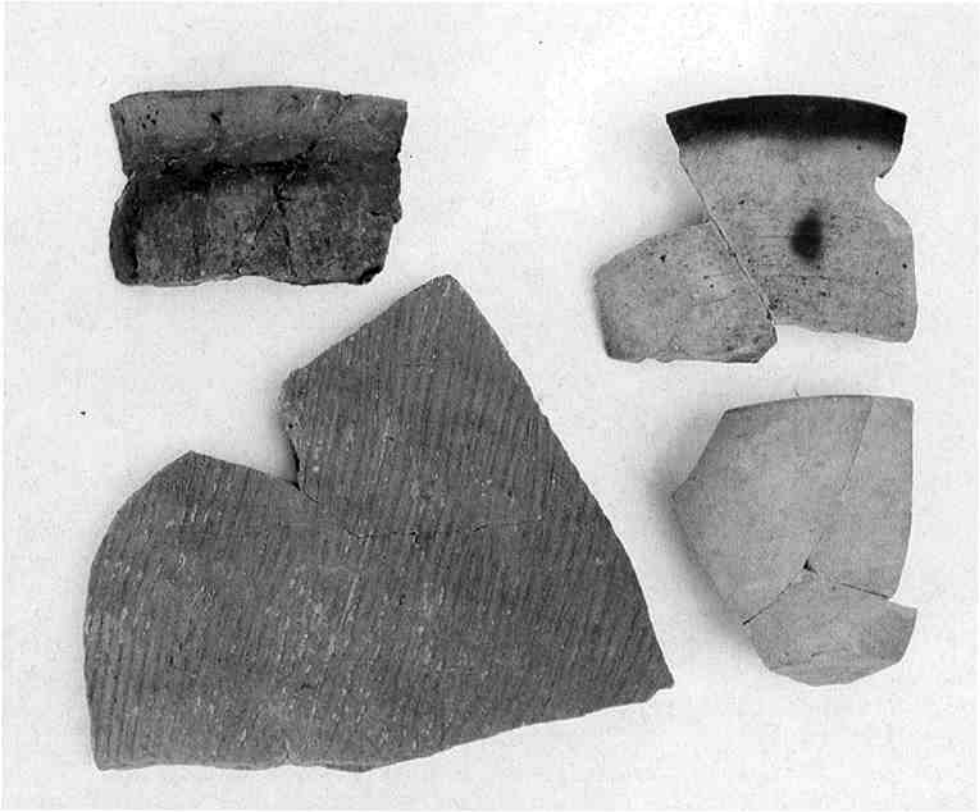
大宮北遺跡第11・13次調査　出土遺物



館遺跡第20次調査　出土遺物

西鹿渡遺跡第20・21次調査　出土遺物

第 18 図版



町田遺跡第15次調査　出土遺物

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | もりおかしないいせきぐん |
| 書名 | 「盛岡市内遺跡群」 |
| 副書名 | 平成18・19年度発掘調査報告 |
| 編著者名 | 佐々木亮二・今野公顕・鈴木賢治・浅沼のぞみ |
| 編集機関 | 盛岡市 遺跡の学び館 |
| 所在地 | 〒020-0866 岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地１ TEL019-635-6605 |
| 発行年月日 | 2008年3月31日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積<br>㎡ | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大館町遺跡 | 岩手県盛岡市大新町209-1、210の一部 | 3201 | | 39°42′48″ | 141°07′03″ | 第77次<br>2004.11.08～2004.12.14<br>2005.11.28～2005.12.21 | 570 | 範囲確認調査 |
| | | | | | | 第78次<br>2007.12.03～2007.12.14 | 218 | |
| 宿田遺跡 | 岩手県盛岡市前九年二丁目104-53 | | | 39°42′39″ | 141°07′02″ | 第11次<br>2007.04.27～2007.05.16 | 56 | 個人住宅建設 |
| 宿田南遺跡 | 岩手県盛岡市北夕顔瀬町38 | | | 39°42′38″ | 141°07′02″ | 第９次<br>2006.04.17～2006.06.21<br>2007.04.17～2007.08.02 | 126 | 個人駐車場建設 |
| 大宮北遺跡 | 岩手県盛岡市本宮字小幅5-1 | | | 39°41′09″ | 141°07′02″ | 第11次<br>2007.04.11～2007.04.24 | 1,009 | 個人住宅建設 |
| 館遺跡 | 岩手県盛岡市上太田舘58 | | | 39°41′32″ | 141°05′47″ | 第20次<br>2007.06.14～2007.07.24 | 106 | 個人住宅建設 |
| 西鹿渡遺跡 | 岩手県盛岡市三本柳２地割49-50～66 | | | 39°39′52″ | 141°09′49″ | 第20次<br>2006.07.31～2006.08.11 | 320 | 個人住宅建設および進入路 |
| | | | | | | 第21次<br>2007.04.16～2007.04.27 | 62 | |
| 町田遺跡 | 岩手県盛岡市乙部30地割39番１ | | | 39°36′52″ | 141°11′59″ | 第15次<br>2007.09.27～2007.10.03 | 67 | 個人住宅建設 |

| 所収遺跡名 | 種　別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 大館町遺跡<br>第77・78次 | 集落跡 | 縄文時代 | 竪穴住居跡　7<br>土　坑　7 | 縄文中期土器・石器 | 集落内の中央広場東側の竪穴住居域の広がりを確認した。 |
| | | 古代 | 溝　跡　2 | | |
| 宿田遺跡<br>第11次 | 集落跡 | 縄文時代 | 土　坑　6<br>遺物包含層 | 縄文早期土器・石器 | 東海産と考えられる５世紀代の「宇田型甕」の破片が出土した。 |
| 宿田南遺跡<br>第９次 | 集落跡 | 中世 | 経　塚　1 | 経石（多字一石経・一字一石経）、かわらけ、寛永通宝、煙管、手鏡、続縄文土器 | 県内初見の多字一石経を埋納した経塚と一字一石経が納められた近世土坑墓を確認した。 |
| | | 近世 | 土坑墓　27 | | |
| 大宮北遺跡<br>第11次 | 集落跡 | 平安時代 | 溝　跡　1 | 土師器・須恵器 | |
| 館遺跡<br>第20次 | 城郭跡 | 中世 | 堀　跡　2 | 瀬戸灰釉平碗片 | |
| | | 近世 | 溝　跡　2<br>土坑墓　10 | 寛永通宝、銅鏡 | |
| 西鹿渡遺跡<br>第20・21次 | 集落跡 | 奈良時代 | 竪穴住居跡　1<br>竪穴状遺構　1 | 土師器 | |
| 町田遺跡<br>第15次 | 集落跡 | 平安時代 | 竪穴住居跡　1 | 土師器・須恵器 | |

# 盛岡市内遺跡群

平成18・19年度発掘調査報告

発行　盛岡市遺跡の学び館
〒020-0866　岩手県盛岡市本宮字荒屋13番地1
TEL019-635-6600.

印刷　有限会社　グローカル
〒020-0822　岩手県盛岡市茶畑2丁目24－10
イーストジャパンビル2F